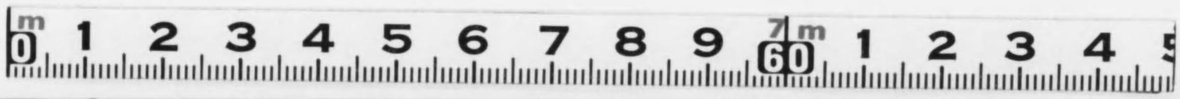


91336
Y86

913.36-Y867

1200500757360

913.36
Y86

源氏物語花の面影

吉田二男也 著

1007
13

本書原稿は、吉田先生多年御苦心の結晶でありましたが、時局の影響を受け、刊行中途で停頓してしまひましたので、私共は先生が昨年古稀に達せられたのを機に、先生三十六年勤續の記念として右刊行を繼續し、これを會員諸君に配布したいと計劃しました所、熱心な御賛成を得、幾多の隘路も打開して、目的を達成しましたこと、全く會員諸君の御蔭によるもので、こゝに深甚な感謝の意を表します。但し本月初旬帝都大火災の爲、樫村書店に保管中の印刷用紙五百部分と三色版口繪、寫眞版口繪の全部が燒失しましたこと遺憾の至、惡しからず御了承願ひます。

昭和二十年三月

吉田先生勤續記念會
發起者一同

はしがき

一　「源氏物語」は國粹文學の傑作なるのみならず、世界的に優秀なる小說なれども、今日になりては、その文章、極めて讀み難く解し難く、古來大家の心血を注ぎし註釋書に據りてこれを研究するも、容易なる事業にあらず。又その口語譯は讀み易けれども、艶麗優美なる文章の妙味を殆ど消失する憾あり。結局「源氏物語」も少數專門家の鑑賞に止るは、極めて遺憾なりといふべし。

一　こゝに於て著者は、原文と同一文體にて讀み易く解し易く改補し、文章の妙味も失はず、構想の巧妙も分明ならしめ、國粹文學普及の一助に供せんとす。

一　然れども文章の改補には自然に限度あり、若干の難語難句の殘るも止むを得ざれば、これらには、或はその語句の傍にて、或は本文の間に插入して、簡明なる解釋を加へたり。

一　「源氏」の構想の中には、今日の道德觀念より見て、到底許容し難き筋あり。これは全部削除せり。

一　「源氏」は五十四帖の長篇にて、これを通讀するは何人にも容易ならず。本書は興味深き初の十六帖を改補し、殘り三十八帖はその梗概を示すに止めたり。なほこの梗概篇も、文體は改補篇と同じくし、必要なる傍註插註も添へて、文章味の變ぜざる樣にし、また努めて無味乾燥に陷らざる樣工夫せり。

一　「源氏」時代は社會の狀態、今日と全然相違せるを以て、讀者は先づその大要を知り、然る後本文を讀めば、理解も容易なるを以て、本書は卷首に、「當時の世相」を添へ、家屋服飾等の插繪もこれに入れたり。

一　然れどもこの計劃は極めて困難なる大事業にて、淺學不才なる著者の能くする所にあらず。本書は缺點極めて多かるべく、これ著者が讀者諸君に對して、切に寬恕を請ふ所なり。

昭和十八年秋

吉田三男也

目次

紫式部と源氏物語……一
當時の世相……一

（改補篇）

桐壺　きりつぼ……一
帚木　はゝきぎ……二七
空蟬　うつせみ……六八
夕顔　ゆふがほ……七八
若紫　わかむらさき……一三四
末摘花　すゑつむはな……一六一
紅葉賀　もみぢのが……一九一
花宴　はなのえん……二一四
葵　あふひ……二三五

賢木　さかき・・・

幻　まぼろし……五六〇
雲隱　くもがくれ……五六四
匂宮　にほふのみや……五六四
紅梅　こうばい……五六六
竹河　たけかは……五六七
橋姫　はしひめ……五六九
椎本　しひがもと……五七二
總角　あげまき……五七五
早蕨　さわらび……五七九
宿木　やどりき……五八一
東屋　あづまや……五八四
浮舟　うきふね……五八八
蜻蛉　かげろふ……五九三
手習　てならひ……五九五
夢浮橋　ゆめのうきはし……五九九

紫式部と源氏物語

紫式部の父は越後守藤原爲時にて、母は攝津守藤原爲信の女なり。越後守も攝津守も位は從五位下なれば、當時にあつては中流の身分なり。爲時の家は代々和歌文章を以て世に知られ、式部は幼より聰明、兄が史記を學ぶ時、その傍にありて兄よりも早く習得せしかば、父は式部の男子ならざりしを憾とせりとぞ。然れども、國民學校の讀本に、「式部が男子なりしならんには、當時の風として漢詩漢文をのみ作り、源氏物語の如き國文の大傑作を書かざりしならん。」といへるは、蓋し卓說といふべし。

式部長じて式部丞藤原宣孝の妻となり、一女賢子を生めり。「紫式部」といふは宮中の呼び名にて、本名は終に傳はらず。始は「藤式部」と呼ばれしが、「源氏物語」を著して後、同書の女主人公なる「紫の上」の名に因んで、「紫式部」と呼ばれたる如し。賢子は後に正三位太宰大貳高階成章に嫁し、大貳三位と呼ばれ、和歌に巧なり。式部の夫藤原宣孝は一條天皇の長保三年に歿し、後數年、式部は一條天皇の中宮上東門院に事へ、漢文を進講せり。上東門院の父は卽ち藤原道長にて、當時權勢を振ひ、式部にも懸想せしが、式部はこれに應ぜざりき。

「源氏物語」は式部が上東門院に仕ふる前より着手せるものゝ如く、その完成までには相當永き歲月を

費せるなるべし。著作の動機については、「大齋院選子内親王より上東門院に、徒然を慰むる爲、物語を求められしかば、上東門院はその著作を式部に命じたり。」といひ、また、「式部、物語著作の念願を起し、近江の石山寺に參籠せし時、八月十五夜の月湖水に映じ、風景絶佳なりしを見て、先づ須磨、明石の二帖を作れり。」といひ、また、「父爲時が眞の作者にて、式部はこれに加筆せるに過ぎず。」といひ、「終の十帖即ち宇治十帖は、式部の女大貳三位の作なり」。といひ、諸說あれども、何れも確證なく、全篇五十四帖、式部の創意なるに疑なかるべし。その構想の複雜巧妙なる、文章の艶麗優美なるに至つては、古來既に定評あり。世界的傑作と推賞せらる。式部の著には、源氏物語の外に「紫式部日記」あり。女房の宮中生活の模樣と、式部の人物とを窺ふべく、式部の和歌の勅撰集に入りたるも五十數首に及べり。

當時の世相

○【公卿の榮華】　源氏物語の時代は公卿全盛の時代なり。天下泰平にして、公卿はその所管の政務を部下に委任し、己は詩歌管絃に耽り、風流優美を競ひ、花の朝、月の夕、その折々の情趣を弄ぶを以て一生の目的としたり。官職は世襲にあらざれば、次第に衰へ行く家もあり、俄に成り上れる人もあれど、權勢ある家門の子弟はおのづから昇進速なり。されば、かゝる血緣なきものは、權門勢家に伺候して、その家政に與り、參内、參詣等外出の行列に從ひ、特に親近せるものは、夜深き忍び通ひの御供にも離れず、公私混同甚だしきも、世人は更にこれを怪まず。

【官制】　中央政府としては、太政官ありて大政を統べ、こゝに太政大臣、左大臣、右大臣、大納言、中納言、左大辨、右大辨等あり。太政大臣は必ずしも置かず、又時に内大臣を置くことあり。主上御幼少の時は攝政を置き、御成長の後は攝政、職を辭し、關白に任ぜらる。大抵外祖父の任なり。この物語には關白の名なし。また中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大藏省、宮内省を八省といひ、國政を分掌す。八省の長官を卿といひ、その下に大輔、少輔、丞等あり。

また左近衞府、右近衞府、左衞門府、右衞門府、左兵衞府、右兵衞府あり。これを六衞府といふ。近衞府

の長官を大將といひて重職なり。大將の下に中將、少將等あり。衞門府、兵衞府の長官は督といひ、佐、尉等これに次ぐ。

八省、衞府に屬したる何寮、何職などいふ官衙も數多あり。この物語には、中務省の内藏寮、内匠寮、中宮職、式部省の大學寮、宮内省の修理職、衞府の右馬寮等散見す。寮の長官を頭といひ、職の長官を大夫、次官を亮といふ。また京を左京、右京に分ち、左京職、右京職を置き、この長官も亦大夫といふ。

地方官は、九州に太宰府ありて九國二島を管轄し、長官を帥といひ、大貳、少貳等これに次ぐ。諸國は長官を守といひ、介は次官なれども、守は在京し、介に事務を掌らしむることあり。この場合は介をも守といひたるらしく、この物語にては、守、介の區別明らかならざることあり。

大寶令發布後に置かれたる官職は、これを令外官といひ、前記中納言、中將の外、參議、藏人頭、檢非違使別當等あり。參議は宰相ともいふ。藏人頭は左右大辨よりなれる頭辨と、中將よりなれる頭中將とあり、また重職なり。檢非違使別當は京の警察裁判を掌り、その命令を勅命に准じたる重職なれど、この物語には見えず。

【官位相當】　大寶令によれば、諸臣の位階は三十等あり。一位より三位までは正、從に分れて六等、四位より八位までとその下の初位とは、各正、從、上、下に分るゝを以て二十四等あり。その中、四位より三位に上ることゝ、六位より五位に上ることゝは特に困難なり。また蔭子法ありて、父の位により子に位を授くることあり。例へば、一位の子は叙位の初に從五位下を賜はる如し。

一方各官職は太政大臣を始として、これに相當すべき位階の定あり。位階上らざれば官職も昇ることを得ず。これを官位相當といふ。今日の武官階級と軍職との關係の如し。主なる例は左の如し。

○太政大臣　從一位。　○左右大臣　二位。
○大納言、中納言、近衞大將。　三位。
○八省卿、衞門督、兵衞督、近衞中將　四位。
○國守　五位より六位。

【貴族の驕奢】　大寶令に祿位令あり、諸臣の俸祿を定め、位による位田、官職による職田あり。當時貨幣の鑄造なきにあらざれども、その數は甚だ少きが如く、一般の取引に用ひしは、稻、織物の二種にして、租稅も俸祿も皆これを用ひ、賣買もこれを媒介とす。大化改新以來全國の土地は悉く朝廷の土地、これを耕作する人民は朝廷の民にして、これを公地公民と稱し、諸臣に賜はる位田職田といふも、その租稅を給せられたるなり。然るに皇族、公卿、寺社等、或は開墾により、或は恩賜その他により、土地を私有することやうやく行はれ、これを莊園といひ、莊園に耕作する人民は、その領主の私民とす。莊園は年を追うて次第に增加し、公卿等はこれに依りて驕奢を極む。

國司はその身分高きにあらざれども、その管國に土地を開墾などして、富裕なる生活を營むものあ

り。この物語に散見する受領は卽ち國司なり。

【女御更衣】　女御は女官中位最も高く、更衣これに次ぐ。この物語にては女御の中より皇后を定めらるゝを例とし、皇后を大抵中宮と稱す。女御にても更衣にても皇子女御誕生ある時は、御息所といふ。女御更衣の數は定まりなし。所生の皇子御位に卽き給へば、御息所は皇太后となり、かくて外戚となりし家は大臣大將に昇り一家繁榮するを以て、貴族の家にては特に女子の誕生を悅べり。

【女房、乳母】　女房はもと宮中にて女官の室をいひしが如く、後には女官その人を指すことゝなり、更に宮中以外にても貴族の侍女をいふことゝなれり。女房の名は父、夫などの官名を用ふること多く、一見男に紛れ易し。この物語にては、中將、少將、中納言、少納言、宰相、侍從、右近等あり。いづれも相當に教育あり、折に觸れて和歌の應酬など拙からず。また女房は未婚とは限らず。

貴族に子女誕生すれば、乳母を定む。乳母は必ずしも乳を以て哺育する人にはあらず、主として養育に當るものなれば、その人を選び、またその愛の濃やかなること生母に異らざるを常とす。

【元服、裳着】　男女とも三歳より五六歳の頃、袴着の式あり。始めて袴を着くる祝なり。十二歳より十三四歳頃、男子に元服、女子に裳着の式あり。男子の元服には、髮を取り上げて結ひ、冠を被らしむ。これを引入れといひ、この役を勤むる人を主賓として宴を張る。女子の裳着には主賓、裳を腰に結ふ。これを腰結といふ。この物語にては、女子の袴着をも裳着といふ。

【男女の關係】　容貌の美しき女子の愛せらるゝは、古今同じけれども、この時代は特に美髮を重んじたり。當時女子は下げ髮にて、髮の多く長きは美貌の要件とせられ、身長より長き人もあり。容貌の外、才藝もまた大切にして、和歌を第一とし、手蹟、琴琵琶などの管絃、圍碁双六等の遊技より裁縫染織の技にも通ぜざるべからず。されば、我が女の出世を望むものは、力をその教育に盡したり。

當時女子は人に顏を見せざる風俗にて、客に接するには几帳を隔て、車には簾を垂れ、父母、夫、親近の女房の外は同一邸内にあるものといへども、その容貌を見ることなし。されば男の女に言寄る場合は、親しき女房などよりその容貌の美しく、才藝の優れたるを聞き、琴の音、琵琶の聲など余所ながら聞き、手蹟を見などして心を動かし、かの女房などを手引として艶書を贈る。艶書には和歌を詠み、季節内容にふさはしき木草の花などを添ふ。新婚三日間は續きて男より通ふ例なり。三日目には餅を祝ふ。この際別に目立ちたる儀式なし。その後も男の方より通ふ。されば子女誕生しても妻の家にてこれを養育す。一夫多妻の時代なれば、一人の男、數多の女に通ふこと普通にて、年やうやく積るに及んで、正妻と定めたる女と同棲する風俗なり。

【詩歌管絃】　和歌は極めて盛にして、男女共にこれに通ぜざるものなく、思慕哀樂の切なる情はもとより、往くも返るも和歌、見るもの聞くもの悉く和歌、生涯すべて和歌なる感あり。優にやさしき性情も畢竟これによりて育成せられたるなり。勅撰集は、古今集、後撰集、拾遺集。私撰集は、萬葉集、

古今十帖等多く引用せらる。漢詩は唐の白樂天の詩集なる白氏文集廣く行はれたり。

また謠物としては、和漢朗詠集、催馬樂あり。和漢朗詠集は、和歌漢詩の中より曲節を附して謠ふに適したる名歌秀句を選びたるものなり。催馬樂はもと俚謠なりしものゝ如く、數十曲あり。和歌などをもこの曲節にて謠ふことあり。その歌詞は文章にも盛に引用せらる。

管絃の中普通なるは、笛、笙、和琴、琴、箏、琵琶等なり。和琴は東琴ともいひ、六絃なり。琴は、琴の琴ともいひ、七絃、箏は、箏の琴ともいひ、十三絃、琵琶は四絃なり。

【平安京】　東は賀茂川、西は桂川の間にありて、東西四十四町、南北四十九町、周圍約五里あり。東西に通ずる大路は、北より一條、二條と數へ行きて九條に至り、一條と二條との間は、その中に大内裏あるを以て特に廣けれども、二條以下は、各條の間同じ幅さなり。大内裏の正門を朱雀門といひ、これより南に通ずる大路を、朱雀大路といひ、その九條大路にて終れる所に羅城門あり。朱雀大路と並びて東に、大宮大路、西洞院大路、東洞院大路、東京極大路あり。朱雀大路の西には、西大宮大路、道祖大路、木辻大路、西京極大路あり、これら南北に通ずる大路も亦九條あり。大路と大路の間に數多の小路あり。排水路としては、東に東堀川、西に西堀川等あり。平安京は朱雀大路を以て、左京と右京に分ち、左京職、右京職等を置きてこれを治めしめたれども、右京は濕地なりしを以て發展せず。京は左京より賀茂川を越えて東山の麓に廣がりたれば、古京の眞の位置は今の京都に近かりしなるべし。

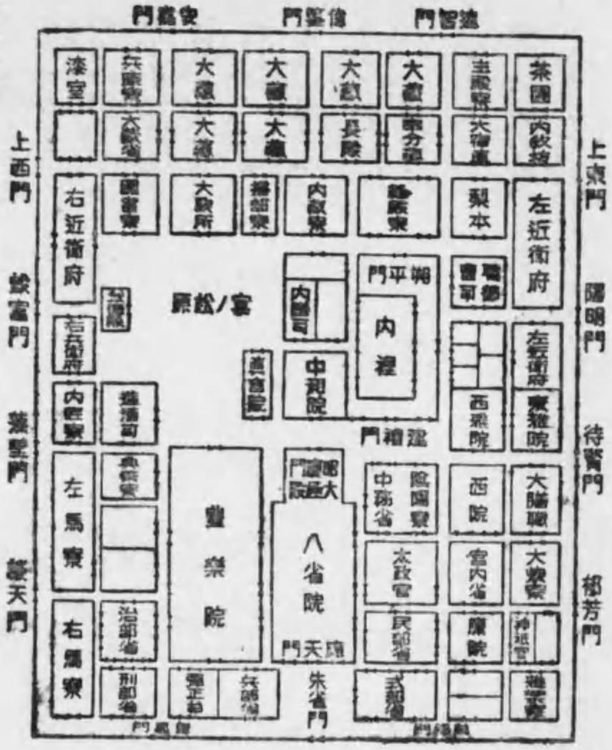
女流文學者の輩出

當時女流文學者甚だ多く、和歌に文學に名篇傑作を後世に殘したるもの少からず、我が國文學上の一大異彩たり。畢竟當時の藤原氏等は競つてその女を宮中に仕へさせ、皇子御誕生御卽位になれば、己れ攝政關白となりて權勢を擅にせんとし、その女の參内に當りては、服飾その他を華麗ならしむるは勿論、才藝に優れたる婦人を聘してそれに侍せしめ、これ等の婦人も亦これによりて官位を昇進せしめらるゝにより、中流の朝臣もその女の教育に意を用ふるに至りたる爲にて、又當時假名の使用普及し、國文やうやく盛になりたれども、男子は一般に漢文を用ひたるより、國文は主に女の文章となり、假名を女文字と稱する程なりしより、かく女流文學者の輩出を見るに至れるなり。

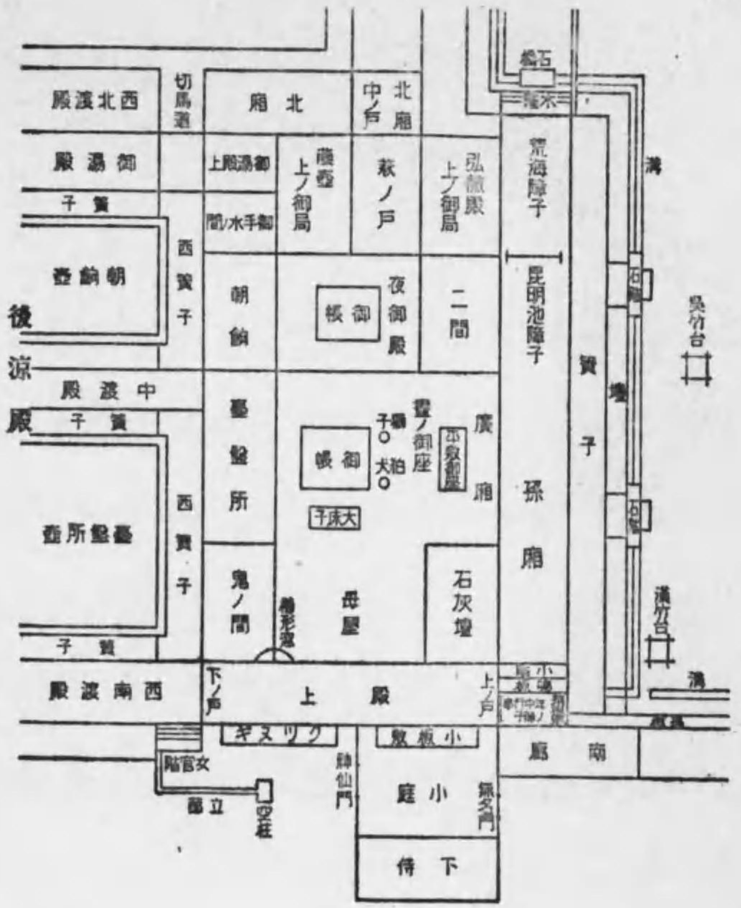
女流文學者の著名なるは、紫式部、清少納言、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔、大貳三位、小式部内侍等にして、清少納言は少納言清原元輔の女、本名は傳はらず。父元輔は後撰集撰者の一人なれば、當時一流の歌人なり。少納言の著「枕の草子」は、著者の見聞感想を何となく書き集めたる隨筆にして、その觀察の卓越奇拔なる、その文章の雄健巧妙なる、後世隨筆の模範として「源氏物語」と並び稱せらる。

假名文歷史の始と稱せらるゝ「榮花物語」は藤原道長の榮華を述べたるものにて、赤染衛門の作と傳へられ、大貳三位は紫式部の女にして、小說「狹衣物語」の著者と稱せらる。和泉式部には「和泉式部日記」あり。小式部内侍は和泉式部の女。これら女流文學者の和歌の今日に傳稱せらるゝもの極めて多し。

第一圖　大内裏


上西門
上東門
朱雀門
朱雀門
豐楽院
八省院
内裏
内侍所
中務省
式部省
民部省
大蔵省
宮内省
左近衛府
右近衛府
左馬寮
右馬寮
左兵衛府
右兵衛府
大学寮
典薬寮
陰陽寮
内膳司
内蔵寮
内匠寮
造酒司
雅楽寮
左衛門府
右衛門府
左弁官
右弁官
内記
中務省
式部省
治部省
民部省
刑部省
大蔵省
宮内省
大炊寮
主殿寮
掃部寮
織部寮
正親司
内蔵寮
縫殿寮
典侍
掌侍
内侍
蔵人所
侍従所
殿上人
内侍所
内侍司
中務省
内侍司
内侍所
内侍司
内侍所
内侍司
内侍所

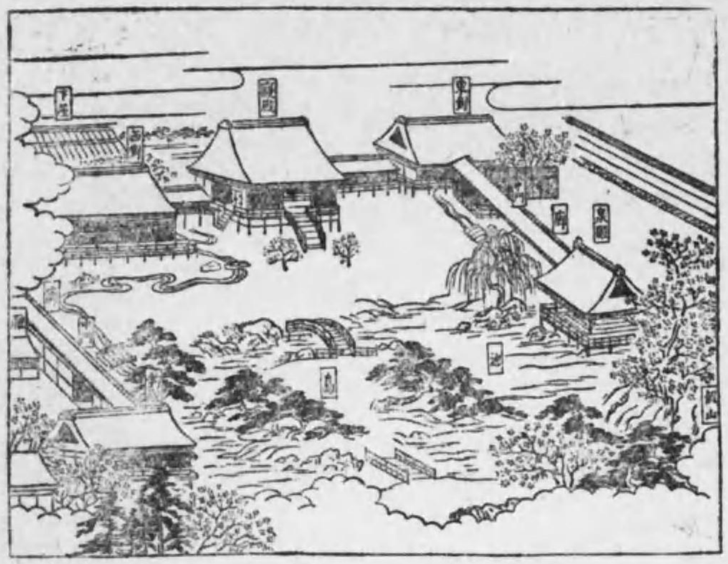
清涼殿略圖



今の京都御所の紫宸殿は、東西九丈、南北七丈五尺あり、柱と柱との間九尺づゝなりといふ。

清涼殿は、主上御起居の殿、校書殿は、圖書を納むる所なれども、後こゝに藏人所を設けられ、機密の文書を掌らしめられたり。溫明殿は、内侍所ともいひ、

寢殿造圖

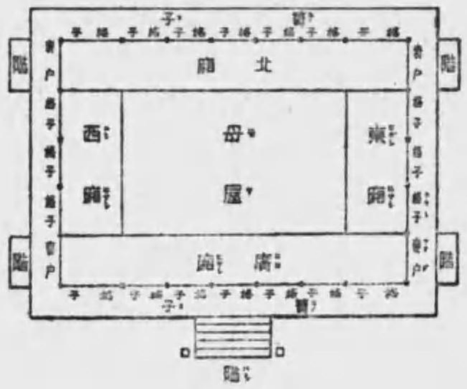


神器を奉安せる殿、綾綺殿は、内宴（詩會）、御神樂などの殿なり。

この他、この物語に、後涼殿、弘徽殿、登花殿、麗景殿、承香殿等の諸殿、飛香舍（藤壺）、淑景舍（桐壺）等諸舍の名見ゆ。いづれも女御、更衣など女官の局にて、中にも、弘徽殿、桐壺、藤壺はしばしば見ゆ。

【清涼殿】　「御帳」は、「畫の御座の間」と「夜の御殿」と二箇所にあり。「石灰壇」は、石灰にて塗り固め、「畫の御座」と同じ高さにしたる所にて、主上、毎朝伊勢神宮、内侍所を遙拜し給ふ所なり。「大床子」は御膳の臺を置く所。「殿上の間」は公卿の伺候する所。「櫛形窓」は、主上、殿上伺候の公卿を覗き給ふ所。「鬼の間」は、壁に鬼の繪を描きたる故にいふ。「臺盤所」は御料理の間に

第五圖　寢殿造平面



て、女房伺候す。「朝餉」は御膳の間。「朝餉」にては、水を多くして炊ぎし姫飯を供へ奉り、「大床子」にては强飯を供へ奉るといふ。「二の間」は加持の僧の居る間なり。また「朝餉」「臺盤所」の西にある「壺」は庭なり。（第三圖）

【寢殿造】　中央にあるを「寢殿」といひ、即ち本殿なり。東に「東の對」、西に「西の對」、北に「北の對」あり。前頁圖中「北の對」は「寢殿」に隱れて見えず。主人は「寢殿」に起居し、對の屋は家族の居室なり。池に臨めるは「釣殿」「泉殿」。これらは管絃など遊樂に用ふることあり。池は廣くして舟を浮ぶることあり。池の中に「中島」あり、松を植う。「釣殿」に近く見ゆる小屋は「車宿」といひて、車置場なり。庭内を流れて池に注ぐ水を、「遣水」といふ。後方の下屋は、數多く、「北の對」「東の對」の後にもあり。男女召使の住所なり。また右上の隅に斜に見ゆるは瓦を葺きたる土塀にして、これを「築土」といふ。寢殿と東西の對の間などゝの廊は廣くして、部屋にも用ひ、これを「渡殿」といふ。また階の左右に二本の柱を立てゝ屋根を葺く。これを「階隱し」といふ。

階を上れば廻り廊あり。これを「簀子」といひて、「板敷」なり。外に欄干あり。これを、「勾欄」といふ。「簀子」の内を「廂」といひ、部屋なり。「簀子」と「廂」との間に柱あり。柱と柱との間に「格子」あり。上下二枚に分れ、上半は晝間、外に吊り上ぐ。格子の内に簾あり。「廂」と「母屋」との間に「長押」ありて、「母屋」の床は一段高し。「母屋」は、障子などにて仕切る。障子は今の襖にて、光を透さず。障子には衝立樣のものもあり。（第四、五圖）

【束帶姿】　「束帶」は公卿の正裝にて、「冠」の後に垂れたるを「纓」といふ。「袍」は「うへのきぬ」ともいひ、紋織を用ふ。「襴」を附く。「平緒」は糸を組みて作れる平たき紐にて、腰を卷き、前の方袴の上に垂る。花鳥など繡あり。「袍」の下には「半臂」を着る。「半臂」は袖無しなり。「半臂」の下に「下襲」を着る。「下襲」の後に「裾」を綴ぢ附けあり、後に長く曳く。「裾」の長さは身分によりて差あり。太政大臣は二丈なり。「下襲」の下に「袙」を着、「袙」の下に「單」を着る。即ち下着なり。「單」の下に「小袖」を着る。これは肌着なり。「袍」の上に「石帶」を締む。「束帶」とは、「石帶」にて束ぬる意なりといふ。「石帶」は漆を塗りたる革帶に種々の寶石を縫ひ附けたるものなり。

袴は二枚、上なるを「表袴」といひ、下なるを「大口」といふ。足には絹にて作れる「襪」を穿き、更に革にて作れる「沓」を穿く。この「沓」を「靴の沓」といふ。また腰に「太刀」を佩び、「魚袋」を

第六圖
束帶姿

も、冠を用ふることもあり。直衣はその縫方、大體束帶の袍と同じなれど、切地と織紋に差あり。帶は「腰帶」を用ふ。直衣と同じ切地にて造る。袴は「指貫」を用ふ。「指貫」は裾に紐を通してあり、これにて括る。

佩び、手に「笏」を持つ。「魚袋」は、魚の形を金銀にて現したる小さき箱なり。

また「衣冠」といふは、「束帶」の「下襲」「裾」を省き、袴は「指貫」を用ひ、「石帶」の代に「腰帶」を用ひたるをいふ。

【直衣姿】　直衣には大抵立烏帽子を用ふれど

第七圖
直衣姿

第八圖
狩衣姿

袍」といふ。平緒、表袴を着け、太刀を佩き、弓箭を帶す。

隨身は朝廷より高位高官に賜る護衛の武官にして、近衛府の舍人なり。上皇十四人、攝政、關白十人、大臣、大將八人、納言、參議六人、中將、衛門督、兵衛督四人、少將、衛門佐、兵衛佐二人なり。

【狩衣姿】　もと鷹狩用なりしが、後には禮服の一となれり。袖に袖括あり。袴は直衣姿と同じく「指貫」を用ふ。

【隨身姿】　冠を被り、兩頰に緌あり。上衣は袖と身の間、即ち腋を縫はず。これを「闕腋

第九圖
隨身姿

【唐衣姿】　唐衣姿は女子の正裝にて、最も上なるを「唐衣」といひ、長短く腰までなり。「唐衣」の下に「袿」を着る。「袿」の下に、同じ色の袷を五枚重ぬるを、「五衣」といひ、表と裏と色を異にし、これを「重」又は「色目」といふ。表白、裏青は「柳」、表白、裏蘇芳は「櫻」など、それ〳〵に名あり。「蘇芳」はやゝ暗き紅なり。「五衣」を「重袿」ともいふ。「五衣」の下に「打衣」を着る。「打衣」は、

第一〇圖　唐衣姿

綾織を打ちて光澤を出したるなり。「打衣」の下に「單」を着る。即ち下着なり。袴は「緋の袴」を用ふ。腰に「裳」を着く。「裳」はひだあり、白き絹織に樣々の模樣を畫く。「裳」の腰を「大腰」といひ、左右に垂れたるを「引腰」、前に結びたるを「小腰」といふ。

髮は垂髮にして額に「釵子」を結ぶ。これを「簪」ともいふ。また「櫛」を差す。手には「袍扇」を持つ。「袍扇」は檜扇の一種にて、檜の薄き板を綴ぢて作る。綴ぢたる紐は端より垂れ、こゝに「糸花」を着く。「糸花」は糸を花形に結びたるものなり。

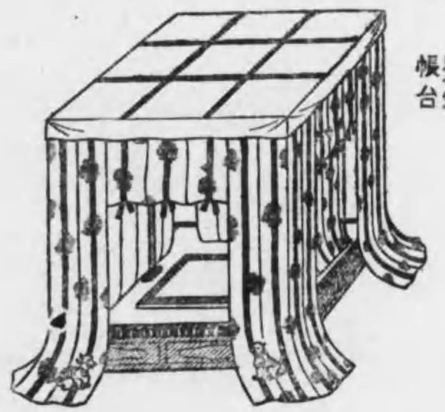
第一一圖

【袿姿、小袿姿】　女子の正裝の中、「唐衣」と「裳」とを除きたるを「袿姿」といひて、男子の「直衣姿」に當る。「袿」は下賜用として大きく裁ち縫ひしたる「大袿」に對して、「小袿」といふことあり。

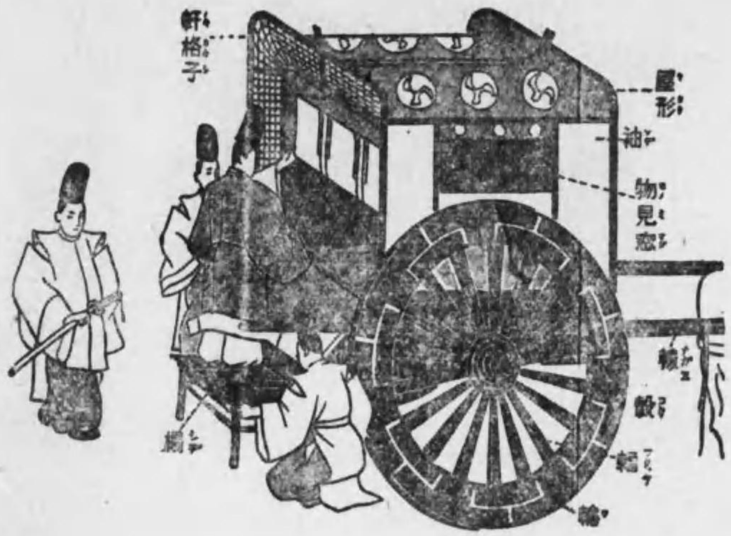
【車】　車は牛に曳かしむ。「牛車」といふ。牛を御するものを「牛飼」といふ。「網代」は、檜の薄く細き片木、又は細く割きたる竹を縦横に綾に組みたるをいひ、「網代」にて張りたる車を、「網代車」といふ。「檳榔毛車」は、檳榔の葉を細く割きて車の庇に垂れたる車、「糸毛車」は、よりたる糸を庇に垂れたる車なり。「榻」は車に乗る時の臺ともし、牛を外したる時、「轅」を載する臺ともす。

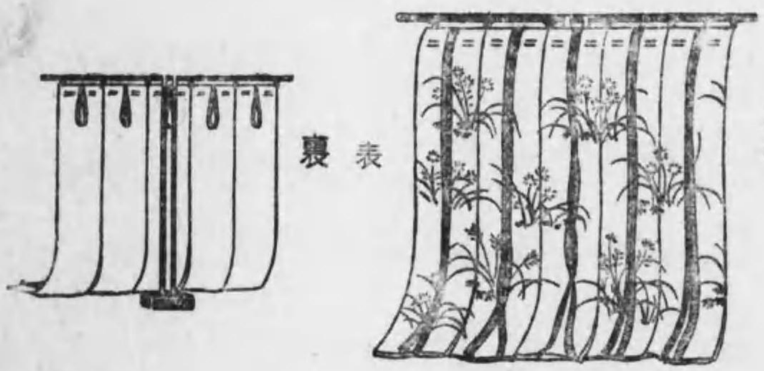
【帳臺、几帳】　帳臺は御帳ともいひ、寝殿にても對の屋にても、奥の間なる母屋に設けて、晝間の

第一二圖

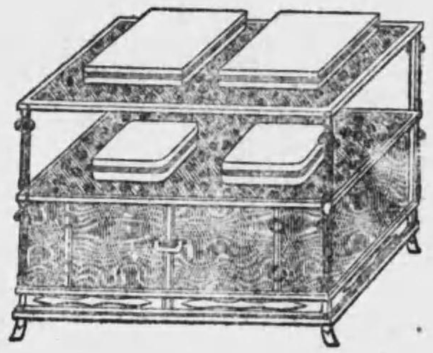


第一三圖　帳台





第一四圖



座又は寢所とす。縱横共に九尺、四面に帳を垂る。帳は、夏は生絹を用ひ各は練絹を用ふ。中に高さ二尺の床あり、疊二枚を敷く。

几帳は座の前に置きて内外の隔とする具。臺の上に柱を立て、横木を架し、帷子を垂る。帷子は絹織にて單なり。紋織を用ふ。婦人は人に顔を見せぬ風俗なるを以て、人に會ふには必ず几帳を置く。

【厨子、鏡】　厨子は書籍、料紙、硯箱等の文房具を置く家具にして棚あり、又開き戸あり。鏡は金屬にて作る。

改補篇

桐壺　きりつぼ

いづれの御時にか、○女御、更衣、數多さぶらひ給ひける中に、

○女御、更衣　何れも女官。女御は更衣より貴く、この物語にては、皇后は女御の中より選び給ふを例とす。

いとやむごとなき際にはあらねど、優れて時めき給ふ更衣ありけり。始より我はと思ひ上り給へる女御などは、目覺しきものに貶しめ猜み、同じ程、またはそれより下の更衣達は、まして安からず思へば、朝夕の宮仕につけて人の心を動かし、恨を負ふことの積にやありけむ、いとあつしくなり行き、物心細げに里住がちなるを、帝はいよ〳〵飽かず哀れなるものに思して、人の謗をも憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。○上達部、殿上人なども、

○上達部、殿上人　上達部は公卿。殿上人は昇殿を許されたる人なり。

あいなく目を側めつゝ、いとまばゆき程の御覺なり。唐土にもかゝる事の起りよりこそ世も亂れ惡しかりけれと、やう〳〵天の下にもあぢきなう、人のもて惱み種になりて、○楊貴妃の例も引き出でつべうなり行くに、

○楊貴妃、　楊氏の女、貴妃は女官の名。唐の玄宗皇帝の寵妃にて、美人の聞え高く、玄宗その愛に溺れしより、終に天下の大亂となれり。

更衣もいとはしたなきこと多かれど、帝の忝き御志の類なきを頼みにて交らひ給ふ。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ古の由ある人にて、親もうち具し、さしあたりて世の覺え華やかなる女御などにも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、取り立てゝはか〳〵しき御後見の人しなければ、事とある時はなほ寄り所なく心細げなり。

前の世にも御契や深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。帝もいつしかと心許なう思し給ひて、急ぎ内裏に參らせて御覽ずるに、珍らかなる御容貌なり。一の御子は右の大臣の御女、弘徽殿の女御の御腹にて、御後見重く、疑もなき儲の君とかしづき奉れど、この男御子の御匂には並び給ふべくもあらざりければ、帝も一の御子は大方にやむごとなく思ひ給ふばかりにて、この御子をば私物に思して、かしづき給ふこと限りなし。更衣は始よりなみ〳〵の上宮仕し給ふ際にはあらず。

○上宮仕、　帝の御側にありて日常の御用を勤むる宮女をいふ。

帝の御覺いとやむごとなく、いみじく纏はし給ふあまりに、さるべき御遊の折々、何事も故ある節々には、まづ參う上らせ給ひ、或時は、帝大殿籠り過し給ふにもさぶらはせ給ふなど、あながちに御前去らせずもてなし給ひし程に、おのづから輕々しきやうにも見えしかど、

○輕々しきやうにも、　この頃は、女御更衣それ〳〵御局あり。帝はそこに渡り給ふ例なりしかば、かく帝の御殿に上りて御側に勤むるは、輕々しきやうに思はれしなり。

この御子生れ給ひて後は、いと心殊に掟て給へば、弘徽殿の女御は、ようせずば、この御子坊にも居給ふべきなゝめりと思し疑へり。この女御は人より先に内裏に參り給ひて、帝もやむごとなく思し、御子などもおはしませば、この御諫をのみぞ煩はしく心苦しう思し給ひける。

更衣は畏き御蔭を頼みまゐらせながら、侮り疵を求むる人の多く、我が身はかよわく物はかなき有樣なれば、なか〳〵なる物思をぞし給ふ。御局は桐壺なり。

○桐壺　淑景舍ともいふ。（「當時の世相」第二圖）

○本篇の題はこれによる。またこの帝を「桐壺の帝」といふもこれによる。

數多の御方々の御局を過ぎさせ給ひつゝ、隙なき御前渡りに人の心を動かすも道理と見えたり。參う上り給ふにも、あまりうち頻る折々は、○打橋、渡殿、

○打橋、渡殿、　打橋は廊などの切れたる所に假に渡したる橋。渡殿は殿と殿とを連ぬる廊の間。

こゝかしこに怪しき事をし置きて、御送迎の人々の裳、衣の裾など、堪へ難う汚しぬることゞもあり。

○裳　婦人の禮裝として腰より後に垂れし絹布。白き絹に模樣など描く。（「當時の世相」第十圖）

また或時は　えさらぬ馬道の戸を鎖し籠めなど、

○馬道　もと殿の中に馬を曳き入るゝ爲の土間。常は板を敷きて廊とす。

こなたかなた心を合はせてはしたなめ煩はす時も多かり。事に觸れて數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、帝いとゞ哀れと御覽じて、もとより後涼殿にさぶらひ給ひし更衣のありけるを、その御局を外に移させ給ひて、

○後涼殿　主上常の御殿なる清涼殿の西につゞきて近し。

この更衣の上局に賜はす。その恨みましてやらむ方なし。この御子三つになり給ふ年、御袴着の事、一の宮に奉りしに劣らず。

○御袴着　始めて袴を着くる祝。三歳より七歳の間に行ふ。

内藏寮、納殿の物を盡して、いみじう嚴めしくせさせ給ふ。

○内藏寮、納殿　内藏寮は金銀珠玉、御服等を掌る。納殿は代々の御物を納め置く所。

それにつけても世の謗のみ多かれど、この御子の大人びておはします御容貌、御心ばへなどの珍しきまでに見え給へば、誰も猜みあへず。物の心知り給ふ人は、かゝる人もこの世に出でおはするものなりけ

りと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所はかなき御心地に煩ひて、

○御息所　皇子皇女を生み奉りたる女御更衣を御息所といふ。こゝにては桐壺の更衣なり。

まかンでなむとし給へど、帝は暇更に許させ給はず。年頃常の病になり給へれば、御目馴れて、「なほ暫しこゝにて試みよ。」とのみ宣はするに、日々に重り給ひて、たゞ五六日の程にいと弱うなれば、母君泣く〳〵奏してまかンでさせ奉り給ふ。かゝる折にも思ひ寄らぬ耻もこそと心遣ひして、御子をば內裏に止め奉りて、忍びて出で給ふ。限りあれば帝もさのみは止めさせあへず、御覽じ送りだにし給はぬ心許なさを、いふ方なく思さる。いと匂ひやかに美しげなる人の、いたう面痩せて、哀れに物を思ひ染みながら、言に出でゝも聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝおはしますを御覽ずるに、來し方行く末思し召されず、よろづの事を泣く〳〵契り宣はすれど、御答もえ聞え給はず、まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよ〳〵と、我かの氣色にて臥したれば、帝もいか樣になるらむと思し召し惑はる。輦車の宣旨など宣はせても、

○輦車の宣旨　屋形車にて宮中を出入することを許さるゝ勅命なり。

また入り居させ給ひては、更に放ち給はず。「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせ給ひければ、さりとも我をうち棄てゝは、え行きやらじ。」と宣はするを、女もいといみじく忝しと見奉りて、

限りとて別るゝ道の悲しきに
生かまほしき命なりけり

○「命の終なれど、別れ奉る事の悲しさに、なほ生き長らへたし。」

豫てよりかく思ひ侍らましかば。」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、帝はかくながらともかくもならむを御覧じ果てむと思し召せど、今日始むべき御祈どもをさるべき人々承れるが、今宵よりと急がせ奉れば、わりなく思しながら終にまかンでさせ給ひつ。御胸のみつと塞りて、露まどろまれず、明かしかねさせ給ふ。御使の行き交ふ程もなきに、なほ心許なさを限りなく宣はせつるに、夜中うち過ぐる程になむ絶え果て給ひぬるとて、人々泣き騒げば、御使もあへなくて歸り參りぬ。聞し召す御心惑、何事も思し召し分かれず、籠りおはします。御子はかくても旦暮に御覧ぜまほしけれど、かゝる折に内裏におはします例なき事なれば、まかンで給ひなむとす。御子は何事かあらむとも思されず。さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、怪しと見奉り給へり。大方の事にだに別れの悲しからぬはなき事なるを、まして哀れにいふ甲斐なし。

限りあれば、例の作法に納め奉るを、母北の方同じ煙にも上りなむと泣き焦れ給ひて、御送の女房の車に慕ひ乘り給ひて、愛宕といふ所にいと嚴めしうその作法したるにおはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。「空しき御骸を見る〳〵、なほおはするものと思ふがいと甲斐なければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなむ。」と、賢しう宣ひつれど、車より落ちぬべく惑ひ給へば、「さ思ひし事ぞかし。」と、人々もて煩ふ。内裏より御使あり。三位の位贈り給ふ由、勅使來てその宣命讀むなむいと悲しき事なりける。上は、女御とだにいはせずなりぬるが飽かず口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと贈らせ給ふなりけり。これにつけても憎み給ふ人々多かり。されど物を思ひ知り給ふ人は、更衣の御樣容貌などのめでたくおはせしこと、心ばへのなだらかに目安く、憎み難かりしことなど、今ぞ思し出づる。樣惡しきまで帝のもてなし給へばこそすげなう猜みたりしか、人柄のあはれに、情ありし御心ばへを、上の女房なども戀ひしのびあへり。亡くてぞとはかゝる折にやと見えたり。

○亡くてぞ　古歌に、「ある時はありのすさびに憎かりき、亡くてぞ人に戀しかりける。」「ある時は」は、生ける時は。「ありのすさび」は、生けるがまゝに。「生ける時は、生けるがまゝに憎しと思ひし人も、亡き後には戀しと思ふ。」

はかなく日數經て、後の業營むにも、内裏より細やかに訪ひ給ふ。帝は程經るまゝにせむ方なく戀しう思さるれば、女御などの御宿直なども絶えてなく、たゞ涙に濡れて明かし暮らさせ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡き後まで人の胸明くまじかりける御覺かな。」と、弘徽殿の女御などは、なほ免しなう宣ひける。帝は一の宮を見給ふにも、かの若宮の戀しさのみ思し出で給ひつゝ、親しき女房、御乳母などをかの里に遣しつゝ有樣を聞し召す。

野分だちて俄に肌寒き夕暮の程、帝は常よりも思し出づる事多くて、靫負の命婦といふを遣し給ふ。夕月夜のをかしき頃に出だし立てさせ給ひて、やがてながめおはします。ありし世には、かやうの折、御遊などせさせ給ひしに、心殊なる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりし氣配容貌の面影につと添ひて思さるゝも、○闇のうつゝにはなほ劣りけり。

○闇のうつゝ　古今集、「ぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり。」「ぬば玉の」は、「闇」の枕詞。「うつゝ」は、夢ならで目覺めてあること。この歌は「闇にて見えぬは、明らかに見ゆる夢に劣る。」をいふ。本文「闇のうつゝにはなほ劣りけり。」は、更衣の面影は幻に見ゆるのみなれば、闇にて見えぬにも劣りてはかなきをいふ。

命婦かしこにまかンで着きて、車を門より引き入るゝより氣配哀れなり。北の方は寡婦住なれど、一人の御女の御かしづきに、とかく繕ひ立てゝ目安き樣にて過し給ひしが、闇に暮れて伏し沈み給へる程に、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にも障らずしてさし入りたる。南面より入るに、母君とみに物も宣はず。「今まで長らへ侍るがいと心憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、いと耻かしうなむ。」とて、げに堪ふまじく泣き給ふ。命婦、「參りてはいとゞ心苦しう、心肝も消ゆるやうになむと、○典侍の奏し給ひしが、

○典侍　女官。内侍司の次官なり。この典侍は命婦の前に北の方を訪ひしなり。

物思ひ知らぬ心地にもげにこそいと忍び難うこそ侍りけれ。」とて、やゝためらひて仰言傳ふ。「暫しは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひ鎭まるにしも、覺むべき方なく堪へ難きは、いかにすべき事にゝ、心弱しと人の見奉るらむと、慎み給ふ御氣色の心苦しさに、仰言も承り果てぬやうにてなむまかンで侍りぬる。」とて、御文奉る。北の方、「涙に目も見え侍らねど、かくも畏き仰言を光にて。」とて見給ふ。「程經ば少しうち紛るゝこともやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きはわりなき事になむ。幼き人もいかにと思ひ遣りつゝ、諸共に育まぬ心許なさの口惜しく、今は昔の形見になずらへて參り給へ。」など、細やかに書かせ給へり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に
小萩がもとを思ひこそ遣れ

○「宮城野」は陸奥國にありて秋草の名所。こゝにては宮中の意。
○「野分の吹くにつけて、宮中にても御涙を催され、若宮を思ひ遣り給ふ。」

とあれど、涙に見も果て給はず。北の方、「命長さのいとつらう思ひ知らるゝに、○松の思はむことだに耻かしう思ひ侍れば、

○松の思はむこと　古今六帖、「いかにしてありと知られじ、高砂の松の思はむことも恥かし。」「ありと」は、生きてありと。「高砂の松」は、舊き友の意に引く。「いか樣にしてか今なほ生きてありと人に知らるまじ。舊き友の思ふところも恥かし。」徒らに生き長らふるを恥づるなり。

百敷に往き交ひ侍らむことはいと憚多くなむ。畏き仰言を度々承りながら自らは思ひ立ち侍るまじ。若宮はいかに思し知るにか、參り給はむことをのみ思し急げば、道理に悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ侍る樣を奏し給へ。かく忌々しき身に侍ればは、若宮のこゝにおはしますも忌まゝしう畏く。」など宣ふ。若宮は大殿籠りてけり。命婦、「見奉りて委しく御有樣も奏し侍らまほしけれど、上の待ちおはすらむに、夜更け侍りぬべし。」とて急ぐ。北の方、「暮れ惑ふ心の闇の堪へ難き片端をだに晴るくばかりに聞えまほしう侍れば、

○心の闇　後撰集、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に惑ひぬるかな。」

私にも心のどかにまかゝでさせ給へ。年頃は嬉しく面目ある折にのみ立ち寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉るこそ、返す〳〵つれなき命にも侍るかな。生れし時より思ふ所ありし人にて、故大納言今はとなるまで、『たゞこの人の宮仕の本意必ず遂げさせ奉れ。我亡くなりぬとて口惜しく思ひ崩ほるな。』と、返す〳〵諫め置かれ侍りしかば、はか〳〵しき後見もなき交ひは、なか〳〵に心苦しかるべしと思ひながら、たゞかの遺言を違へじとばかりに宮仕せさせ侍りしに、身に餘る御志のよろづに、

忝きに、人がましくもあらぬ耻を隱しつゝ交らひ給ふめりつるを、人の猜み深く積り、安からぬ事多くなりて、横樣なるやうにて終にかくなり侍りぬれば、却りては畏き御志もつらくなむ思はれ侍る。これもわりなき親の心の闇になむ。」といひもやらず、咽せかへり給ふ程に夜も更けぬ。命婦、「上もしかなむ。『我が心ながらあながちに人目驚くばかりに思ひしも、かう長かるまじき宿世なりけりと、今はなか〳〵につらかりける契になむ。世に聊も人の心を枉げたる事はあらじと思へど、たゞこの人故に人の恨を數多負ひし果々は、かううち棄てられて心鎮めむ方なきに、いとゞ人聞惡く頑になり果つるも、前の世の契ゆかしうなむ。』とうち返し給ひつゝ、御しほたれがちにのみおはします。」と語りて盡きせず。泣く〳〵夜いたう更けぬれば、「今宵過さず御返奏せむ。」と急ぐ。月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく、叢の蟲の聲々哀れ催し顏なるも、いと立ち離れにくき草の下なり。命婦、

鈴蟲の聲の限りを盡しても
長き夜あかずふる涙かな

○「鈴虫は鈴を振るやうに聲の限り鳴き盡して、秋の長き夜を飽かず鳴く。」また「秋の長き夜を語り盡していつまでも涙の降る。」

えも乘りやらず。北の方、

いとゞしく蟲の音しげき淺茅生に露おきそふる雲の上人

○「淺茅生」は、疎らに茅の生えたる所。こゝは荒れたる宿をいふ。

○「もとより虫の音しげき荒れたる宿に、御使の來りていとゞ涙を催さす。」

恨も聞えつべくなむ。」といはせ給ふ。命婦にをかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、たゞかの御形見にとて、かゝる用もやと殘し置き給へりける御裝束一重、御髪上の調度めく物添へ給ふ。若き女房達は、悲しきことは更にもいはず、朝夕に內裏わたりを馴らひしなれば、いと寂しく、上の御有樣など思ひ出でまゐらすれば、疾く參り給はむことをそゝのかしまゐらすれど、北の方は、かく忌々しき身の、若宮に添ひ奉りて內裏に參り奉らむも、いと人聞惡かるべく、また暫しも若宮を見奉らであらむことのいと心許なう思ひまゐらせて、すが〳〵しくも參らせ給はぬなりけり。

命婦は歸りて、上のまだ大殿籠らせ給はざりけるをあはれに見奉る。御前の壺前栽のいと面白く盛なるを御覽ずるやうにて、

○壺前栽　殿と殿との間など狹き庭に植ゑし木草なり。

忍びやかに心にくき女房四五人さぶらはせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。この頃旦暮御覽ずる長恨歌の御繪、歌をも、唐土の詩をも、たゞその筋をぞ言種にせさせ給ふ。

○長恨歌　唐の詩人白樂天が玄宗皇帝と楊貴妃との事蹟を詠みし長篇詩にて、こゝはそれを繪に描かせ、それに和歌漢詩を書かせたるものなり。

命婦に細やかに有樣問はせ給へば、哀れなりつること忍びやかに奏す。北の方の御返御覽ずれば、「いとも畏くて身の置き所も侍らず。かゝる仰言につけても、搔き暮らす亂り心地になむ。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより
小萩が上ぞしづごゝろなき

○「若宮を育みし更衣の死せしより、若宮の御身の上心許なし。」

などやうに亂りがはしき御文も、心治めざりけりと、御覽じ免し給ふなるべし。帝はいとかうしも人に見えじと思し鎭むれど、更に忍びあへさせ給はず、御覽じ初めしより年頃の事さへ搔き集めよろづに思しつゞけられて、時の間も見給はでは心許なかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましう思し召さる。「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意遂げたりし喜びには、甲斐ある樣にとこそ思ひつゞけつれ。いふ甲斐なしや。」とうち宣はせて、いと哀れに思し遣る。「かくてもおのづから若宮の生ひ立ち給はゞ、さるべき序もありなむ。北の方も命長くとこそ思ひ念じ給はめ。」など宣はす。かの贈物御覽ぜさす。亡き人の住處尋ね出でたりけむ驗の叙ならましかばと思せど、いと甲斐なし。

○驗の叙　唐の天下亂れ、楊貴妃も殺されし後、玄宗の勅を受けし臨邛の道士は、貴妃の魂を尋ね

て蓬萊宮に入り、貴妃に會ひ、その證據として釵を持ち歸り、玄宗に奉りたりといふによる。道士は神仙の術を修め飛行をよくする人なり。

帝、

尋ね行く幻もがなつてにても
魂のありかをそこと知るべく

○「魂を尋ね行く道士もがな。人傳にても、更衣の魂の在所をいづこぞと知りたし。」

繪に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき繪師といへども、筆限りありければいと匂なし。太液の芙蓉、未央の柳にも似たりけむ容貌に、唐樣の裝ひはうるはしうこそありけめ、

○太液の芙蓉、未央の柳、　太液は池の名、芙蓉は蓮、未央は宮の名。長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉。」「太液ノ芙蓉、未央ノ柳、芙蓉ハ面ノ如ク、柳ハ眉ノ如シ。」

更衣の懷かしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもなぞらふべき方ぞなき。朝夕の言種には、「羽を並べ枝を交さむ。」と契らせ給ひしに、

○羽を並べ枝を交さむ　長恨歌に、「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願作二連理枝一。」「天ニ在ラバ願ハクハ比翼ノ鳥ト作ラン、地ニ在ラバ願ハクハ連理ノ枝ト作ラン。」「比翼鳥」は、一目一翼づゝなる鳥雌雄並びて飛ぶといふ。「連理枝」は、一つ幹より二つに分れたる枝なり。

かなはざりける命の程ぞ盡きせず恨めしき。風の音、蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに、弘徽殿の女御は、久しう上の御局にも參う上り給はず月の面白きまゝに夜更くるまで遊をぞし給ふなる。帝いとすさまじく物しと聞し召す。この頃上の御氣色を見奉る殿上人、女房なども、いと心苦しと聞きけり。この女御はいと押し立ち角々しくおはする御心ばへにて、帝の御氣色など事にもあらず思し消ちてもてなし給ふなるべし。月も入りぬ。帝、

雲の上も涙に曇る秋の月
いかで澄むらむ淺茅生の宿

○「宮中にて見る秋の月も涙に曇れば、荒れたる北の方の宿にては、いかで澄むことあらむ。」

思し遣りつゝ燈火をかゝげ盡して起きおはします。

○燈火をかゝげ盡して、　長恨歌、「孤燈挑盡未レ成レ眠」「孤燈挑ゲ盡シテ未ダ眠ラナサズ。」

右近の司の宿直奏の聲の聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。

○右近の司の宿直奏、　右近の司は右近衛府。左右近衛府は宮中の宿直警衛を掌り、時刻を奏上す。丑の刻は右近衛府の奏上すべき時刻なり。

人目を思して夜の御殿に入らせ給ふこと難し。朝に起きさせ給ひても、明くるも知らでと思し出づるに、なほ朝政は怠らせ給ひぬべかンめり。

○明くるも知らで　字多天皇の更衣なりし伊勢の、長恨歌の繪に詠みし歌、「玉簾明くるも知らで寢しものを、夢にも見じと思ひかけきや。」明くるも知らで寢しことなど思ひ出で給ひて、早く起き出でさせ給はぬなり。

○朝政は怠らせ給ひぬべかンめり　長恨歌に、「春宵苦レ短日高起、從レ是君王不二早朝一。」「春宵短キヲ苦ンデ日高ウシテ起キ、是レヨリ君王早ク朝セズ。」「春宵」は、春の夜。前記伊勢の歌「玉簾明くるも知らで」は、この句による。「不二早朝一」は、朝、政治を見ることを怠るなり。

物（御膳）なども聞し召さず、○朝餉も氣色ばかり觸れさせ給ひて、○大床子の御膳などは、いと遙かに思し召したれば、

○朝餉　姫飯を供ふる内々の御膳。姫飯は水を多くして煮たる飯なれば、今の飯の如きものなるべし。この御膳には女房給仕す。

○大床子　强飯を供ふる公式の御膳。强飯は蒸したる飯。この御膳には公卿給仕す。

陪膳（御給仕）にさぶらふ人々は皆心苦しき御氣色を見奉りて歎く。すべて近くさぶらふ人々は、男女いといみじき事かなといひ合せつゝ歎く。さるべき契（宿緣）にてこそはおはしましけめ、多くの人の謗恨（そしりうらみ）をも憚らせ給はず、この御事（更衣ノ）に觸れたる事をば、道理をも失はせ給ひしに、今またかく世の中の事をも思し捨てたるやうになり行くは、いと怠々しき事なりと、他の朝廷（唐ノ）の例まで引き出でつゝさゝめき歎きけり。

月日經て若宮參り給ひぬ。御樣容貌いとゞこの世のものならず、清らに大人びさせ給へれば、帝はいとゞいみじう思し（愛シ）たり。明くる年の春、春宮（東宮）を定め給ふにも、一の宮に引き越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世の人の承け引くまじき事なれば、なか〳〵（却リテ）危しと思し憚りて、色にも出ださせ給はずなりぬるを見奉りて、世の人も、「さばかり思したれど、限りこそありけれ。」と申すに、弘徽殿の女御（一ノ宮ノ母）も御心落ち居給ひぬ。かの御祖母北の方は慰む方なく思し沈みて、御女のおはすらむ所に尋ね行かむなど願ひ給ひける驗にや、終に失せ給ひぬれば、帝はまたこれを悲しみ思すこと限りなし。若宮も六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。北の方は年頃馴れ睦び給へる若宮を見奉り置き（見棄テ、死ヌ）給ふ悲しびをなむ返す〴〵宜ひける。かくて若宮も今は内裏にのみさぶらひ給ふ。七つになり給へば、御書始などせさせ給ふに、世に知らず敏く賢くおはすれば、帝はあまりに恐ろしきまでと御覽ず。「今は誰も〳〵憎み給はじ。母君亡くなりし今だにらうたうし（愛シ）給へ。」とて、弘徽殿などに渡らせ給ふ御供（ツノマヽ）にもさぶらはせて、やがて御簾（ミス）の内に入れ給ふ。いみじき武士、仇讐なりとも、若宮を見奉りては、うち笑（ヱ）まれぬべき樣におはしませば、女御もさし放ち（遠ザケ）給はず。女御子達二所、この腹におはしませど、若宮（美シサ）になずらひ（比ベ）給ふべきだにぞなかりける。他の女御更衣達も○隱れ給ひ、○隱れ給はず、當時女は男に顏を見せず。大人となりては、父兄にも隱れし風俗なりしなり。されど若宮はまだ幼ければ、隱れぬなり。

今よりなまめかしう（艶ニ）おはすれば、いとをかしう（興アリテ）、誰も〳〵うち解けぬ遊種（心通ヒシタル遊ビ）に思ひまゐらせ給へり。わざ

との御學問は更にもいはず、はかなき琴笛の音にも雲居を響かし、すべていひつゞくれば事々しうなりぬべき御樣なりける。

その頃高麗人の參れるが中に、

○高麗人　高麗はもと三韓の一なれども、その後全半島を一統したる高麗をも「こま」といふ。

賢き相人ありけるを、帝聞し召して、宮の中に召さむことは憚りあれば、この御子をいみじう忍びやつして、鴻臚館に遣はし給へり。

○鴻臚館　來朝の外國人を宿泊せしむる館。

御後見めきて仕うまつる右大辨の子のやうにして率て參りたるに、

○右大辨　太政官に左右の辨局あり。各大、中、少の辨官あり、八省に關する政務を掌る。

相人驚きて、あまたゝびうち傾き怪しぶ。「國の親となりて帝王の上なき位に登るべき相おはします人なれど、その方にて見れば、亂れ憂ふる事やあらむ。朝廷の固めとなりて天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし。」といふ。辨もいと才賢き博士にて、相人と言ひ交したる事どもなむいと興ありける。文など作り交して、相人は、今日明日歸り去りなむとするに、かくあり難き人に對面したる悅びの却りては悲しかるべき心を、面白く作りたるに、御子もいとあはれなる句を作り給へるを、相人限りなうめで奉りて、いみじき贈物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はす。漏らさせ給はねど、おのづから事廣ごりて、春宮の御祖父、右の大臣なども聞き給ひて、いかなる事にかと思し疑ひてなむありける。帝も賢き御心に倭相をおほせて思し寄りにけると同じ筋なれば、

○倭相をおほせて　高麗人の相に對して帝の御判斷を倭相といひしなり。

今までこの御子を親王にもなさせ給はざりけるが、「かの相人は賢かりけり。」と思し合はせて、○無品親王の御後見もなきにては世に漂はさじ。

○無品親王　親王には一品より四品までの位あり。その以下の親王を無品親王といふ。

我が御代もいと定めなければ、只人にて朝廷の御後見せさせ給ふなむ、行末も頼もしげなることゝ思ひ定めて、いよ〳〵道々の才を習はせ給ふ。際異に賢くて、只人にはいと可惜しけれど、親王になり給ひなば、世の疑ひ負ひ給ひぬべければ、○宿曜の賢き道の人に考へさせ給ふにも、

○宿曜　二十八宿九曜といふ星の運行を以て人の運命を占ふ術なり。

たゞ同じ樣に申せば、若宮を○源氏になし奉るべく思し掟て給へり。

○源氏　姓を「源」と賜ひて、臣下に列せしめ給ふなり。

年月に添へて更衣の御事を思し忘るゝ折なし。慰むやとさるべき人々を參らせて御覽ずるにも、なずらひに思さるゝだにいと難きかなと、よろづ疎ましうのみ思しなりぬるに、○先帝の四の宮の御容貌、世に優れ給へる聞え高くおはします。

○先帝の四の宮　先帝とこの帝との系統明らかならず。四の宮は第四皇女。

母后世になくかしづき奉り給ふを、内裏にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、幼くおはしましゝ時に見奉り、今もほの見奉りて、「失せ給ひし御息所の御容貌に似給へる人を、近き三代の宮仕の中に見奉らねど、この姫宮こそいとよう似て生ひ出でさせ給へりけれ。あり難き御容貌人になむ。」と奏しけるに、帝は誠にやと御心止りて、内裏に参らせ給ふべき由、懇に申させ給ひけり。母后、「あな恐ろしや。春宮の御母女御のいとさがなくて、桐壺の更衣のあらはに情なくもてなされし例も忌々しう。」と思し慎みて、すが〳〵とも思し立たざりける程に、母后失せ給ひぬ。姫宮心細き様にておはしますに、帝はいと懇に申させ給ふ。姫宮にさぶらふ人々、御後見達、御兄の兵部卿の親王なども、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住せさせ給ひて、帝の御心も慰むべくなど思しなりて、参らせ奉り給へり。○藤壺の女御と聞ゆ。

○藤壺　飛香舎ともいふ。四の宮の御局なり。（「當時の世相」第二圖）

げに御容貌有様、怪しきまでぞ似給へる。これは御際まさりておはしませば、人も侮りまゐらせねば、うけばりて飽かぬことなし。かの更衣は人も許さゞりし際なるに、生憎なりし上の御志ぞかし。かくて思ひ紛るゝとはなけれど、おのづから御心移ろひて、こよなく思し慰むやうなるもあはれなる事なりけり。

源氏の君は帝の御あたり去り給はねば、繁く渡らせ給ふ御方々は隠れ給はず。いづれの御方も、我人に劣らむと思ひたるやはある。とり〳〵にいとめでたうこそおはすれど、皆大人び給へるに、藤壺の宮はいと若う美しげにて、切に隠れ給へど、君は朝夕に帝にさぶらひ給へば、おのづから漏り見奉る。母御息所は、影だに覺え給はねど、「いとよう似給へり。」と、典侍の申しけるを、若き御心地にいとあはれと思ひ給ひて、常に参らまほしく、馴れ見奉らばやと思ひ給ふ。上はいづれも限りなき御思ひ同士なれば、姫宮に、「な疎み給ひそ。御容貌の怪しく故御息所によそへまゐらすべき心地なむする。」などいとよう似給へば、似氣なからずなむ。」など宣へば、君は幼と思さでらうたうし給へ。面つきまみなどいとよう似給へば、似氣なからずなむ。」など宣へば、君は幼な心地にも、はかなき花紅葉につけて御志を見せ奉り、こよなう心寄せ給ひければ、弘徽殿の女御は、またこの姫宮とも御中そば〳〵しき故、もとよりの憎さもうち添へて物しと思したり。源氏の君は、世に類なしと見奉り、名高うおはする姫宮の御容貌にも、匂はしさは優りて、譬へむ方なく美しげなれば、世の人、光君と申す。藤壺の姫宮、これと並び給ひて、御覺もとり〳〵なれば、かゝやく日の宮と申す。

この君の童姿、變へむはいと憂く思せど、十二にて御元服し給ふ。帝よろづに居起ち營みて、事に事を添へ給ふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしかりし御響におとさせ給はず。所〳〵の饗など、内藏寮、穀倉院など、公事に仕うまつれるは、例の疎かなることもあらめと、

○内藏寮、穀倉院　内藏寮は、金銀珠玉御服等を掌る。穀倉院は、年々の穀を納め置く倉。

取り分きたる仰言ありて、殊に清らを盡して仕うまつれり。おはします清涼殿の東の廂に、東向に上の御椅子立てゝ、冠者の御座、引入の大臣の御座、御前にあり。

○東の廂　晝の御座の間の東にある間。（「當時の世相」第三圖）

○冠者の御座、引入の大臣の御座　冠者は元服する人、こゝは源氏の君。引入は、冠を被らする役、加冠ともいふ。こゝは左大臣なり。

申の時にぞ源氏の君參り給ふ。○みづら結ひ給へる面つき、顏の匂、樣變へ給はむこと惜しげなり。

○みづら　上古男子の髮の風。この頃は少年の髮にて、髮を中より左右に分けて、それ〴〵結ひたるをいふ。びんづらともいふ。

大藏卿、藏人仕うまつる。いと清らなる御髮を削ぐ程、心苦しげなるに、上は亡き御息所の見給はましかばと思し出づるにいと堪へ難きを、心强く念じさせ給ふ。冠し給ひて、御休所にまかンで給ひて、御衣着換へて階を下りて拜し奉る樣にぞ、皆涙落し給ふ。帝はまして忍びあへ給はず。思し紛るゝ折もありけるを、昔の事取り返し悲しく思さる。かう幼くおはします程は、御髮の上げ劣りもやと疑はしく思されつるに、上げ給へれば、あさましう美しげさ添ひ給へり。引入の左の大臣の北の方は、帝の御妹におはしまし、その御腹のたゞ一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御氣色ありけるを、大臣とかく思し煩ふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。上に御氣色賜はらせ給ひけるが、御時よくて、

「さらばこの折の御後見なかンめれば、添臥にも。」と催させ給ひければ、大臣もさ思したり。君は侍にまかンで給ひて、

○侍　清涼殿にある公卿奉仕の間、即ち殿上の間をいふ。（「當時の世相」第三圖）

人々大御酒など參る程、親王達の御座の末に着き給へり。左大臣より君に申し給ふことあれど、君は慎ましく思す程にて、ともかくも答へ給はず。内侍、宣旨承り傳へて、左大臣參り給ふべき召あれば參り給ふ。御祿の物、命婦取りて賜ふ。白き大袿に御衣一重、例の事なり。

○大袿　袿は裝束の下に着る服、廣袖なり。大袿は下賜用として大きく縫ひたる袿なり。

御盃の序に、帝、

幼き初元結に長き世を
契る心は結びこめつや

○「今日の御元服に、長き夫妻の契を結びたりや。」

御心ありて驚かせ給ふ。左大臣、

結びつる心も深き元結に
濃き紫の色しあせずば

○元結は紫色を用ふ。「君の御心さへ變らねば、長き契となるべし。」

と奏して、○長階より下りて○舞踏し給ふ。

○長階　清涼殿より紫宸殿に通ふ廊をいふ。

○舞踏し　當時は御下賜に對して舞踏して拜謝の意を表するを禮とす。

○左馬寮の御馬、○藏人所の鷹するゑて賜はり給ふ。

○左馬寮　御厩を掌る。右馬寮もあり。

○藏人所　嵯峨天皇の御代より置かる。清涼殿の南にある校書殿にあり。機密の文書を掌り、また主上の御調度等を掌る。

その日の○折櫃物、籠物など、右大辨なむ承りて仕うまつらせける。

○折櫃物、籠物　折櫃物は折やうの物に入れたる食物。籠物は、籠に入れたる菓物などなり。

○屯食、祿の唐櫃ども所狹きまで、

○屯食、祿の唐櫃　屯食は辨當やうの飯。祿は下賜品、多くは衣服類。唐櫃は、下賜品など入るゝ箱、脚あり。

春宮の御元服の折にも數まさりて、なか〳〵限りもなく嚴めしうなむ。

その夜、左の大臣の御里に、源氏の君まかンでさせ奉り給ふ。その作法世に珍しきまでもてかしづき給へり。君はいと幼くおはしますを、大臣はいみじう美しと思ひまゐらせ給へり。姫君は少し過し給へる

御齡にて、君いと若うおはすれば、似氣なく耻かしと思したり。この大臣は上の御覺いとやむごとなきに、北の方は上と一つ后腹におはしければ、いづ方につけても物あざやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、終には世の事を知り給ふべき右の大臣の御勢は、物にもあらず押され給へり。左の大臣は御子ども數多腹々におはします。北の方の御腹のは、○藏人の少將にて、いと若うをかしきを、

○藏人の少將　近衛少將にて藏人に任ぜられたるをいふ。

右の大臣は、御中はいとよからねど、見過し給はで、その御女四の君に合せ奉り、劣らずかしづき給ひたるは、世にあらまほしき御間どもになむ。

源氏の君は、上の常に召し纏せば、心安く里住もし給はず。左大臣の姫君、いとをかしげなる人とは見ゆれど、いかなるにか心にもつかず覺え給ひて、內裏住をのみ好ましう思し給ふ。內裏に五六日さぶらひ給ひては、左大臣の大殿に二三日など、絶え〴〵にまかンで給へど、左大臣も只今は幼き程に罪なく思しなして、營みかしづき給ふ。女房には世の中のなみ〳〵ならぬを調へすぐりてさぶらはせ給ひ、君の御心につくべき御遊をし、おふな〳〵思しかしづく。內裏にはもとの桐壺を君の御曹司にて、母御息所の女房達、まかンで散らずさぶらはせ給ふ。御祖母北の方の二條の殿は、○修理職、內匠寮に宣旨下りて、似なう改め造らせ給ふ。

○修理職、内匠寮　修理職は宮中の修繕を掌り、内匠寮は工作を掌る。

もとの木立、山のたゝずまひ、面白き所なりけるを、いとゞ池の心廣くなして、めでたく造りのゝしる。光君といふ名は、高麗人のめでまゐらせて、つけ奉りけるとぞいひ傳へたるとなむ。

帚木　はゝきぎ

光源氏、名のみ事々しくて、世の人にいひ消たれ給ふ咎多かるに、「かゝる好き〳〵しき事どもを末の世に聞き傳へなば、いとゞ輕びたる名をや流さむ。」と、愼み給へる隱ろへ事をさへ語り傳へけむ人の、物いひさがなさよ。君はいたく世を憚り、まめやかにおはしましける程に、なよやかにをかしき事もなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。

○交野の少將　落窪物語にあるあだめきたる人にて、この少將に笑はれむといふは、源氏の君の浮きたることもなきをいふなり。

まだ中將におはしゝ時、内裏にのみさぶらひ給ひて、左の大臣の大殿には絶え〳〵に參り給へば、左大臣はしのぶの亂れやと疑ひまゐらすることもありしかど、

○しのぶの亂れや　伊勢物語、「春日野の若紫の摺衣、しのぶの亂れ限り知られず。」「春日野」は、奈良の地名。「若紫」は、薄紫。「摺衣」は、「しのぶ摺り」ともいひ、忍草を摺り染にしたる衣。その模樣亂れたるより、亂れたることに引く。この歌、「春日野の若紫の摺衣」は、「しのぶ」といふ爲の詞、「人に忍ぶ亂れ心の限りなき」をいふ。こゝは、左大臣、源氏の君の人に隱すあだ心あらむかと疑

ふなり。

君は、さる珍しからぬ好き〳〵しき事などは、好ましからぬ御本性なれど、稀には引き違へ、あながちに御心盡しなることを思し止むる癖なむおはしまして、あるまじき御振舞もうち混りける。

長雨晴れ間なき頃、内裏に御物忌つゞきて、いとゞ長居し給ふを、左の大臣は心許なく恨めしと思ひまゐらせたれど、よろづの御裝、何くれと珍しき樣に調じ給ひつゝ、御子息の君達、たゞこの桐壺の御宿直所の宮仕を勤め給ふ。

○桐壺　淑景舍ともいひ、源氏の君の宿直所なり。（「當時の世相」第二圖）

中にも頭中將の君は、

○頭中將　近衛中將より藏人頭に任ぜられたる人をいふ。こゝは左大臣の長子、桐壺の卷に出でたる藏人少將なり。

親しく馴れまゐらせ給ひて、遊戯をも人よりは心安く馴れ〳〵しく振舞ひ給へど、右の大臣の大殿はいと物憂く思すなど、世に好き〳〵しきあだ人なり。

○右の大臣の大殿　頭中將の妻は右大臣の四の君なれど、中將の氣に入らず、通ふことも稀なるなり。

御里の大殿にても、我が御方のしつらひ眩くしなして、源氏の君の出入りし給ふにうち連れまゐらせ給ひつゝ、夜晝、學問をも遊をも諸共にして、をさ〳〵立ち後れず、いづこにも纏り給ふ程に、おのづから畏りも置かず、心の中をも隱しあへずなむ睦れ給ひける。

つれ〳〵と降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上の間にもいと人少なに、

○殿上の間　主上常の御殿なる清凉殿にあり。公卿伺候の間。（「當時の世相」第三圖）

桐壺の御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くかゝげて、書ども見給ふ序に、頭中將、近き御厨子なる色々の紙の文どもを引出して、わりなくゆかしがれば、

○御厨子　棚ありて書物硯箱など入るゝ具。（「當時の世相」第一四圖）

君、「さるべきを少しは見せむ。されど見苦しきもこそあれ。」と許し給はねば、中將、「その心苦しと思されむ文こそゆかしけれ。數ならぬ身には侍れど、なみ〳〵ならむは、おのかじゝ書き交しつゝも見侍りなむ。恨めしき折々、または待ち顏ならむ夕暮などの文こそ見所はあらめ。」と怨ずれば、君も切に隱し給ふべきは、かやうなる御厨子などにうち散らし置き給ふべくもあらず、深く取り隱し給ふべかゝめれば、こゝのは二の町の心安き類なるべし。中將片端づゝ見て、「かく樣々なるものどもこそ侍りけれ。」とて、その人を心當に、それかかれかなど問ふ中に、いひ中つるもあり、思ひも掛けぬ人を思ひ寄せて疑ふも可笑しと思せど、言少なにとかく紛らはしつゝ取り隱し給ひつ。君、「其許にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなむこの厨子も快く開くべき。」と宣へば、中將、「御覽じ所あらむものこそ難く侍ら

め。」など申し給ふ序に、「女のこれはしもと難なかるべきは難くもあるかなと、やう〳〵見知り侍りぬ。たゞ上べばかりの情にて、手走り書き、折節の答など心得ていひたるは、隨分によろしき所も多かりと見侍れど、そも誠にその方にて選まむに、必ず漏るまじき人はいと難しや。我が心得たる事ばかりを、おのがじゝ心を遣りて、人を貶しめ、かたはらいたきこと多かり。親など具して生先籠れる窓の内なる女を、たゞその人の才の片端聞き傳へて心を動かす男もあンめり。容貌をかしく若やかにてのどかなる程に、人眞似に心を入るゝこともあらむには、はかなきすさびも、おのづから一つ仕出づることもありぬべし。劣りたる所をいひ隠し、その才などをば繕ひていはむ人あらむに、聞く人、いかで空に推し量りて、それしかあらじと思ひ知りなむ。さて誠かと見もて行くに、見劣りせぬやうはなくなむ。」とうち歎きたるに、君も思し合はすることやありけむ、うちほゝ笑みて、「その才一つだになき女は世にあらむや。」と宣へば、中將、「げにさばかりならむあたりには、誰かは賺され寄り侍らむ。女の取る所なく劣りたると、優なりと覺ゆるばかりなるとは、等しく數少くこそ侍らめ。またもとの品高く生れぬれば、人にもてかしづかれ、劣りたる所は隠るゝことも多く、自然にその氣配こよなくめでたかるべし。中の品なる人になむ、その心々、おのがじゝの立てたる趣も見えて、そのけじめ多かるべき。下の品といふ際になりぬれば、殊に耳立たずかし。」とて、いと隈なく心得たらむ氣色なるもゆかしくて、君、「その品々やいかに。いづれを三つの品に分くべき。もとの品高く生れながら、身は沈み位卑くして人がましからぬと、さしもあらぬ人の上達部などまで成り上り、我は顔に家の内を飾り、人に劣らじと思へると、そのけじめをいかゞ分くべき。」と問ひ給ふ程に、○左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らむと内裏に參れるが、やがてこの君の御宿直にとて參れり。

○左馬頭、藤式部丞　左馬寮、右馬寮ありて御馬を掌り、その長官を頭といふ。藤は藤原氏。式部省に轉、大輔、少輔、丞等あり。丞は「ぞう」とも讀めり。

○このあたりを「雨夜の品定」といふ。

馬頭「成り上れどももとよりさるべき際ならぬは、世の人の思へる樣も異なり。またもとはやむごとなき際なれども、世に經る便り少なく、時世移ろひて世の覺え衰へぬれば、心は心として事足らず、人聞き惡き事も出で來ることなンめれば、とり〳〵に中の品にぞ置くべき。受領とて國々を掌り營みたる中にもまた品々ありて、怪しうはあらず中の品に選り出づべきなり。またなま〳〵の上達部よりも、非參議の三四位どもの、世の覺も惡からず、もとの品賤しからぬが、目安く身をもてなしたる、いとかはらかなりや。かゝる際は家の内に足らぬ事などなかンめるまゝに、眩きまでもてかしづける女などの貶しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひ掛けぬ幸取り出づる例ども多かりかし。」

などいへば、君、「すべて賢しき方に心寄するなンなり。」と笑ひ給ふを、中將、「異人のいはむやうに心得ぬこと仰せらるゝ。」とて憎む。

馬頭、「もとの品と世の覺とうち合ひてやむごとなきあたりに生れながら、異なる事もなく後れたらむは、何をしてかく生ひ出でけむと、いふ甲斐なく覺ゆべし。またさるあたりに生れて優れたらむは道理に覺えて、珍らかなりと心も驚くまじ。この上が上の品は某等が及ぶべきならねば、さし措き侍りぬべし。世にありとしも人に知られず、寂しく荒れたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ女の閉ぢ居たらむこそ、限りなく珍しくは覺えめ。かく思の外なるになむ、いかでかゝりけむと、怪しく心止りぬべき。また、父は年老い、煩はしげに肥り過ぎ、兄の顏憎げなるなど、異なることもなき閨の内に、いといたく思ひ上り、はかなく仕出でたるすさびもゆかしげに見えたらむ女は、いかで思の外にをかしからざらむ。優れて疵なき方の選にこそ及ばざらめ、棄て難きものを。」とて、式部を見遣れば、式部は、我が妹どものよろしき聞えあるを思ひていふにやとや心得たらむ、物もいはず。君は、「いでや、上の品だに難げなる世に、いかできる人あらむや。」と思すなるべし。白き御衣どものなよゝかなる上に、○直衣ばかりをしどけなく着なし給ひて、紐などもうち解きて、添ひ臥し給へる御火影、いとめでたく、女にて見奉らまほし。

○直衣　禮服の一種。袴は指貫を用ふ。（口繪の四、「當時の世相」第七圖）

この御爲には上が上の品を選り出でゝもなほ飽くまじく見え給ふ。

樣々の人の上どもを語り合はせつゝ、馬頭、「大方に相見るには咎なきも、我が妻子とうち頼むべき人を選ばむには、人多かる中にも思ひ定め難かりけり。男の朝廷に仕うまつり世の固めとなるべきも、誠の器物となるべき人を取出さむは難かるべし。されど賢しとても一人二人にて世の中をまつりごち知るべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、○事の廣きまゝに、廣き天下の事なれば、相讓ることを得て治め易かるべし。狹き家の内の主とすべき人一人を思ひ廻らすに、足らでは惡しかるべき事どもなむ多かりける。○とあればかゝり、あふさきるさにて、

古今集、「そへにとてとすればかゝり、かくすれば、あないひ知らず、あふさきるさに。」「そへにとて」は、その方にと思ひ定めて。「とすればかゝり、かくすれば」は、とすればかゝり、かくすればとありにて、とかく行違ふをいふ。「あふさきるさ」は、合ふさ離るさ。一方よければ一方惡しきなり。一方よければ一方惡しく、とかく行違のみして思ふまゝにならざるをいふ。

偏に我が妻子とうち頼む人を選まむに、同じくは直し繕ふべき所なく、我が心に適ふ人もやと選り初むるより、定め難きなるべし。必ずしも我が心に適はずとも、見初めつる宿世の棄て難く、思ひ止まる男

はまめやかなりと見え、さて保たるゝ女も心にくしと推し量らるゝなり。

また、容貌きたなげなく、若やかなる女の、おのれは塵もつかじと身をもてなし、文を書けば言葉おほどかに、墨附もほのかなるまゝに、見る人いと心許なく、いかでさやかにその心を見てしがなと徒らに待ち、また聲聞くばかり近く寄れど、息の下に引き入れて物いひ、言少なゝるは、いとよくもて隠す女なりけり。

女のする事の中に、物のあはれを知り過し、はかなき折節に情あり、をかしき方に思ひ進めるなどは、男の後見する方よりいへば、なくてもよかるべしと見ゆれど、またまめやかなる筋のみを立てゝ、○耳挟みがちに、

○耳挟みがちに　婦人の立ち働く時は、垂れたる髪を耳に挟む風俗なりしより、衣食住など日常生活にのみ勤むるをいふ。

美相なき家刀自の、偏にうち解けたる後見ばかりをしたるは、いと口惜しかるべし。

男は朝夕の出入につけて、公私の人の振舞、善き事悪しき事の目にも耳にも留りぬるを、聞き分くべき人ならむには、語りも合はせばやと思へど、さる人にしもあらざらむには、徒らに思出で笑ひもせられ、獨語もせらるゝに、女の、『何事ぞ。』など、いとあはつかに男をうちまもり居たらむは、いかで口惜しからざるべき。

また、ひたぶるに兒めきて柔かならむ人は、などか直し繕ひて見ざらむ。心許なしと覺ゆる所ありとも、直し甲斐ある心地すべしと思へど、さし對ひて見むには、らうたきまゝによろづの罪免さるべけれど、立ち離れたらむ折々など、さるべき事をもいひやるに、折節のあはれにも、まめ事にも、女の我が心より思ひ得る事なからむは、いと口惜しく頼もしげなからむ。また常は少しそば〳〵しく心づきなき女の、折節につけて榮ある事仕出づることもありかし。」など、隈なき物いひ人も定めかねて、いたくうち歎く。

馬頭「今はたゞもとの品にもよらじ。容貌をば更にもいはじ。いと口惜しくねぢけがましき事だになく、たゞ偏に物まめやかに靜かなる心ならむ人をぞ、終の頼み所には思ひ置くべかりける。もしそれにゆかしき心ばへうち添へたらむは、悦びに思ひ、劣りたる所あらむをもあながちに求めじ。心安くのどけき心ばへだに強くば、上べの情はおのづからもてつけつべし。世には艶に物耻ぢして、恨みいふべき事をも知らぬ樣に思ひ忍びて、表はさりげなくもてなせど、我が心一つに思ひあまる時は、いはむ方なく凄き言の葉、哀れなる歌を詠み置き、形見など止めて、深き山里、世離れたる海面などに隠れぬるもありかし。某、童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、かゝる女をいとあはれに悲しく心深きことかなと、涙をさへ落し侍りき。今思ふには、いと輕々しく殊更びたることとなり。目の前につらきことありとも、志深からむ男を措きて、その志をも見知らぬやうに逃げ隠れて人を惑はし、男の心をも見

むとする程に、長き物思になるはいとあぢきなきことなり。『心深しや。』など譽め立てられて、哀れと思ふ心進みぬれば、やがて尼になりぬかし。さ思ひ立つ頃は、いと心澄めるやうにて、また世を顧みむとも思はねど、相知れる人來訪ひ、『あな悲し。かく思しなりにけるよ。』などいひ、ひたすらに思ひ離れしにもあらぬ男、聞きつけて涙落せば、使ふ人、古女房など、『なほ男君の御心はあはれなりけるものを、可惜御身を。』などいふに、自らも耻かしさに、額髮を搔き探りて、心細ければ、うち顰みぬべし。忍ぶれど涙こぼれぬれば、折節毎に念じあへず、悔しと思ふ事も多からむには、佛もなか〳〵心ぎたなしと見給ひつべし。生浮びにては濁に染めるよりも却りて惡しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。たとへ宿世淺からで、尼にもなさで尋ね出したらむも、その折の思出の恨めしき事あらざらむや。

惡しくも善くも相添ひて、とあらむ折もかゝらむ刻をも見免したらむ中こそ、契深くあはれならめ。心の移らふことありとも、見初めし折の志を懷かしく思はゞ、それをよすがに思ひ忍びてもありぬべきに、ようせずば、さやうならむ折のたじろきに、中絶えぬべきなり。すべてよろづの事穩かに、怨ずべきことはよき程にほのめかし、恨むべからむ節をも、憎からぬ程にかすめいはゞ、それにつけても男もあはれまさりぬべし。多くは男の心も、女により治りもすべし。されど女のむげにうち緩べ、何事も見免したるは、心安くらうたきやうなれど、おのづから輕々しと覺え侍るかし。○繋がぬ舟の浮きたる例もげにあやなし。さは侍らぬか。」といへば、中將うなづく。

○繋がぬ舟　文選、「泛乎若ニ不レ繫之舟。」「泛乎トシテ繫ガザル舟ノ若シ。」「泛乎」は、浮べるさま。

中將、「さし當りて、をかしともあはれとも心に入らむ人に、頼もしげなしと疑ふ節あらむこそ大事なるべけれ。我が心だに過なくて見過さば、など思ひ直さゞらむと思はるれど、それ必ずしもさもあらじ。されどともかくも我が心に違ふ節あらむをも、のどやかに見忍ばむより外にますことあるまじかりけり。」といひて、我が妹の姫君はこの定に適ひ給へりと思へば、君のうち眠りて詞混ぜ給はぬを、さう〳〵しく心やましと思ふ。馬頭、物定めの博士になりて語りつゞけ居たれば、中將はこの道理聞き果てむと心に入れてあへしらひ居給へり。

馬頭、「よろづの事によそへて思せ。木の道の工匠のよろづの物を心に任せて作り出すも、臨時の弄び物のその跡も定まらぬは、『げにかうしもしつべかりけり。』と、時につけつゝ樣を變ふれば、今めかしきに目移りてをかしきもあり。されど、誠にうるはしき、人の飾とする調度の定まれる跡あるものを難なく仕出づるになむ、誠の物の上手は見え分れ侍る。

また繪所に上手多かれど、○墨描きに選ばれては、更に劣り優るけぢめ見え分れず。

○墨描き　彩色せる繪を「作繪」といひ、これに對して彩色せぬを、「墨描き」といふ。

人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國のはげしき獸の形、目に見えぬ鬼の顏などのおどろ〳〵しく作りたるは、心に任せて描き、眞には似ざらめど一際人の目を驚かしぬべし。世の常の山

のたゞずまひ、水の流れ、目馴れし家居有様、げにと見え、懐かしく柔らびたる形などを靜かに描き混ぜて、なだらかなる山の氣色、木深く世離れて疊みなし、氣近き鰡の内をばその心しらひするになむ、上手はいと筆の勢異なれど、わろものは及ばぬ所多かンめる。

手を書きたるにも、深き至りはなくて、こゝかしこ點長に走り書き、そこはかとなき氣色見せたるは、うち見るに才々しく華やかなれど、なほ眞の筋を細やかに書き得たるは、上べの筆の勢は消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、なほ實なるになむ、人の心は寄りける。はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心は、時に當りて見る目の情をば頼むまじく思ひ侍り。某がその始の事、好き〳〵しくとも申し侍らむ。」とて、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中將はいみじく信じて、頬杖をつきて對ひ居給へり。法の師の世の道理說き聞かせむ所の心地するも可笑しけれど、かゝる序にはおのがじゝの睦言も隱しあへずなむありける。

馬頭、「早うまだいと下臈に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。容貌などいとまほにも侍らざりしかば、若き頃の好き心には、この人を終の頼み所とも思ひ止め侍らず、とかく浮かれ侍りしに、いたく物妬みをなむし侍りしかば、いと心づきなく、かゝらでおいらかならましかばと思ひつゝ、あまり免しなく疑ひ侍りしもうるさくて、『かく數ならぬ身を見も棄てゞ、などかくしも思ふらむ。』と、心苦しき折々も侍りて、自然に我が心も治めらるゝやうになむ侍りし。この女の有るやうは、いかでこの人の爲に

と思へば、もとより思ひ至らざりける事にても無き手を出し、劣りたる筋をもなほ樣惡しくは見せじと思ひ勵みつゝ、とにかく物まめやかに後見、露にても男の心に違ふことなくもがなと思へりし程に、某も進める方の人と思ひしかど、とかくに靡き來て、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと切に思ひ繕ひ、他の人に見えなむ折、男の面伏にや思はむと憚り耻ぢて、いと愼ましく、見馴るゝまゝに心も怪しうはあらず侍りしかど、たゞこの物妬み一つなむ心治めず侍りし。某その頃思ひ侍りしやう、『かうあながちに我に從ひ怖ぢたる人なンめり。いかで懲るばかりの業して威したらむには、この物妬みも少しよろしくなり、さがなさも止めむ。我が誠にうち絶えぬべき氣色ならば、かばかり我に從ふ心ならば、思ひ懲りなむ。』と思ひ侍りて、殊更に情なくつれなき樣を見するに、例の腹立ち怨ずるを、『かくおぞましくば、いみじき契深くとも今よりは絶えてまた見じ。これを限りと思はゞ、かく道理なき物疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はゞ、つらきことありとも念じてのどやかに思ひなり給へ。かゝる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。我、人なみ〳〵にもなり、少し大人びむにつけて、また並ぶ人なくなむあるべき。』など、賢く敎ふるかなと思ひて、我猛くいひ過し侍るに、女は少しうち笑ひて、『かくよろづに見立なき程を忍びて人數なるべき世もやと待たむは、いとのどかにも思ひなされて心やましくもあらず。つらき御心を忍びて、思ひ直り給はむ折もやと年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむあるべければ、互にうち絶えぬべき刻になむある。』と口惜しげにいふ時に、某も腹立たしくなりて、

僧げなることをいひ侍るに、女も治めあへぬ筋にて、某の指一つを引寄せて喰ひて侍りしかば、某もおどろ〳〵しく恨みて、『かゝる疵さへ着きぬれば、いよ〳〵世の交らひをすべきにもあらず。官位も何につけてかは人めかしくならむ。世を背きぬべき身なンめり。』などいひ威して、『さらば今日こそは限りなンめれ。』と、この指を屈めてまかンでぬ。

手を折りて相見しことを數ふれば
これ一つやは君がうき節

○「指を折りて、今まで逢ひしことを數へて思ひ廻らすに、いと懐かしけれど、この物妬み一つが君の缺點なるべし。」

今は恨みじ。』などいひ侍れば、さすがにうち泣きて、

うき節を心一つに數へ來て
こゝや君が手を別るべき折

○「憂き折の數多きを我が心一つにこらへて來たりしなれど、今日は君と絶ゆべき折ならむ。」

などいひ爭ひ侍りしかど、誠には變るべきことゝも思はずながら、日數經るまで消息も遣さず、あくがれ歩き侍りしに、臨時の祭の調樂に、

○臨時の祭の調樂　賀茂の祭は五月。臨時の祭は十一月二の酉の日に行ふ。調樂は音樂の練習をい

ひ、内裏にて行ふ。

夜更けていみじう霙降る夜、人々内裏よりまかンで別るゝ所にて思ひ廻らせば、なほ家路と思はむ方は他にはなかりけり。内裏の旅寢もすさまじかるべく、また氣色ばみ側向くあたりは、そゞろ寒くやと思はれ侍りしかば、今はいかゞ思へると、かの人の氣色も見がてら、雪をうち拂ひつゝまかりて、生人聞惡く爪食はるれど、さりとも今宵ぞ日頃の恨は解けなむと思ひ侍りしに、火ほのかに壁に背け、なえたる衣どもの厚肥えたるを大いなる薫籠にうち掛けて、引上ぐべき帷などうち上げて、今宵こそはと我を待ちける樣なり。さればよと心驕りするに正身はなし。さるべき女房どもばかり殘りて、『親の家にこの夜さりなむ渡りぬる。』と答へ侍り。その後も女は艶なる歌も詠まず、懸想びたる消息もせで、いと直屋籠りに情なかりしかば、あへなき心地して、さがなく我を免さゞりしも、『我を疎めかし。』と、あだなる心やありけむと疑はれ侍りしに、我が着るべき物など、常より心止めたる色合し、いとあらまほしき樣にて、我が見捨て侍りし後をさへなむ思ひ遣り後見たりし。されば絶えて思ひ棄つるやうはあらじと思ひ侍りて、とかく消息など遣し侍りしが、女は背きもせず、尋ね惑はさむと隱れ忍びもせず、恥かしからぬ樣に答へつゝ、『ありし心ながらならむには見免すまじ。改めてのどかに思ひならばなむ相見るべき。』などいひしを、さりとも思ひ離れじと思ひ侍りしかば、暫し懲らさむの心に、しか改めむともいはず、いたく綱引きて見せし間に、女はいたく思ひ歎きてはかなくなり侍りにしかば、戯れ僧くゝ

なむ覺え侍りし。

○戯れ憎く　古今集、「ありぬやと試みがてら相見ねば、戯れ憎きまでぞ戀しき。」「ありぬや」は、逢はずして過し得べきかと。「戯れ憎き」は、我が心の戯を我ながら憎く思ふなり。

終の頼み所と思はむは、かばかりの人にてありぬべくなむ思ひ出でらるゝ。はかなきあだ事も、誠の大事をも、いひ合さむに甲斐なからず。○立田姫といはむにも似氣なからず、○棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなむ侍りし。」とて、いと哀れと思ひ出でたり。

○立田姫　秋の女神。木の葉を染むるより、染色の技の神とす。

○棚機　棚機津女をいふ。彦牛星の妻の織女星なり。機織裁縫など女の業を掌る神。

中將、「その棚機の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契にぞあえまし。げにその立田姫の錦にはまた若くものあらじ。はかなき花紅葉といふも、折節の色合似氣なからむには、露の榮なく消えぬるものなり。されば、こそ定めかねたるぞや。」といひはやし給ふ。

馬頭、「さてまた同じ頃まかり通ひし所は、人も立ち優り、心ばへ誠にゆかしと見えぬべく、うち詠み、走り書き、掻い彈く爪音、手つき口つき、皆心許なからず、容貌も事もなく侍りしかば、かのさがなき女を心安き方のものとして、この人を時々隱ろへ見侍りし程に、いとこよなく心止り侍りき。かの人失せて後、哀れなれど世を去りぬる人は甲斐なければ、この方にしば〳〵まかり馴るゝまゝに、少しまばゆく好き〳〵しく、心づきなき所あれば、終の頼み所とすべき人とは見えず、離れ〳〵にのみ通ひ侍りし程に、忍びて心通はせる人ぞありけらし。神無月の頃ほひ、月面白かりし夜、内裏よりまかンで侍るに、或殿上人來合ひて、我が車に乘りて侍れば、大納言の家にまかり泊らむとするに、この人のいふやう、『今宵我を待つらむ宿なむ怪しく心苦しき。』とて、この女の家、よきぬ道にて、荒れたる築土の崩れより池の水、影見えて、月だに宿る住所を過ぎむもさすがに思ひけむ、下り侍りぬかし。もとよりさる心を交せるにやありけむ、この男いたくすゞろきて、門近き廊の簀子めくものに尻掛けて、とばかり月を見る。菊いと面白くうつろひ渡りて、風にきほへる紅葉の亂れなど、げにあはれと見えたり。男は懷なりける笛取り出でゝ吹き鳴らし、『蔭もよし。』など歌ふ程に、

○蔭もよし　當時の謠物に催馬樂あり、その一、「飛鳥井」は、地名。「蔭」は、木蔭。「みもひ」は、冷たき水。こゝにこれ

ひも寒し、御秣もよし。」「飛鳥井」は、地名。「蔭」は、木蔭。「みもひ」は、冷たき水。こゝにこれ

を歌ふは、今宵こゝに宿りたき意なり。

内よりよく鳴る和琴を調べとゝのへたりけるを、うるはしく掻き合はせたりし程、怪しうはあらずかし。律の調を物柔かに掻き鳴らして、籠の内より聞えたる、和琴は華やかなる物の音なれば、清く澄める月につきづきしく、男いたくめでゝ、籠の下に歩み來て、『庭の紅葉こそげに踏み分けたる跡もなけれ。』など妬ます。

○踏み分けたる跡もなけれ　古今集、「秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ、路踏み分けて訪ふ人はなし。」による。訪ふ人もなき意なり。

菊を折りて、

琴の音も菊もえならぬ宿ながら
つれなき人を引きや止めける

○「琴の音も菊もいはむ方なき宿なれど、つれなく過ぐる人を引き止むまじ。引き止められし我は心あればなり。」

悪かンめり。』などいひて、『今一聲聞きはやすべき人のある時に、手な残し給ひそ。』など、いたく戯れかゝれば、女、聲いたう繕ひて、

木枯しに吹き合はすめる笛の音を
引き止むべきことの葉ぞなき

○「木枯しに吹き合はせ給ふ君の笛の音は、我が琴の音にても（言葉にても）引き止め難し。」

となまめき交すに、人知れず憎しと思ひ聞くをも知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて、なまめかしく掻い弾きたる爪音、才なきにあらねど、まばゆき心地なむし侍りし。時々うち語らふ宮仕人などの、飽くまで戯ればみ好き〳〵しきは、さる方にて見る限りをかしくもありぬべし。されど時々にても男のよすがと思ひ侍らむには、かゝる人は頼もしげなく、さし過しけりと心置かるれば、その夜の事にことづけてこそまかり絶えにしか。

この二つの事を思ひ合はせ侍るに、その頃の若き心にだに、なほさやうにさし過したることは、いと頼もしげなく覚え侍りき。今より後はましてさのみなむ思ひ侍らるべき。君達は、御心のまゝに折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなむと見ゆる玉笹の上の霰などの、艶にかよわき好き〳〵しさをのみこそをかしく思さるらめ。さりとも今七年あまりの程に思し知り給ひなむ。某の賤しき諫を聞き給ひ、好き〳〵しからむ女には心置かせ給へ。さし過して男の爲にも愚なる名をも立てつべきものなり。」と誡む。中將、例のうなづく。君も少し片笑みて、さる事と思すべかンめり。「いづ方につけても、人聞悪くはしたなかりける御物語かな。」とて、うち笑ひおはす。

中將、「某は痴者の物語をせむ。」とて、「いと忍びて見初めたりし人の、さて絶えず見つべかりし氵配なりしかば、長かるべきものとしも思ひ侍らざりしかど、馴れ行くまゝにあはれと覚えしかば、忘れぬものに思ひ侍りしに、さばかりになれば女もうち頼める氣色見えき。しかも頼むにつけては恨めしと思ふこともあらむと覚ゆる折々の途絶も侍りしを、女は見知らぬやうにもてなして、かうたまさかなりとも思はず、たゞ朝夕にもてつけたらむ有様に見えていとほしかりければ、頼ませ渡り侍りき。親もなくいと心細げにて、さればこの人をこそはと、事に触れて思へる様もらうたげなりき。この人のかう穏しき

有様なるに心安く覺えて、久しくまからざりし頃、この右の大臣のわたりより、さる便ありて、情なき事をなむかすめいはせたりけると、後にこそ聞き侍りしか。さる憂き事のあらむとも知らず、心に忘れずながら消息などもせで、久しく程經しに、女はむげに思ひ萎れて心細かりけむ、幼き者もありしに思ひ煩ひて、撫子の花を折りておこせたりし。」とて涙ぐみ給へり。源氏の君、「さてその文の詞は。」と問ひ給へば、中將、「いさや、異なることもなかりきや。

山賤の垣ほ荒るとも折々に
あはれはかけよ撫子の露

○「賤しき我は忘れ給ふとも、時折に幼子は哀れと思ひ出で給へ。」

我も思ひ出でしまゝにまかりたりしに、例の何心もなけれども、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露繁きをながめて、虫の音にきほへる氣色、昔物語めきて覺え侍りし。某、

咲きまじる花はいづれと分かねども
なほ常夏にしくものぞなき

○「この庭に咲きまじる花は、いづれが美しきと分ち難けれど、なほ常夏に及ぶものなし。」にて、常夏（撫子）を女君に譬へしなり。

大和撫子をばさし措きて、まづ塵をだにと親の心をとる。

○塵をだに　古今集、「塵をだにすゑじとぞ思ふ、咲きしより妹と我がぬるとこなつの花。」「妹」は、妻。「とこなつ」の「とこ」は、「床」に掛く。「妹と我と寢る床の名を負へる常夏の花なれば、大切にして塵もすゑまじと思ふ。」こゝにては、前の歌にて女君を常夏に譬へたれば、女君を大切に思ふ意をいふ。

女、

うちはらふ袖も露けき常夏に
あらし吹きそふ秋も來にけり

○「君を待ちて床の塵をうち拂ふ我が袖も涙がちなるに、常夏を吹き散らす秋の風の如き、更に悲しき事は來れり。」暗に右大臣より威されしを嘆きしなれど、中將は心付かざりしなり。

と、はかなげにいひなして、まめやかに恨みたる樣も見えず。涙を漏らし落しても、いと恥かしく慎ましげに紛らはし隱して、我が訪はぬつらさを思ひ知りけりと見えむは、いみじく心苦しきものと思ひたりげなりしかば、心安くて、また途絶え置きたりし程に、跡もなくこそ掻き消ちて失せにしか。まだ世にあらば、はかなき空にぞさすらふらむ。あはれと思ひし人なれば、恨む氣色の見えましかば、かくあくがらさざらまし。こよなき途絶せず、さるべき樣にしなして、長く見るやうも侍りなまし。かの撫子のらうたく侍りしかば、いかで尋ね出でむと思ひ侍れど、今に聞き侍らず。これこそ宣ひつるはかなき

女の例なンめれ。さりげなかりしまゝに、つらしと思ひけるをも知らず、あはれと思ふことの絶えざりしも、今は益なき片思なりけり。今はやう〳〵忘れ行けど、彼もまた思ひ忘れず、折々人やりならぬ胸焦るゝ夕もあらむと思ひ侍り。これなむ頼もしげなき方なりける。かのさがな者も忘れ難かンめれど、さし對ひては煩はしく、ようせずば厭きたきこともありなむ。また琴の音の進めりけむ女も、好き〴〵しかりけむ罪、げに重かるべし。この心許なき女も、いかなる故か侍りけむと疑添ふべければ、いづれをよしと終に思ひ定めずなりぬるこそ世の中や。たゞかくとり〴〵に比べ難かるべし。この樣々のよき限りを取り具し、難ずべき種はひ混ぜぬ人はいづこにかはあらむ。吉祥天女を思はむとすれば、法氣づき奇しからむこそ、またわびしかりぬべけれ。」とて、皆笑ひぬ。

中將、「式部が所にぞ面白き事はあらむ。少しづゝ語り申せ。」と責め給ふ。式部、「下が下の中にはなでふことか聞し召し所の侍らむ。」といへど、中將の君まめやかに、「遲し。」と責め給へば、何事をか取り出で申さむと思ひ廻らすに、式部、「まだ文章の生に侍りし時、賢き女の例をなむ見侍りし。

○文章の生　大學の一科に文章道あり、詩文を修む。文章生はその學生なり。

かの馬頭の申し給へるやうに、公事をもいひ合せ、私樣の世に經べき心掟を思ひ廻らさむ方も至り深く、才の程はなま〳〵の博士恥かしく、すべて口明かすなむ侍らざりし。それは或博士の許に學問し侍るとてまかり通ひし程に、主人の女ども多かりと聞き侍りて、はかなき序にいひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、盃もて出でゝ、『我が二つの途歌ふを聽け。』となむいひ聞かせ侍りしかど、

○二つの途　白氏文集、「主人會ニ良媒ニ、置レ酒滿ニ玉壺ニ、四座且勿レ飲、聽ニ我歌ニ二途ニ、富家女易レ嫁、嫁早輕ニ其夫ニ、貧家女難レ嫁、嫁晚孝ニ於姑ニ。」「主人良媒ニ會ヒ、酒ヲ置キテ玉壺ニ滿ツ、四座且ク飲ム コトナカレ、我ガ二ノ途ヲ歌フヲ聽ケ、富家ノ女ハ嫁シ易ク、嫁スルコト早ケレドモ、其ノ夫ヲ輕ンズ、貧家ノ女ハ嫁シ難ク、嫁スルコト晚ケレドモ、姑ニ孝ナリ。」による。

をさ〳〵うち解けてもまからねど、かの親の心を憚りてさすがに折々通ひ侍りし程に、いとよく後見、寢覺の語らひにも、我が身の才つき　朝廷に仕うまつるべき道々しき事を教へ侍りて、消息文にも假名といふものを書き混ぜず、うべ〳〵しくいひまはし侍るに、おのづからまかり絶えで、その者を師としてなむ、わづかなる腰折文作ることなど習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、懷かしき妻子とうち頼まむに、無才の某、生惡ならむ振舞などあらむにはと、恥かしくなむ覺え侍りし。まいて君遠の御爲には、かくしたゝかなる御後見は何にかはせさせ給はむ。女をはかなし口惜しと見つゝも、たゞ我が心につくところあり、宿世に引かれ侍るめれば、男しもなむ仔細なきものには侍るめる。」と申せば、殘りをいはせむとて、「さて〳〵をかしかりける女かな。」と賺し給ふを、心得ながら、式部、鼻のあたりをごめきて語りなす。

「さていと久しくまからざりしに、物の便に立ち寄りて侍れば、常のうち解けたる方にはあらで、煩

はしき物越しにてなむ會ひて侍りし。

○物越し　几帳を隔て、對面したるをいふ。几帳は帷子を垂れて内外を隔つる具なり。（「當時の世相」第一三圖）

妬ましとや思ひけむと嗚呼がましくも、また立ち別れなむにはよき折なりと思ひ侍れど、この賢人、また輕々しく物妬みすべきにもあらず、世の道理を思ひ取りて恨みざりけり。聲もはやりかにていふやう、『月頃風病重きに堪へかねて、○極熱の草藥を服して、いと臭きによりてなむ對面し侍らぬ。

○極熱の草藥　解熱に用ふるにんにくをいふ。にんにくはひるともいふ。

まのあたりならずとも、さるべき雜事は承らむ。」と、いと哀れにうべ〳〵しくいひ侍り。答に何とかはいはれ侍らむ。たゞ『承りぬ。』とて立ち出で侍るに、さう〳〵しくや覺えけむ、『この香失せなむ頃立寄り給へ。』と高やかにいふを聞き過さむもいとほしけれど、暫しためらふべきにも侍らねば、げにその香さへ著く匂ひ來るも術なくて、逃げ目を使ひて、

さゝがにの振舞しるき夕暮に
ひるま過ぐせといふがあやなき

○古今集、「我が背子が來べき宵なり、ささがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも。」「背子」は、夫。「ささがにの」は、蜘蛛の枕詞。「かねてしるしも」の「も」は感詞、「前以て著しき」をいふ。蜘蛛の巣を掛けたる宵は、男の通ひ來るといふよりいふ。

○「我が來らむことは、蜘蛛の振舞にて分りしならむに、ひる（ニゾニク）を飲みて、この香失せなむ程に來よとはわけわからず。」

いかなることづけぞや。」といひも果てず、走り出で侍りぬるに、女追ひ來て、

あふことの夜をし隔てぬ中ならば
ひるまも何かまばゆからまし

○「途絶えなく逢ひし中ならば、ひるの香をも恥ぢざるべし。」たまさかなれば恥かしき意をいふ。

さすがに口疾く侍りき。」と、しづ〳〵申せば、君達、あさましと思して、虚言とて笑ひ給ふ。「いづこにさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ對ひ居たらめ。むくつけきこと。」と爪彈をして、

○鬼とこそ　さる女と逢はむより、おとなしく鬼に逢はむ方よかるべし。

いはむ方なしと式部を疎み憎みて、「少しよろしからむ事を取り申せ。」と責め給へど、「これより珍しき事は候ひなむや。」とて下りぬ。

馬頭「すべて男も女も、わろ者は僅に知れる事を、殘りなく見せ盡さむと思へるこそかたはらいたけれ。○三史五經の道々しき方を明らかに曉り明かさむこそ愛敬なからめ、

○三史五經　三史は、史記、漢書、後漢書。五經は、易經、書經、詩經、春秋、禮記。

女なりとも、などか世にある事の公私につけて、むげに知らずしもあらむ。わざと習ひ學ばねども、少し才あらむ人は、耳にも目にも止る事、自然に多かるべし。されど、さるまゝに、眞名を走り書きて、女文にも、半過ぎて眞名を書きすくめたるは、あな心憂と見ゆべし。かゝる文は、心地にはさしも思はざらめど、おのづからこは〳〵しき聲に讀みなされなどしつゝ、殊更びたり。これは上﨟の中にも多かる事ぞかし。歌詠むと思へる人の、やがて歌に纏はれ、始よりをかしき古言を取り込みつゝ、興もなき折々詠みかけたるこそ物しきことなれ。返しせねば情なし。し得ざらむ人ははしたなからむ。五月の節に急ぎ參る朝、○いゝいゝいゝい

時は、天一天上といひて、八方塞りなし。

君、「さかし。例も上の忌み給ふ方なりけり。二條の院も同じ筋にて、いづくにか方違せむ。いと物憂きに。」とて大殿籠れり。

○方違　塞りの方角を避くる爲、他の所に中宿するをいふ。

「いと惡き事なり。」と、これかれ申す。人々、「紀の守にて親しく仕うまつる人の中川のわたりなる家なむ、この頃水堰き入れて涼しき蔭に侍る。」と申す。君、「いとよかンなり。物憂ければ牛ながら車引き入れつべからむ所を。」と宣ふ。忍び〳〵の御方違所ならむには數多ありぬべけれど、

○忍び〳〵の御方違所　忍びて通ひ給ふ所を、この日の方違所にし給はむには、數多あるべけれどの意なり。

程經てこの殿に渡り給へるに、方塞にて、引違へ外樣におはさむもいとほしと思ひ給ふなるべし。紀の守に仰言賜へば、承りながら退きて、「父伊豫の守の朝臣の家に慎む事侍りて、女房どもなむまかり移れる頃にて、狹き所に侍れば、なめげなる事や侍らむ。」と歎くを君聞き給ひて、「その人近からむなむ嬉しかるべき。女遠き旅寢は物恐ろしき心地すべければ、たゞその几帳の後に。」と宣へば、人々、「げによろしき御座所にもこそ。」とて、人走らせ遣る。いと忍びて殊更に事々しからぬ所をと急ぎ出で給へば、大臣にも申し給はず、御供にも睦じき人々ばかりしておはしましぬ。紀の守、「俄にて。」とわぶれど、人々聞き入れず。○寢殿の東面拂ひ明けさせて、假初なれどつき〳〵しく御しつらひしたり。

○寢殿　貴族の邸宅の本殿をいふ。この東にあるを東の對、西なるを西の對、北を北の對といひ、廊などにて續く。かゝる建方を寢殿造といふ。こゝは寢殿の東部を源氏の御座所としたるなり。（「當時の世相」第四、五圖）

遣水の心ばへなど、さる方にをかしくしたり。田舍家めく柴垣仕渡して、前栽など心止めて植ゑたり。風涼しくてそこはかとなき虫の聲々聞え、螢繁く飛び紛らひてをかしき頃なり。人々渡殿より出でたる泉に覗き居て酒飲む。

○渡殿　殿と殿とを續くる廊に設けたる間をいふ。こゝは、この下より遣水の流れ出づるやうにしたるなり。

主人も肴求むと、○こゆるぎのいそぎ歩く程、

○こゆるぎの　風俗歌、「玉簾の小瓶を中に据ゑて、主人もや、肴求ぎに肴とりに、こゆるぎの磯の、若布刈り上げに。」「玉簾の」は、「小」の枕詞。「求ぎ」は、求め。「こゆるぎの磯」は、相模の地名。こゝは「こゆるぎの磯の」によりて、「急ぎ」に掛けしなり。

君はのどやかに眺め給ひて、かの馬頭の中の品に取り出でゝいひしは、この列ならむかしと思し出づ。

○馬頭の中の品　本篇の前の方に、馬頭、「受領（國司）とて國々を掌り營みたる中にもまた品々あ

りて、怪しうはあらず中の品に選り出づべきなり。」をいふ。

伊豫の守の北の方は、思ひ上れる氣色に聞き置き給へる女なれば、ゆかしくて、耳止め給へるに、この寢殿の西面にぞ人の氣配する。衣の音なひはら〳〵として、若き聲ども憎からず、さすがに忍びて物いひ笑ひなどする氣配殊更びたり。格子は上げたりけるを、紀の守、「心無し。」とむづかりて下しつれば、火ともしたる透影の障子の上より漏りたるに、君はやをら寄り給ひ、見ゆやと思せど、隙なければ、暫し聞き給ふに、人々、近き所に集ひ居たるなるべし。うちさゝめきいふ事どもを聞き給へば、我が御上なるべし。「いといたうまめやかにおはして、早うやむごとなきよすが定まり給へるこそさう〳〵しかゝめれ。されどさるべき隈々にはよくこそ隱れ歩き給ふなれ。」など、異なる事もなければ、聞きさして止め給ひつ。式部卿の宮の姫君に、君の朝顏奉り給ひし歌などを、少しほゝゆがめて語るもほの聞ゆ。君は、「くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな。されば、見劣りやしなむかし。」と思す。

○見劣り　伊豫の守の北の方の容貌、聞きしと異りて、見劣りやせむと危く思ふなり。

守、出で來て、燈籠懸け添へ、火明くかゝげなどして御菓物ばかり參れり。君、「とばり帳もいかに。」その方の心許なくては目覺しき饗應ならむ。」と宣へば、

○とばり帳　催馬樂、我家、「我家はとばり帳をも掛けたるを、大君來ませ婿にせむ、御有には何よけむ、飽、さだえか、かせよけむ。」「とばり帳」は、帛の類を垂れて内外を隔つるをいふ。「大君」は、王子。「さだえ」は、榮螺。「かせ」は、雲丹。

○その方の　「大君來ませ、婿にせむ。」の句により、女のもてなしなくては興なかるべしと戯れ給へるなり。

「何よけむとも承らず。」と畏りてさぶらふ。

○何よけむとも承らず　前の催馬樂の句により、御所望も承らずの意なり。

端つ方の御座に、假なるやうにて大殿籠れば、人々も靜まりぬ。主人の子どもをかしげにて歩く。童なるは、殿上の程に御覽じ馴れたるもあり。

○殿上の程に　童にて昇殿を許されたるを童殿上といふ。

伊豫の守の子もあり。數多ある中に、いと氣配あてはかにて、十二三ばかりなるもあり。君、「いづれかいづれ。」など問ひ給ふに、守、「これは故衛門督の末の子にて、いとかなしくし侍りけるを、幼き程に親に後れ侍りて、姉なる人の緣にてかくこゝに侍るなり。

○故衛門督　伊豫守の北の方の父。この北の方は後妻なれば、紀の守には繼母なり。

才などもつき侍りぬべく、怪しうは侍らねば、殿上なども思ひかけ侍りながら、いまだすが〳〵しう交らひ侍らざゝめる。」と申す。「哀れのことや。この子の姉君や眞人の後の母親。」「さなむ侍る。」と申すに、「似氣なき親をも設けたりけるかな。その人は上にも聞し召して、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏

せしを、いかになりけむ。』と、いつぞや宣はせし。世こそ定なきものなれ。」など、いとおよずけ宣ふ。守、「不意にかく侍るなり。世の中といふもの、さのみこそ今も昔も定まりたること侍らね。中についても、女の宿世はいと浮びたるなむ、哀れに侍る。」と申す。「伊豫の守はかしづくや。我が君と思ふらむな。」「いかゞは。私の主とこそは思ひて侍るめるが、好きゞしきことゝ、某より始めて承け引き侍らずなむ。」と申す。「いづ方にぞ。」「皆下屋に下り侍りつれど、下りあへざらむ。」と申す。醉ひ泥みて、皆人簀子に臥しつゝ靜まりぬ。

君はうち解けても寢られ給はず。いたづら臥しと思さるゝに御目覺めて、この北の障子のかなたに人の氣配するを、こなたやかくいふ人の隱れたる方ならむと御心止めて、やをら起きて立ち聞き給へば、○ありつる小君の聲にて、

○ありつる小君、　紀の守の源氏の君に語りし少年、伊豫の守の妻の弟なり。

「ものけ給はる。いづこにおはしますぞ。」と、嗅れたる聲のをかしきにていへば、「こゝにぞ臥したる。客人は寢給ひぬるか。いかに近からむと思ひつるに、氣遠かりけり。」といふ。寢たりける聲のしどけなき、いとよく似通ひたれば姉と聞き知り給ひつ。「廂にぞ大殿籠りぬる。音に聞きつる御有樣を見奉りつる。げにこそめでたかりけれ。」と密にいふ。「畫ならましかば、覗きて見奉りてまし。」と、ねぶたげにいひて顏引き入れつる聲す。君は、口惜しう、心止めても問ひ聞けかしと、あぢきなく思す。小君、「まろは端に寢侍らむ。あな暗。」とて、火かゝげなどするなるべし。女君はたゞこの障子口筋違ひたる程にぞ臥したるべき。「中將の君はいづくにぞ。人氣遠き心地して、物恐ろし。」と、女房召せば、長押の下に人々臥し居て答するなり。「下屋になむ湯に下りて、只今參らむと侍る。」といふ。皆靜まりたる氣配なれば、君、掛金を試に引き明け給へれば、あなたよりは鎖さゞりけり。几帳を障子口に立てたれば、火はほの暗きに見給へば、唐櫃めく物どもを置きて亂りがはしき中を、分け入り給ひて、氣配しつる所に入り給へれば、たゞ一人、いとさゝやかにて臥したり。生煩はしけれど、上なる衣を押し遣り給ふまで、女は求めつる女房と思へり。君、「中將召しつればなむ、人知れぬ思の驗ある心地して。」と宣ふを、

○驗ある心地して、　源氏の君、中將なるに、女君、女房の中將を召したれば、密に思ひし甲斐あり

と思ふ。

女はともかくも思ひ分れず、物に魘はるゝ心地して、「や」とおびゆれど、顏に衣の障りて音にも立てず。「うちつけなれば、深からぬ心と見給ふらむは道理なれど、年頃思ひ渡りし心の中を聞え知らせむとてなむ、かゝる折を待ち出でたるも、更に淺き心にはあらじと思ひなし給へ。」と、いと柔かに宣ひて、鬼神も荒立つまじき御氣配なれば、女も、「こゝに人。」ともえのゝしらず、心地わびしく、あるまじきことゝ思へばあさましく、「人違にこそ侍るめれ。」といふも息の下なり。消え惑へる氣色、いとらうたげ

なれば、をかしと見給ひて、「違ふべくもあらぬを、思はずにもおぼめき給ふかな。思ふこと少し聞ゆべきぞ。」とて、いとちいさやかなれば、掻き抱きて障子のもとに出で給ふ程にぞ、求めつる中將めく人來合ひつる。「やゝ」と宣ふに、怪しく探り寄りたるに、いみじく匂ひ滿ちて、顏にも薫りかゝる心地するに、この君と知りぬ。あさましう、こはいかなることぞと思ひ惑はるれど、申さむ方なし。なみ〳〵の人ならばこそ、荒らかに引きかなぐらめ。それだに數多の人の知らむはいかゞあらむ。心も騷ぎて暮ひ來たれど君は動もなくて、奥なる御座に入り給ひぬ。疎ならず契り慰め給ふこと多かるなるべし。鷄もしば〳〵鳴きぬ。人々起き出でゝ、「いぎたなかりける夜かな。御車引き出でよ。」などいふなり。守も出で來て、「女などの御方違ならばこそ、夜深く急ぎ給ふべきかは。」などいふ。君は、またかやうの序あらむこともいと難し。いかでかは御文なども通はむ。事のいとせむ方なきを思すに、いと胸痛し。奥の中將も出で來て、いと苦しがれば、許し給ひてもまた引き止め給ひつゝ、「いかでか御消息も聞ゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、淺からぬ思出の珍らかなるべき例かな。」と、うち泣き給ふ御氣色、いとなまめきたり。鷄もしば〳〵鳴くに心あわたゞしくて、

つれなさを恨みも果てぬしのゝめに
とりあへぬまで驚かすらむ

○「つれなさを恨み盡さぬに、鷄の鳴きて、取るものも取りあへぬまで急がすならむ。」

女、身の有樣を思ふに、いと似氣なく耻かしき心地して、めでたき君の御もてなしも何とも覺えず。常はいとすく〳〵しく、心づきなしと思ひ侮りし伊豫の守の方のみ思ひ遣られて、夢にや見えけむと、空恐ろしく愼まし。

身の憂さを歎くに飽かで明くる夜は
とり重ねてぞ音も泣かれける

○「憂き身を飽くまで歎く間もなく夜の明けて、鷄の鳴くは、憂き身に更に悲しさを取り添へて、我も聲に出して泣かれたり。」

事と明くなれば、君、障子口まで送り給ふ。内も外も人騷がしうあわたゞしければ、引き立てゝ別れ給ふ程、心細く、隔つる關と見えたり。

御直衣など着給ひて、南の勾欄にしばしうちながめ給ふ。西面の格子急ぎ上げて人々覗くべかンめり。簀子の中の程に立てたる小障子の上より、ほのかに見え給へる君の御有樣を、身に染むばかり思へる好き心の人どもあンめり。月は有明にて光をさまれども、顏けざやかに見えて、なか〳〵をかしき曙なり。何心なき空の氣色も、見る人から、所柄より艶にも凄くも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸痛く、言傳やらむよすがだになきをと、顧みがちに出で給ふ。殿に歸り給ひても、とみにもまどろまれ給はず、また相見るべき方なきを、ましてかの人の思ふらむ心の中、いかならむと心苦しく思し

遣る。「容貌など優れたることはなけれど、目安くもてなしたる中の品かな。限なく見集めたる人のいひし事は、げに。」と思し合せられけり。

この頃は左の大臣の大殿にのみおはす。なほかく搔き絶えては、女の思ふらむことのいとほしく、御心にかゝりて苦しく思しわび給ひて、紀の守召したり。君、「かのありし子は、我に得させてむや。らうたげに見えしを、身に近く使ふ人にせむ。上にも我奉らむ。」と宣へば、「いと畏き仰言に侍るなり。姉なる人に語り合せ見む。」と申すにも、胸潰れて思せど、「その姉君は其許の弟や持たる。」「さも侍らず。この二年ばかりかくておはすれど、親の掟に違へりと思ひ歎きて、心ゆかぬやうになむ聞き侍り。」と申す。

○親の掟に違へり　父衛門督は宮仕に出さむと思ひしに背きて、伊豫の守に嫁ぎしをいふ。

君、「哀れのことや。容貌よろしと聞えし人ぞかし。誠によしや。」と宣へば、「怪しうは侍らざるべし。疎々しう侍れば、○世の譬にて睦れ侍らず。」と申す。

○世の譬　いかなる譬のありしか明らかならず。「生さぬ仲」などやうの譬ありしなるべし。

さて五六日ありて、かの小君率て參れり。細やかに、をかしとはなけれど、なまめきたる樣して、貴人と見えたり。君は召し入れて、いと懷かしく語らひ給ふ。童心地に君をいとめでたく嬉しと思ふ。姉の君のことも委しく問ひ聞き給ふ。さるべき事は答などして、耻かしげに靜まりたれば、いひ出でにくし。されどいとよくいひ知らせ給ふ。「かゝることこそありけれ。」と、小君ほの心得て思の外に思へど、幼き心に深くもたどらず、御文を持て來たれば、女あさましきに涙も出で來ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、御文を面隱しに展げたり。御言の葉いと多くて、

見し夢をあふ夜ありやと歎く間に
目さへあはでぞ頃も經にける

○「夢あふ」とは、夢の事實となるをいふ。「逢ふと見し夢の事實になる夜もあらむかと、歎きつゝ待ちし間に、夢のあはざるのみか、目も合はずして久しく過ぎたり。」

○ぬる夜なければ。」など

○ぬる夜なければ　古歌、「戀しさを何につけてか慰まむ、夢にも見えずぬる夜なければ。」

目も及はぬ御書き樣に、目も霧り塞がりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひつゞけて臥し給へり。またの日、小君召したれば、參るとて御返請ふ。女君、「かゝる御文、見るべき人もなし。と聞えよ。」といへば、小君うち笑みて、「違ふべくも宣はざりしものを、いかでさは申さむ。」といふに、心やましく、殘なくこの子に知らせてけりと思ふに、つらきこと限りなし。「いで、およすけたることはいはぬぞよき。よしさらば、な參り給ひそ。」とむづかられて、「召すにいかで參らざるべき。」とて參りぬ。君、召し寄せて、「昨日待ち暮しゝを、我を思ふまじきなンめり。」と怨じ給へば、顏うち赤らめて居た

り。「御返いづら。」と宣ふに、「しか〳〵。」と申すに、「いふ甲斐なの事や。あさまし。」とて、またも御文賜へり。「吾子は知らじな。我は伊豫の翁より先に見し人ぞ。されど、我を頼もしげなく頭細しとて、ふつゝかなる男君設けて、かく侮り給ふなンなり。さりとも吾子は我が子にてあれよ。翁は行先短かゝりなむ。」と宣へば、「さもありけむ。いみじかりけることかな。」と思へるを、可笑しと思す。この子を繦はし給ひて、内裏にも率て參りなどし給ふ。我が御櫛恒殿に宣ひて、裝束などもせさせ、誠に親めきて扱ひ給ふ。御文は常にあり。されど、女は、「この子もいと幼し。思の外に御文どもの散りもせば、輕々しき名をや取り添へむ。我が身の程のいと似氣なかるべく思へば、うち解けたる御答も申さず。ほのかに見し君の御氣配有樣は、げになみ〳〵ならむやはと、思ひ出でぬにはあらねど、をかしき樣を見せ奉りても、何にかはなるべきなど思ひ返すなりけり。君は思し怠る時の間もなく、心苦しくも戀しくも思し出づ。女の深く思へりしかの夜の氣色などのいとほしさも、晴るけむ方なく思しつゝく。輕々しく紛れて立ち寄り給はむも、人目繁からむ所には、はしたなき振舞や顯れむと、かの人の爲にもいとほしく思し煩ふ。

例の内裏に日數經給ふ頃、君はさるべき方の御物忌待ち出で給ひて、俄にまかンで給ふ眞似して、道の程よりおはしたり。紀の守驚きて、○遣水の面目と畏り悅ぶ。

○遣水の面目　庭に引き入れたる流の御心に適ひたる樣に、かく重ねておはしたるものと心得たるなり。

小君には晝つ方より、「かくなむ思ひ寄れる。」と宣ひ契れり。旦暮繦はし馴らし給ひければ、今宵も先づ召し出でたり。女にもさる御消息ありけるが、かく思し謀り給ふに、御心を淺くは思ひなされねど、さりとてうち解けて見え奉りても、人氣なき我が身なれば、あぢきなく夢のやうにて過ぎにし一夜の嘆きを、またや加へむと思ひ亂れて、また、さ待ちつけまゐらせむも耻かしければ、小君が出でぬる程に、「客人にいと氣近ければ心苦し。心地も惱ましければ、忍びてうち叩かせなどもせむに、程離れて。」とて、渡殿に中將といひしが局して居たる隱ろへ所に移ろひぬ。君はさる心して、人疾く靜まらせて御消息あれど、小君は女を尋ね會はず。よろづの所求め歩きて、渡殿に分け入りて、辛うじてたどり來たり、いとあさましくつらしと思ひて、「いかに君のいふ甲斐なしと思さむ。」と、泣きぬばかりにいへば、女、「かく怪しからぬ心は使ふものか。幼き人のかゝる事いひ傳ふるは、いみじく忌むなるものを。」といひ威して、「心地惱ましければ、人々近くさぶらはせて押へさせてなむ。と聞えさせよ。怪しと誰も〳〵思ふらむ。」といひ放ちて、心の中には、かく品定まりぬる身ならで、過ぎにし親の故郷なから、たまさかにもかゝる御消息待ちつけ奉らば、をかしうもやあらまし。强ひて思ひ知らぬ顏に見消ちまゐらすを、いかに身の程知らぬやうに思すらむと、我が心ながら胸痛く、さすがに思ひ亂る。とてもかくても今はいふ甲斐なき宿世なりければ、無心に心づきなきものにて止みなむと思ひ果てたり。君は、小君のいか

に謀りなすらむと、まだ幼きに心許なく待ち臥し給へるに、不用なる由を申せば、「あさましく珍らかなりつる女の心かな。我が身もいと耻かしくこそなりにけれ。」とて、いといとほしき御氣色なり。とばかり物も宣はず、いたううめきて憂しと思したり。

帚木のこゝろも知らで園原の
道にあやなく惑ひぬるかな

○信濃國の傳説に、園原の伏屋といふ所に、帚に似たる樹あり。遠くよりは見ゆれど、近く寄れば消えて見えずといふ。

○「女の心は園原の帚木の如く、近寄る甲斐もなきを知らず、漫りに惑ひぬるよ。」

○本篇の題はこの歌及び次の返歌による。

いはむ方こそなけれ。」と宣へり。女もさすがにまどろまれざりければ、

數ならぬ伏屋に生ふる名の憂さに
あるにもあらず消ゆる帚木

○「數ならぬ憂き身なれば、あるにもあられず、伏屋の帚木の如く消ゆ。」

と申したり。小君いといとほしさに、ねぶたくもあらで惑ひ歩くを、人怪しと見るらむと、わび給ふ。例の人々はいぎたなけれど、君一所はすゞろにすさまじく思しつゝけらるれど、女の世の人に似ぬ心樣のなほ消えぬも口惜しく、かゝるにつけてこそ、却りて我が心も止るなれと、かつは思しながら、目覺しくつらければ、さばれと思せど、さ思し果つまじくて、「隱れたらむ所にだに率て行け。」と宣へど、「いと亂りがはしき所にさし籠りて、人數多侍るめれば、畏くこそ。」と申す。いといとほしと思へり。「よし、吾子だにな我を思ひ棄てそ。」と宣ひて、御傍に臥せさせ給へり。小君は、君の若く懐かしき御有樣を、嬉しくめでたしと思ひたれば、君もつれなき人よりは、なかなかあはれに思さるとぞ。

空蟬　うつせみ

寢られ給はぬまゝに、「我はかく人に憎まるゝにも馴らはぬに、今宵なむ始めて憂しと世を思ひ知りぬれば耻かしうて、長らふまじくこそ思ひなりぬれ。」など宣へば、小君は涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。一夜の手探りに女の細く小さかりし程、髮のいとしも長からざりし氣配など、この子に似通ひたりと覺ゆるも、思ひなしにやあはれなり。あながちにたどり寄らむも人聞惡かるべく、目覺しくつらしと思し明し給ふ。例のやうにも宣ひ纏し給はで夜深う出で給へば、小君はいとほしくさうく〳〵しと思ふ。女もなみ〳〵ならずいとほしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲り給ひにけりと思ふにつけても、かうつれなくて止み給ひなむも心憂く、さりとて強ひていとほしき御振舞絶えざらむも心憂かるべし。よき程にかくて閉ぢめてむと思へど、たゞならずながめがちなり。君は心づきなしとは思しながら、かくては止むまじう御心に掛り、人聞惡く思しわびて、小君に、「いとつらうも心憂くも覺ゆるに、强ひて思ひ返せど、我ながら我が心にしも從はず苦しければ、さりぬべき折を見て、對面すべく謀れ。」と宣ひ渡れば、小君は煩はしけれども、かゝる事にても宣ひ纏すは嬉しう覺えたり。

幼き心地にも、いかならむ折にかと待ち渡るに、紀の守、國に下りなどして、女どちのどやかなる頃、

夕闇の道たど〳〵しげなる紛れに、我が車にて率て奉る。君は、この子も幼きにいかならむと思せど、きのみためらふまじければ、さりげなき御姿にて、門など鎖さぬ前にと急ぎおはす。人見ぬ方に引き入れて下し奉る。童なれば、宿直人なども殊に見入れ追從せず、心安し。東の妻戸に立たせ奉りて、我は南の隅の間より、格子叩きのゝしり明けさせて入りぬ。女房達、「あらはなり。」といふなり。「なぞ、かう暑きに、この格子は下されたる。」と問へば、「晝より西の御方の渡らせ給ひて碁打たせ給ふ。」といふ。

○西の御方　西の對に住む女にて、伊予守の先妻の子なり。

君はさ對ひ居たらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でつゝ、簾の狹間に入り給ひぬ。小君の入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるによりて、西の方に見通し給へば、この際に立てたる屏風も、端の方押し疊まれたるに、暑ければにや、几帳なども帷子うち上げて取り遣りなどしたれば、いとよく見入れらる。

○几帳　帷子を垂れて内外を隔つる具。（「當時の世相」第一三圖）

火近うともしたり。母屋の中柱にそばめる人や我が心掛くる人と、まづ目止め給へば、濃き綾の單襲なンめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人の、さゝやかなる姿ぞしたる。顏などはさし對ひたる人などにも見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ〳〵として、いたう引き隱したンめり。

今一人は東向にて殘る所なく見ゆ。白き羅の單襲、○二藍の小袿めくものうち解けて着なして、

○二藍の小袿　二藍は紅と藍とにて染めたる色。小袿は、たゞ袿ともいひ、婦人の上着。（「當時の世相」第一一圖）

紅の袴、腰引き結へる際までも胸あらはに、品劣りたるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶ〳〵と肥えて、そゞろかなる人の頭つき額つき物あざやかに、まみ口つき、いと愛敬づき、華やかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩の程、いと清げに、すべてねちけたる所なくをかしげなる人と見えたり。君は、さこそ親の世に類なしと思ふらめとをかしく、少し靜かなる氣を添へばやと見給ふ。才なきにはあるまじ。碁打ち果てゝ蝕さすわたり心敏げに見えて、きは〳〵しうさうどけば、奥なる人はいと靜かに、「待ち給へや。そこは持にこそはあらめ。このわたりの劫をこそ。」などいへど、

○持、劫　持も劫も碁の詞。持は勝負なきこと。劫は敵を劫す意なり。

今一人は、「いで、この度は負けにけり。隅の所々いで〳〵。」と指を屈めて、十、二十、三十、四十、など數ふる樣、○伊豫の湯桁も心許なかるまじう見ゆ。少し品劣りたり。

○伊豫の湯桁　伊豫國道後温泉には桁を多く渡しあり。物の數の多き例に引く。湯桁を數ふるも心許なからぬ程よく數へたるは却りて下品に思はるゝなり。

奥の人はたとしへなく口蔽ひてさやかにも見せねど、君は目をつとつけ給へれば、おのづから側目に見ゆ。目少し腫れたる心地して、華々とあざやかなる所なくねびれて、匂はしき所も見えず。いひ立つれば、惡きによれる容貌を、いとようもてつけて、この華やかなる人よりは心ありと目止めつべき樣したり。今一人は賑はしく愛敬づきをかしげなるに、いよ〳〵誇りかにうち解けて笑ひ戯るれば、匂多く見えて、いとをかしき人樣なり。あはつけしとは思しながら好き〳〵しき御心には、これも思し棄つまじかりけり。これまで君の見給ふ人は、皆うち解けたる折なく、引き繕ひ側める上べをのみこそ見給へ、かくうち解けたる人の有樣を垣間見などは、まだし給はざりつることなれば、かの人々の何心もなうさやかに見ゆるはいとはしながら、久しう見給はまほしきに、小君出で來る音すれば、やをら出で給ひぬ。

小君は、君の渡殿の戸口に寄り居給へるを、いと畏しと思ひて、「例ならぬ人侍りて、近うも寄り難く。」と申せば、「さて今宵も徒に歸してむとや。いとあさましう辛うこそあンべけれ。」と宣へば、「なでてか。あなたに歸り侍りなば、謀り侍りなむ。」と申す。「さも靡かしつべき氣色にこそあれ。童なれど、物の心ばへ、人の氣色見つべく靜まれるを。」と思すなりけり。碁打ち果てつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人々別るゝ氣配などすなり。女房達、「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子は鎖してむ。」とて鳴らす。君、「靜まりぬなり。入りてさらば謀れ。」と宣ふ。この子も姉の心は撓む

所なくまめやかなれば、いひ合せむ方なくて、人少なゝらむ折に君を入れ奉らむと思ふなりけり。君、「紀の守の妹もこなたにあるか。我に垣間見させよ。」と宣へば、「いかでかさることはし侍らむ。格子には几帳添へて侍る。」と申す。「さかし、されども。」と可笑しく思せど、見つとは知らせじ。いとほしと思して、たゞ夜更くることの心許なさを宣ふ。小君は、この度は妻戸を叩き、童女に明けさせて人る。皆人々靜まり寢にけり。小君、「この障子口にまろは寢たらむ。風吹き通せ。」とて、疊廣げて臥す。女房達、東の廂にいと數多寢たるなるべし。戸明けつる童女もそなたに入りて臥しぬれば、小君、とばかり空寢して、火明き方に屏風廣げて影ほのかなるに、やをら君を入れ奉る。君は、嗚呼がましき事もこそと思すに、いと愼ましけれど、導くまゝに、母屋の几帳の帷子引き上げてやをら入り給ふとすれど、皆靜まれる夜なれば、御衣の氣配柔かなるも、いと著かりけり。女はさこそ忘れ給ふを嬉しきことに思ひなせど、怪しく夢のやうなりし一夜の心に離るゝ折なき頃にて、心解けてはいと寢られずなむ。晝はながめ、夜は寢覺めがちなれば、○春ならぬこのめもいとなく欺かしきに、

○春ならぬこのめもいとなく　古歌、「夜は覺め晝はながめに暮されて春はこのめもいとなかりけり。」「このめ」は、「この目」を「木の芽」に掛く。「いとなかりけり」は、暇なかりけり。「夜は覺め、晝はながめてのみ暮して、我が目も暇なかりけり。」

碁打ちつる女君、今宵はこなたにと、今めかしくうち語らひて寢にけり。若ければ何心なくいとよくまどろみたるなるべし。かの人は、かゝる氣配のいと香ばしくうち匂ふに顏をもたげたるに、單衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき寄り給ふ氣配いと著し。あさましく覺えてともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でゝ、○生絹なる單衣一つを着てすべり出でにけり。

○生絹　練らぬ糸にて織りたる絹。輕く薄し。

君は入り給ひて、たゞ一人臥したるを心安く思す。床の下に女房二人ばかりぞ臥したる。衣を押し遣りて寄り給へるに、ありし氣配よりは手當り物々しく覺ゆれど、思しも寄らずかし。いぎたなき樣など、怪しく樣變りたるにやうゝ見知り給ひて、あさましく心やましけれど、人違と知られなむには、嗚呼がましく、怪しと思ふべし。本意の人を尋ね寄らむにも、かばかり遁るゝ心なンめれば、甲斐なくこそと思す。かのをかしかりつる火影ならばいかゞはせむと思しなるも、惡き御心淺さなンめりかし。女はやうゝ目覺めて、いと思の外にあさましきに呆れたる氣色にて、何の心深くいとほしき用意もなし。君は我と知らせじと思せど、いかにしてかゝることぞと、後にこの人の思ひ廻らさむに、我が爲には事にもあらねど、かのつらき人のあながちに世を愼むにいとほしければ、度々の方違にことづけ給ひし樣など、いとよくいひなし給ふ。

○方違　塞りたる方角を避くる爲に他の所に中宿するをいふ。

さりとて思ひたどらむには心得つべきことなれど、まだいと若き心に思ひ分かず。君は憎しとはなけれ

ど、御心止るべき所もなき心地して、なほかの人をいみじくつらしと思す。いづこに這ひ隠れて、我を嗚呼(愚カ)なりと思ひ居たらむ。かく執念き人は稀なるものをと思すにも、生憎に忘れ難う思ひ出でられ給ふ。この人も何心なく若やかなる氣配(愛ラシ)もあはれなれば、さすがに情々(なさけ〳〵)しく契り置かせ給ふ。「人知りたることよりも、かやうなるはあはれも添(深キ感情ヲ)ふ事となむ昔の人もいひける。相思ひ給へよ。慎むことなき身にしもあらねば、我ながら心にも任すまじくなむ。また人々も許されじかしと思ふに胸痛くなむ。忘れで待ち給へよ。」など、なほ〳〵(尤モラシク)しく語らひ給ふ。女、「人の思ひ侍らむことの恥かしく怪しければ、聞えさ申上ダマジ)すまじき。」とうらもなくいふ。君、「なべての人(サキナキ)に知らせばこそ悪しからめ、この小さき上人(小君)などに傳へて御消息聞えむ。さる氣色なくもてなし給へ。」などいひ置きて、かのつらき人の脱ぎ置きたる薄衣を取りて出で給ひぬ。

小君近く臥したるを起し給ふに、心許なう思ひつゝ寝ければ、ふと目覚しぬ。戸をやをら押し明くるに、老いたる女房の聲にて、「あれは誰そ。」と、おどろ〳〵(事々シタ)しく問ふ。小君煩はしくて、「まろぞ。」と答ふ。「夜中にこはなぞ歩かせ給ふ。」と、賢(氣ノキノタル様シテ)しがりて外様へ來。憎くて、小君、「あらず。(何事ニモ)こゝもとに出づるぞ。」とて、君を押し出だし奉るに、曉近き月、隈なくさし出でゝ、ふと人の影見えければ、「またおはするは誰そ。」と問ふ。答も待たで、「民部の御許(女房)なン(見苦シカラズ)なり。怪しうはあらぬ長だちかな。」といふ。長高き人の常に笑はるゝをいふなりけり。老人は小君のこの人を連(民部)ねて歩きけると思ひて、「今只今立

ち並び給ひなむ。」といふ〳〵、おのれもこの戸より出でゝ來。

○立並び給ひなむ　小君もやがて民部の御許程長高くならむの意なり。

君はいとわびしけれど、押し返(押シ返シキ出來ズ)しあへず、渡殿(渡ニアル部屋)の口に掻い添ひて隠れ立ち給へれば、老人さし寄りて、「御許は今宵上(殿)にやさぶらひ給ひつる。一昨日(ひ)より腹を病みていとせむ方なければ、下(下屋)に侍りつるに、人少なゝりとて召しゝかば、昨夕參う上りしかど、なほいと堪ふまじくなむ。」と憂ふ。答も聞かで、「あな腹々。(腹立シ)今聞えむ。(後ニマタ申サム)」とて過ぎぬるに、辛うじて出で給ふ。かゝる歩きは輕々(かろ〳〵)しく危かりけりと、いよいよ思し懲りぬべし。

小君、御車の後乘(し)にて、二條の院におはしましぬ。有様宣ひて、心幼(こゝろさな)かりけりと疎(うと)み給ひて、かの人の心を爪弾(つまはじき)(嫌シミテ)をしつゝ恨み給ふ。小君、いとほしくて物も聞えず。「いと深う憎み給ふべかンめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などか餘所にても懐かしき答(いらへ)ばかりはし給ふまじき。伊豫の守に劣りける身にこそ。」など、心づきなし(氣ニ入ラズ)と思ひて宣ふ。ありつる薄衣(うすぎぬ)を、さすがに御衣(おんぞ)の下に引き入れて大殿籠(おほとのこも)れり。小君を御前(おんまへ)に臥せてよろづに恨み、かつは語らひ給ふ。「吾子(あこ)はらうたけれど、つらき人の縁(ゆかり)にこそ思ひ果つまじけれ。」と、まめやかに宣ふを、小君はいとわびしと思ひたり。しばしうち休み給へど、寝られ給はず。御硯(みすゞ)急ぎ召して。わざとの御文(おんふみ)にはあらで、畳紙(たゝうがみ)(懸紙)に手習(書キ散ラシ)のやうに書きすさび給ふ。

空蟬の身をかへてける木の下に
なほ人がらのなつかしきかな

○「蟬の脱殼のやうに衣のみを置きて道ひ隠れたれど、なほその人柄を懐かしく思ふ。」
○この歌よりこの女君を空蟬の君といふ。
○本篇の題はこの歌による。

と書き給へるを、小君は懐に引き入れて持たり。かの若き人もいかに思ふらむといとほしく思せど、思し返して御言傳もなし。かの薄衣は小袿のいと懐かしき人香に染めれば、身近く馴らしつゝ見居給へり。

小君、かしこに行きたれば、姉君待ちつけていみじう宣ふ。「あさましかりしに、とかく紛らはしても、人の思はむこと避り所なきに、いとなむわりなき。かう心幼きを、君もいかに思すらむ。」とて辱しめ給ふ。小君、左右に苦しく思へど、かの御手習取り出でたり。さすがに取りて見給ふ。かの藻脱をいかに伊勢をの海士の鹽馴れてやなど思ふもたゞならず、いとよろづに思ひ亂れたり。

○伊勢をの海士の　後撰集、「鈴鹿川伊勢をの海士の棄て衣、鹽馴れたりと人や見るらむ。」「伊勢を」の「を」は感詞。「鹽馴れたり」は、潮に染みたるにて、着古したるをいふ。上の句は「鹽馴れたり」といふ爲の詞、「着古したりと人の見るならむ。」

西の君も物耻かしうはしたなき心地して歸り給ひけり。また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめ居たり。小君の渡り歩くにつけても胸のみ塞がれど御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、戯れたる心地にも物哀れに思ふなるべし。つれなき人もさまざまに思ひ鎮むれど、淺くもあらぬ御氣色を思ひ知るにつけても、○ありしながらの我が身ならばと、取り返すものならねど、忍び難ければ、

○ありしながらの　古歌、「取り返すものにもがなや世の中を、ありしながらの我が身と思はむ。」「取り返す」は、元に戻す。「ありしながら」は、昔のまゝ。「元に戻す術もがな。さすれば昔のまゝの我が身と思ふべし。」

この御疊紙の片つ方に、

空蟬の羽に置く露の木隱れて
忍びゝにぬるゝ袖かな

○「蟬の羽に置く露の木隱れたる如く、人知れず袖を濡らす。」

とて止みにけり。

夕顔　ゆふがほ

六條わたりの御忍歩きの頃、

○御忍歩き　前の東宮某親王の妃は、東宮薨去の後、一人の幼き御女と共に六條に住み給ひしが、いつの程よりか、源氏の君、こゝに通ひしなり。この妃を六條の御息所といふ。

内裏よりまかンで給ふ中宿に、大貳の乳母のいたく煩ひて尼になりけるを訪はむとて、五條わたりなる尼の家尋ねておはしたり。御車入るべき門は鎖したれば、人して尼の子の惟光を召させて待たせ給ひける程、

○惟光　藤原惟光といひ、この時右近衛將監にて、源氏の君に仕へし誠實なる人なり。

むつかしげなる大路の樣を見渡し給へるに、この家の傍に檜垣といふもの新しうして、

○檜垣　檜の薄板を網代に組み、それを張りたる垣。網代は竹行李などのやうに綾に組みたるをいふ。

上は半蔀四五間ばかり上げ渡して、

○半蔀四五間　蔀は格子の裏に板を張りたる戸にて、檜の日覆などに用ふ。半蔀は蔀を上半分釣り

上ぐるやうにしたるものなり。四五間の「間」は、柱と柱との間をいふ。

簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影數多見えてこなたを覗く。立ちさまよふ下の方を思ひやるに、いみじく長高き心地ぞする。

○長高き心地　覗き居る人々の下半身は半蔀に隠れて見えねば、長高き心地したるなるべし。

いかなる者の集へるならむと思さる。御車もいたうやつし給へり。前驅も追はせ給はず。我を誰とか知らむとうち解け給ひて、少しさし覗き給へれば、門は蔀のやうなるを押し明けたる、所狹く物はかなき住居なれば、哀れに、いづこかさしてと思しなせば、玉の臺も同じ事なり。

○いづこかさして、　古今集、「世の中はいづこかさして我がならむ、行き止るぞ宿と定むる。」「いづこかさして」は、何れの家を指し定めて。「我がならむ」は、我が家ならむ。「世の中には我が家と定めたる家はなし。行き止まりし家を我が家と思ふ。」

○玉の臺　かゝる物はかなき住居も、玉を飾りし殿も、同じきなり。

○切懸　板塀の一種。柱に切り缺けを造り、こゝに筱めて、板を横に渡して造りたる塀なり。

○切懸めくものに、

いと青やかなる蔓の心地よげに這ひかゝれるに、白き花ぞおのれひとり笑の眉開けたる。「遠方人に物申す。」と獨ごち給へば、

○遠方人に物申す　古今集、旋頭歌の中に、「うち渡す遠方人に物申す我、そのそこに白く咲けるは何の花ぞも。」「うち渡す」は、見渡す。「遠方人」は、遠くにある人。こゝにては、「その白く咲けるは何の花ぞ。」と問ひしなり。

○御隨身　高位高官の人に朝廷より賜はる護衛の武官。近衛府の舎人なり。

○御隨身つい居て

「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける。」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりにて、この面かの面怪しううちよろぼひて、むねむねしからぬ軒の端などに這ひ纏りたるを、「口惜しき花の契や。一房折りて參れ。」と宣へば、御隨身、この舘押し明けたる門に入りて折る。さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴長く着なしたる、をかしげなる童女の出で來てうち招く。

○生絹　練らぬ糸にて織りたる絹なり。薄く輕し。

白き扇のいたく焦したるを、「これに置きて參らせ給へ。枝も情なげなンめる花を。」と取らせければ、折しも門明けて惟光の朝臣の出で來たるして奉らす。惟光、「鍵を置き惑はし侍りて、いと不便なることなりや。物のあやめ見別け侍るべき人も侍らぬわたりなれど、亂がはしき大路に立ちおはして。」と畏り申す。御車引き入れて下り給ふ。惟光が兄の阿闍梨、婿の參河の守、女など渡り集ひ、かくおはしましたる喜びを、またなき事に畏る。尼君も起き上りて、「惜しげなき身なれど、捨て難く思ひ侍りつるは、たゞかく御前にさぶらふ事もえせずなりなむと、口惜しう思ひためらひ侍りしなれど、忌む事の驗にはみがへりてなむ。かく渡りおばしますを見侍りぬれば、今なむ阿彌陀佛の御光も心清く待たれ侍るべき。」など申して弱氣に泣く。

○阿彌陀佛の御光　阿彌陀佛を信ずれば、その人の死する時に、阿彌陀佛來迎して、極樂淨土に導き給ふといふ佛説による。

君、「日頃御惱の怠り難きを安からず歎き渡りつるに、かく世を捨つる樣にし給へば、いと哀れに口惜しうなむ。命長くてなほ我が位高からむをも見給へ。さてこそ九品の上にも障りなく生れ給はめ。

○九品の上　極樂に往生するに九等の差あり。上、中、下にそれ〴〵上、中、下に分つ。その上の上に生れ給はなの意なり。

この世に少しにても恨殘るは、惡き業となむ聞く。」など涙ぐみて宣ふ。乳母などやうの人は、かたはなるをだにいみじうまほに見なすものを、まして此の君に馴れ仕へまつりつるは、我が身ながら面目ありて畏く思ふべかンめれば、すゞろに涙がちなり。子どもは尼をいと見苦しと思ひて、背きぬる世を去り難きやうにや君も御覽ぜられ給はむと、突きじろひ目くはす。君はいと哀れと思して、「幼かりつる程に、思ふべき人々のうち乘て給ひにける後、我をはぐゝむ人、數多ありしかど、親しく思ひ睦びてまたな

くなむ思ひし。人となりて後は、限りあれば朝夕にしも見奉らず、心のまゝに訪ひ參づることはなけれど、なほ久しう對面せぬ時は、心細く覺ゆるを、○さらぬ別れのなくもがなとなむ。」など、細やかに語らひ給ひて、

○さらぬ別れのなくもがな　伊勢物語、「世の中にさらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る人の子の爲。」在原業平の歌なり。「さらぬ」は、遁れ難き。「さらぬ別れ」は、死別なり。

押し拭ひ給へる御袖の匂も、いと所狹きまで薫り滿ちたるに、尼を見苦しと見つる子どもゝ、げに思へば、なみ〳〵ならぬ宿世ぞかしと、皆うちしほたれたり。

修法などまた〳〵始むべき事ども掟て宣はせて出で給ふとて、惟光に紙燭召して、

○紙燭　紙燭は松の細き木又は紙撚りに脂を塗りてともす燈火なり。

ありつる扇御覽ずれば、もて馴らしたる移香、いと染み深う懷かしうて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の
光そへたる花のゆふ顔

○「夕暮なれば、白露の光をそへたる花を、推し量りて夕顔の花と見る。」にて、裏に「推し量りて光源氏の君と見まゐらす。」の意あり。

○この歌によりこの女君を「夕顔の君」といふ。

○本篇の題もこの歌と次の返歌による。

何となく書き紛らはしたるも、氣高く由ありげなれば、いと思の外にをかしう覺え給ふ。君、「この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや。」と宣へば、惟光、例のうるさき御心とは思へども、さりげなう、「この五六日こゝに侍れど、病者の事を思ひ扱ひ侍る程に、隣の事は聞き侍らず。」など、はしたなげに申せば、「我を憎しとこそ思ひたれな。されどこの扇の尋ねまほしき故ありて見ゆるなれば、なほこのあたり知れらむ者を召して問へ。」と宣へば、惟光入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。「揚名の介なりける人の家になむ侍りける。

○揚名の介　明かならず。國の長官を「守」、次官を「介」といひ、以下掾、目あり、總稱して國司といふ。平安時代國司の制亂れて、名義のみにて俸祿も職掌もなき國司あり、これを揚名の守、介などといふとも、また皇族高官などに特に國司の官位俸祿を賜はることあり。この場合、その皇族高官の私に任ぜし國司をいふともいふ。

男は田舍にまかりて、女なむ若く好き者にて、同胞など宮仕人にて來通ふと申す。委しき事は下人の知り侍らぬにやあらむ。」と申す。さらばその宮仕人なンなり。したり顔に物馴れていひつるかな。日覺しかるべき人の際にやあらむと思せど、我を指していひかゝれる心の、憎からず過し難しと思すぞ、例のこの方には輕々しき御心なンめりかし。御疊紙に、あらぬ樣に書き換へ給ひて、

寄りてこそそれかとも見め黄昏に
ほの〳〵見つる夕顔の花

○「黄昏におぼろげに見えし夕顔の花は、近く寄りて見ねばそれと分るまじ。」裏に、「近寄りて見ねば、我と誰とも見定め難かるべし。」の意をいふ。

ありつる御随身して遣し給ふ。女はまだ君を見ざりけれど、御側目をいと著く思ひ中てたりければ、見過さで驚かしまゐらせけるに、御答もなくて程經ければ、生はしたなき心地しつるに、かくわざとめかしく御返ありければ、あまえて、いかに御消息聞えむなど、人々いひしろふべかンめれど、御随身は目覺しと思ひて歸りぬ。

○日覺しと思ひて　御消息など申上ぐるは分に過ぎたることなりと恥しみてたり。

御前栽の松明ほのかにて、いと忍びて出で給ふ。半蔀は下してけり。隙々より見ゆる火の光、螢より異にほのかに哀れなり。

六條わたりの御志の所は、木立、前栽などなみ〳〵の所に似ず、いとのどやかに心にくゝ住みなし給へり。御息所のうち解けぬ御有様などの氣色異なれば、ありつる夕顔の垣など思し出でらるべくもあらずかし。翌朝少し寢過し給ひて、日さし出づる程に出で給ふ。朝けの御姿はげに人のめでまゐらせむも道理なる御様なりけり。今日もこの蔀の前渡り給ふ。來し方も過ぎ給ひしわたりなれど、今はたゞかのはかなき一節に御心止りて、いかなる人の住所ならむと、往來に御目止め給ひけり。

惟光日數經て參れり。「煩ひ侍る人なほ弱氣に侍れば、とかう見扱ひ侍りてなむ。」など申して、近く參り寄りて申す。「仰せられし後なむ隣の事知りて侍る者呼びて、問ひ侍りしかど定かにも申し侍らず。『いと忍びて、この五月の頃ほひよりおはします人なむあるべけれど、いかならむ人とも更に家の中の人にだに知らせず。』となむ申す。時々中垣より垣間見し侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。○褶めく物、かごとばかり引き懸けなどしてかしづく人侍るなンめり。

○褶、女の腰より後に垂るゝ絹の布を裳といひ、この裳の外に前の方に着くる表裳を褶といふ。褶を着くるは禮裝なれば、女房などの主としたる女君あるらしきなり。

昨日夕日の名殘なくさし入りて侍りしに、文書くとて居て侍りし人の顔こそいとよく侍りしか。物思へる氣配して、人々も忍びてうち泣く樣などなむ著く見え侍る。」と申す。君、うち笑み給ひて、委しく知らばやと思したり。覺重き御身の程なれど、御齢の程、人の靡きめでまゐらせたる樣など思ふには、好き給はざらむも情なくさう〳〵しかるべし。人の承け引くまじき際にてだに、なほさりぬべき好き事は、好ましう覺ゆるものをと、惟光も思ひ居り。「もし見侍ることもやとはかなき序造り出でゝ、消息など遣し侍りしに、書き馴れたる手して口疾く返事などし侍りき。口惜しからぬ若人どもなむ侍るめる。」と申せば、「なほいひ寄れ。尋ね知らではさう〳〵しかりなむ。」と宣ふ。かの下が下と人の思ひ貶

(見下ゲシ)しゝ住居なれども、その中に思の外に口惜しからぬを見つけたらむは珍しと思すなりけり。

さてかの空蟬の君のあさましうつれなきを、

○空蟬の君、　伊豫の守の妻。帚木の巻、空蟬の巻に出づ。

この世の人には違ひて思すに、負けて止みなむことのいと口惜しく、御心に掛らぬ折なし。君はかやうのなみ〳〵の人までは思し掛け給はざりつるを、ありし雨夜の品定の後。

○雨夜の品定、　帚木の巻にあり。頭中將、左馬頭等の、女の品々を定めし物語をいふ。

ゆかしく思す品々のあるに、いとゞ隈なく求め給ふ御心なゝめりかし。何心もなく待ち顔なる片つ方の人をも哀れと思さぬにしもあらねど、つれなき人の聞かむも耻かしければ、まづこなたの心見果てゝと思す程に、伊豫の守上りぬ。

まづ急ぎ參れり。船路の仕業とて、少し黒みやつれたる旅姿、いとふつゝかに心づきなし。されど、人柄も賤しからぬ筋にて、容貌など老いたれど清げにて、由ありげにぞありける。國の物語など申すに、君は、「○湯桁は幾つ。」と問はまほしく思せど、耻かしくて、御心の中に思し出づることも樣々なり。

○湯桁は幾つ、　伊豫の道後溫泉の周圍に立てたる湯桁は、甚だ多く、數多き例にいふ。こゝにては空蟬の卷に、蒜打ちたる西の對の女君の、蒜石を數へしを見て、「伊豫の湯桁も數へ得べし。」と思ひしことを思ひ出でたるなり。

物まめやかなる大人をかく思ふも、げに嗚呼がましう(カラシク)うしろめたき事なりや。げにこれぞなみ〳〵ならぬ過なるべかりけると、○馬頭の諫、思出でゝ心苦しきに、

○馬頭の諫、　これも帚木の巻、雨夜の品定にあり。輕々しく女にかゝはり給はぬやう諫めたるなり。

女のつれなき心は口惜しけれど、男の爲にはあはれなりと思しなさる。「女をばさるべき方に預けて、北の方をば率て下りぬべし。」と聞き給ふに、一方ならず心あわたゞしくて、今一度對面はあるまじきことにやと、小君を語らひ給へど、心を合せたらむにてだに、輕らかに紛れ給ふまじきを、まして女は、いと憂かるべきことに思へば、さるべき折々の御答など懷かしく聞えつゝ、なげの筆遣につけたる言の葉も、らうたげに目止るべき節加へなどして、あはれと思しぬべき氣配なれば、君も、つれなく口惜しきものゝ、忘れ難しと思す。今一つ方は、主定りぬとも、變らずうち解けぬべく見えし樣なるを頼みて、とかく聞き給ふことあれど、御心も動かずぞありける。

秋にもなりぬ。左の大殿には途絶え給へば、恨めしうのみ思ひまゐらせ給へり。六條の御息所は、もとよりうち解け難かりし御氣色なりしを、靡かせ給ひて後、引き返しなほざりならむはいとほしかしされど今は、餘所なりし折、御心を盡し給ひしやうには思し給はぬも、いかなる故にかと見えたり。御息所はあまりなるまで物を思ししめ給へる御心樣にて、御齡の程も似氣なく、人の謗りまゐらすべきに、

かくつらき御夜離れのうち頻る折の寝覺、思し亂るゝことといと樣々なり。

霧のいと深き朝、君はいたくそゝのかされ給ひて、ねぶたげなる氣色にて出で給ふに、女房の中將の御許、御格子一間上げて、見送り奉り給へと覺しく、御几帳引き遣りたれば、御息所、御髪もたげて見出し給へり。君は前栽のいろ〳〵亂れたるを過ぎがてにためらひ給へる御樣、げに類なし。廊の方におはするに、中將の御許も御供に參る。紫宛色の折にあひたる羅の裳、あざやかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。

○羅の裳　羅は薄絹。裳は女の腰より後に垂るゝ絹布。（「當時の世相」第一〇圖）

君、見返り給ひて、隅の間の匂欄に暫し引き据ゑ給へり。中將の愼ましげなるもてなし、髪の下り端、目覺しくめでたしと見給ふ。君、

咲く花にうつるてふ名は愼めども
折らで過ぎ憂き今朝の朝顔

○「咲く花には、移るといふ詞は慣みていはぬものなれど、今朝の朝顔の美しければ、それに心移りて、折らでは過ぎ難し。」中將に心を移す意をいふ。

いかゞすべき。」とて、手を捉へ給へれば、中將はいと馴れて口疾く、

朝霧の晴れ間も待たぬ氣色にて
花に心を止めぬとぞ見る

○「朝霧の晴れ間も待たず歸り給ふ君は、御息所に心を止め給はぬなるべし。」

と公事にぞ聞えなす。をかしげなる童男の、好ましき姿したるが。○指貫の裾露けゞに、

○指貫　袴の一種。裾に紐を指し貫きて括る。（「當時の世相」第七圖）

花の中に混りて、朝顔折りて奉るなど、繪に描かまほしげなり。大方にうち見奉る人だに、君を心に染め奉らぬはなし。物の情知らぬ山賤も花の蔭には休らはまほしきにや。この御光を見奉る人々は、程々につけて、我がかなしと思ふ女を仕うまつらせばやと願ひ、もしは、口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、我が賤しきにも、なほこの御あたりにさぶらはせむと思ひ寄らぬはなかりけり。まして懷かしき御氣色を見奉る人は、さりぬべき序の御言の葉を、いかゞは疎に思ひまゐらせむ。君の旦暮うち解けてもおはせぬを、心許なき事に思ふべかンめり。

誠や、かの惟光の預なりし垣間見は、いとよく案内見取りて申す。「いかならむ人とは更に思ひ寄り侍らず。人にいみじく隱れ忍ぶる氣色になむ見え侍れど、つれ〴〵なるまゝに、南の半蔀ある長屋に渡り來つゝ、車の音などすれば、若き者ども覗きなどすべかンめるに、この主と思しき女君も渡る時侍るべかンめり。容貌なむ、ほのかなれどいとらうたげに侍る。一日前驅追ひて渡る車の侍りしを童女の覗

きて、急ぎ來て、『右近の君こそ。まづ物見給へ。中將殿こそこれより渡り給ひぬれ。』といへば、よろしき大人出で來て、『あなかま。』と手搔けども、『いかでさは知るぞ。いで見む。』とて渡る。打橋めくものを道にしてなむ通ひ侍れば、急ぎ來る人は、衣の裾を物に引き掛けて、よろぼひ倒れて、橋より落ちぬべければ、『いで、この葛城の神こそ險しうし置きたれ。』とむづかりて、物見心も醒めぬめり。

○葛城の神　昔葛城山の神、役行者に使はれて岩橋を架けし傳說により、打橋の架け方の危げなるを怒りしなり。

かの童女など、『君は御直衣姿にて、御隨身ども〻ありつ。なにがし、くれがし。』と數へしは、頭中將の隨身ども、小舍人、童男を證にいひ侍りし。」など申せば、

○頭中將　近衞中將にて藏人頭に任ぜられし人。こゝにては左大臣の長子をいふ。帚木の卷雨夜の品定に、中將の通ひし女の行方知れずなりし物語あり。

○小舍人　藏人所の卑き役なり。

君は、もし中將のあはれに忘れざりし人にやと思し寄るに、いと知らまほしげなる御氣色を見て、惟光、「私の懸想もいとよくし置きて、案內も殘る所なく見置き侍りつるに、たゞ我同士と見せて物などいふ若き人の侍れば、空おぼれして罷り歩くに、小さき兒どもの言過しつべき折など、とかく紛らして、またさる人なき樣をなむ强ひて造り侍る。」など語りて笑ふ。「尼君の訪に物せむ序に垣間見させよ。」

と宣ひけり。假にても宿れるかの住居の程を思ふに、これこそかの人々の定め侮りし下の品ならめ。その中に思の外にをかしき人もあらばなど思すなりけり。惟光いさゝかの事も御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好き心にて、いみじく謀り歩きつゝ、忍びて通はさせ初めてけり。この程の事、煩はしければ、例の書き漏しつ。

女を、いかならむ人とも知り給はねば、我も名乘をし給はで、いといたうやつし給ひつゝ、例ならず下り立ち歩き給ふは、疎には思されぬなるべしと思へば、惟光も我が馬をば奉りて、御供に走り歩く。

「懸想人のいと物げなき足許、見つけられて侍らむ時、

○懸想人のいと物げなき足許　懸想などする我が、見苦しき徒歩の姿を見つけられし時なり。

辛くもあるべきかな。」などわぶれど、君は人にも知らせ給はぬまゝに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顏をむげに見知るまじき童男一人ばかりぞ率ておはしける。もし思ひ寄ることもやとて、隣の尼の許にも中宿をだにし給はず。女はいと怪しう心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、曉の御道を窺はせ、御在所尋ねさすれど、君はいづことなく惑はしつゝ、さすがにあはれに、この人を暫しも見ではあるまじく御心に掛りたれば、輕々しき事と思し返すも心苦しく、いとしば〳〵おはします。かゝる筋はまめやかならむ人だに亂るゝ折々あるに、君は、これまではいと目安く鎭め給ひて、人の咎めまゐらすべき振舞はし給はざりつるを、今は怪しきまで、今朝の程、晝間の隔も心許なくのみ思ひ煩ひ給へば、

いと物狂ほしく、さまで心止むべき人の様にもあらずと、いみじく思ひ醒まし給へど、かの人の氣配のいとあさましきまで柔に、物深く重々しき所は劣りて、ひたぶるに若びたれども、世を知らぬにもあらず。いとやむごとなき人にはあるまじきに、いかでかうしも止る心ぞと、返す〳〵怪しく思す。御裝束もやつしたる狩の御衣を着給ひ、

○狩の御衣　狩衣をいふ。元は鷹狩の衣、後禮服となれど、直衣よりは略裝なり。（「當時の世相」第八圖）

様を變へ、顔をもほの見せ給はず、人靜まりぬる夜深き頃に出入などし給へば、昔ありけむ物の變化めきて、女も心憂く思ひ歎かるれど、御氣配のめでたきは、手探りにも著かりければ、誰にかはあらむと疑ひ、「この好き者のし出でつる業にや。」と、○大夫を疑へど、

○大夫　五位をいふ。惟光は近衛將監にて五位なればなり。

惟光もさりげなく知らず顔にて、思ひ寄らぬ様に、絶えず戯れ歩けば、女方もいかなることにかと心得難く、怪しう様變りたる物思をなむしける。

君も、女のかう何心なげにたゆめ置きて、もし這ひ隱れなば、いづくをはかりとか尋ねむ。こゝは假初の隱處と見ゆめれば、いづ方にも移ろひ行かむ日をいつとも知らじと思す。なみ〳〵に思すならむには、たゞかばかりのすさびと思ひても過ぎぬべけれど、更にさて過さむとは思されず。人目を憚り給ひて隔て給ふ夜な〳〵などは、いと忍び難く苦しきまで思し給へば、人には誰とも知らせで二條の院に迎へてむ。もしその聞えありて便なかるべき事となりぬとも、さるべき契にこそはあらめ。我が心ながらかく人に染むことはなかりしを、いかなる契にかはありけむなど思し寄る。「いざ、いと心安き所にてのどかに御物語も聞えむ。」など語らひ給へば、女、「なほいと怪しう、かく宣へど、様變りたる御もてなしなれば、物恐ろしくこそあれ。」と、いと若びていへば、げにとほゝ笑まれ給ひて、「げにいづれか狐ならむな。たゞ我に謀られ給へかし。」と懷かしげに宣へば、女はいみじく靡きて、さもなりぬべう思ひたり。かく珍らかに様變りたる事なりとも、ひたぶるに男に從ふ心の、いとあはれげなる人と見給ふに、なほかの○頭中將の常夏疑はしく、

○頭中將の常夏　常夏は撫子、中將の通ひし女を、常夏によそへて歌を詠みしこと、帚木の卷雨夜の品定にあり。

語りし心様、まづ思ひ出でられ給へど、かく忍ぶるもやうこそあらめと、強ひても問ひ給はず。ふと隱るべき心様も見えねば、離れ〳〵に途絶え置かむ折こそは、さやうに思ひ變ることもあらめ、我が心ながら、○少しは他に移ろふことあらむこそあはれなるべけれとさへ思す程なればと思しけり。

○少しは他に移ろふ　我が心ながら、少しにても外の女に移ることあらば、却りて面白くもあるべきに、さはなくて、たゞこの女君をのみ思ふ心の切なれば、女の心變りして隱るゝことはあるまじと

思ふなり。

八月十五夜、隈なき月影に、隙多かる板屋、殘りなく漏り來て、見馴らひ給はぬ住居の樣も珍しきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々目覺して、あやしき賤の男の聲々、「あはれいと寒しや。今年こそ生業にも賴む所少なく、田舍の通ひも思ひ掛けねば、いと心細けれ。えい、北殿こそ、聞き給ふや。」などいひ交すも聞ゆ。いと哀れなるおのがじしの營に、起き出でゝそゝめき騷ぐも程近ければ、消えも入りぬべき住居の樣なンめりかし。されど女はのどやかに、つらきも憂きも、かたはらいたきことも、思ひ入りたる樣ならで、いと氣高く兒めかしくて、またなく亂がはしき隣の用意なさを、いかなる事とも思ひたる樣ならねば、なか〳〵いと耻かしと思はむよりは、罪免されてぞ見えける。ごほ〳〵と鳴神よりもおどろ〳〵しく踏みとゞろかす碓の音も枕上と覺ゆ。「あな耳かしがまし。」と、これにぞ思さる。何の響とも聞き知り給はず、いと怪しう目覺しき音なひとのみ聞き給ふ。くだ〳〵しきことのみ多かり。白妙の衣打つ砧の音も、かすかにこなたかなたに聞き渡され、空飛ぶ雁の聲なども取集めて、忍び難きこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き明け給ひて、諸共に見出し給ふ。狹き庭にされたる吳竹、前栽の露はなほかゝる所も同じごときらめきたり。虫の聲々亂りがはしく、壁の中のきりぎりすだに、これまで間遠に聞き馴らひ給へる御耳に、さし當てたるやうに近く鳴き亂るゝを、なかなか樣變りて思さるゝも、御志の淺からぬによろづの罪免さるゝなンめりかし。

女は白き袷に薄色のなよゝかなるを重ねて、華やかならぬ姿、いとらうたげにかよわき心地して、そこと取り立てゝ優れたることもなけれど、細やかにたを〳〵として、物うちいひたる氣配より始めてたゞいとらうたく見ゆ。少し心ばみたる方を添へたらばと見給ひながら、なほうち解けて見まほしう思さるれば、「いざ、たゞこのわたり近き所に、心安くて明さむ。かくてのみはいと苦しかりけり。」と宣へば、「いかでか俄ならむ。」と、いとおいらかにいひ居たり。されど、君はこの世のみならぬ契などまで賴め給ふに、うち解くる心ばへなど、怪しく樣變りて、世馴れたる人とも覺えねば、人の思はむ所も憚り給はで、女房の右近を召し出でゝ、御隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。こゝの人々も、かゝる御志の疎ならぬを見知れば、心許なく思ひながら賴を掛けまゐらせたり。

明方も近うなりにけり。鷄の聲などは聞えで、御嶽精進にやあらむ、たゞ翁びたる聲に額づくぞ聞ゆる。

○御嶽精進　御嶽は吉野の金峰山をいふ。この御嶽詣りの爲、身を潔めて佛に祈るを御嶽精進といふ。

起居の氣配堪へ難げに行ふ。君はいと哀れに思し、朝の露に異ならぬ世に、何を貪る身の祈にかと聞き給ふに、「南無當來導師」とぞ拜むなる。

○南無當來導師　「南無」は、梵語、「歸命」「信從」など譯し、佛に祈る時に用ふる語。「當來」は、

將來。「當來導師」は、彌勒佛をいひ、釋迦の後五十六億七千萬歳を經て世に現るべしといふ。

君、「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり。」とあはれがり給ひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて
來む世もふかき契たがふな

○「優婆塞」は、俗人のまゝにて佛道を修むる男子。こゝにては御嶽精進の翁。「來む世」は、來世。

○「今御嶽精進の優婆塞が彌勒の世までを祈るにならひて、來世までも契を變へ給ふな。」

○長生殿の古き例は忌々しくて、翼を交さむ契には引き變へて、彌勒の世をぞかね給ふ行先の御頼め、いと物々し。

○長生殿の古き例　長生殿は、唐の玄宗皇帝の宮殿。玄宗と楊貴妃の例は、その後天下大いに亂れ、楊貴妃も非命に死したれば、忌々しきなり。

○翼を交さむ契　玄宗と楊貴妃と比翼連理を誓ひしをいふ。比翼の鳥は一目一翼なる故に、雌雄並びて飛ぶ。連理は幹の同じ枝。

女、

前の世の契知らるゝ身の憂さに
行く末かけて頼みがたさよ

○「我が身の憂さに前世の宿緣の惡きも知らるゝ故、行く末は頼み難し。」

かやうの筋なども心許なかンめり。

いさよふ月にふとあくがれ出でむことを、女はさすがに思ひためらひ、とかく宣ふ程に、俄に雲隱れて、明け行く空いとをかし。はしたなき程にならぬ先にと、例の急ぎ出で給ひて、輕らかに車にうち乘せ給へれば、右近ぞ乘りける。そのわたり近き某の院におはし着きて、預召し出づる程、荒れたる門の忍草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、御車の簾をさへ上げ給へれば、御袖もいたう濡れにけり。君、「まだかやうなる事に馴らはざりつれば、心盡しなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけむ
我がまだ知らぬしのゝめの道

○「古の人もかくの如く惑ひ歩きたりけむ。明け方のかゝる歩きは、今まで知らぬことなり。」

馴らひ給へりや。」と宣ふ。女、耻ぢらひて、

山の端の心も知らで行く月は
上の空にて影や絶えなむ

○「山の端」は、月の入るべき山、こゝにては源氏の君をたとへ、「月」は自らをたとふ。

○「君の心も知らず従ふ我は、中途にてはかなく消ゆることならむ。」

心細く。」とて、物恐ろしう凄げに思ひたれば、君は、かのさし集ひたる元の住居に馴らひたればならむと、をかしう思す。

御車入れさせて、西の對の御座よそほふ程、廊の勾欄に御車引き掛けて立ち給へり。右近は艶なる心地して、來し方の事なども人知れず思ひ出でけり。預いみじく經營して歩く氣色に、この御有樣知り果てぬ。ほの〴〵と物見ゆる程に御車より下り給ひぬめり。假初なれど清げにしつらひたり。「御供に人もさぶらはざりけり。便なきことかな。」とて、この預は君の睦じき下家司にて、

○下家司　貴族の家に仕ふる執事やうのものを家司といひ、その中身分卑しきを下家司といふ。

二條の院にも仕うまつる者なりければ、參り寄りて、「さるべき人召すべきにや。」など申せど、君、「殊更に人來まじき隱家求めたるなり。更に外に漏らすな。」と口堅めさせ給ふ。御粥など急ぎ參らせたれど、取り次ぐ御まかなひうち合はず。

○御まかなひ　御給仕なり。男なれば相應せぬをいふ。

まだ知らぬ異なる御旅寢に、息長川と契り給ふより外の事なし。

○息長川　萬葉集、「鳴鳥の息長川は絶えぬとも、君に語らふと盡きめやも。」「鳴鳥の息長川」は、近江の地名。「絶えぬ」は、絶え果つること。「息長川の流は絶えても君との語らひは絶えず。」

日闌くる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いといたく荒れて人目もなく、遙々と見渡されて、木立いと疎ましく物古りたり。氣近き草木などは殊に見所なく、皆秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、恐ろしげなり。別納の方にぞ曹司して人住むべかンめれど、こなたは離れたり。

○別納　殿の外にある雜舍。そこに部屋ありて預など住み居たるなり。

「人氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども我をば見免してむ。」と宣ふ。顔はなほ隱し給へれど、女のいとつらしと思へれば、「げにかばかりになりて隔あらむも事の樣に違ひたり。」と思して、

夕露にひもとく花は玉ぼこの
便りに見えし縁にこそありけれ

○「かく紐を解きて顔を見するに至りしも、一日道すがらに見し夕顔の縁なりき。」

○露の光やいかに。」と宣へば、

○露の光　本篇の始にある夕顔の君の歌、「心あてにそれかとぞ見る白露の、光そへたる花の夕顔。」により、白露の光ありやと、我が顔を問ふなり。

女、後目に見おこせて、

光ありと見し夕顔の上露は
黄昏時のそら目なりけり

○「夕顔に白露の光を添へしと見しは、黄昏時の見誤にて、光はなかりき。」にて、「美しき光ありと見奉る」といふべきを、餘に逆にいひたるなり。

とほのかにいふ。をかしと思しなす。（面白シ）げにうち解け給へる樣、世になく、所柄まして忌々しきまで見え給ふ。「盡きせず隔て給へるつらさに、（朝ヲ）現はさじと思ひつるものを、（見シテ）口惜し。今だに（切メテ今）名乘りし給へ。いとむく（気味悪シ）つけし。」と宣へど、○海士の子なればとて、さすがにうち解けぬ樣、いとあまえたり。

○海士の子なれば　古今集、「白浪の寄する渚に世を盡す海士の子なれば宿も定めず。」「宿も定めぬ賤しき海士の子なれば、名乘るべき名もなし。」

君、「よし、これもわれからなンめり。」と恨み、かつは語らひ暮し給ふ。

○われから　古今集、「海士の刈る藻に住む虫のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ。」「われから」は、虫の名。また「我故」の意とす。「音をこそ泣かめ」は、聲を立てゝ泣くをいふ。

惟光、尋ね參りて御菓物など參らす。○右近が思はむこととさすがに心苦しければ、近くはさぶらひ寄らず。

○右近が思はむこと　右近に會へば、初よりのこと現はるゝをいふなり。

君のかくまでたどり歩き給ふもをかしく、さもありぬべき有樣にこそはと推し量らるゝにつけても、我が思ひ寄りぬべかりし人を讓りまゐらせたる心廣さよなど、目覺しき事をぞ思ひ居る。

たとしへなく靜かなる夕べの空を眺め給ひて、奥の方は暗う物むづかしと女の思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。（物ニ寄リ）夕映の御容貌を見交して、女もかゝる有樣を思の外に怪しき心地しながら、よろづの歎忘れて少しうち解け行く氣色、いとらうたし。（愛ラシ）つと御傍に添ひ暮して、物をいと恐ろしと思ひたる樣、若う心苦し。格子疾く下し給ひて、大殿油參らせて、（燈火）「名殘なくうち解け給ひたる御有樣にて、なほ御心の中の隔殘し給へるなむつらき。」と恨み給ふ。上のいかに求めさせ給ふらむに、いづこに尋ね給ふらむと思し遣りて、我ながら怪しの心や、六條わたりにもいかに思ひ亂れ給ふらむと、いとほしと思ふ筋は、まづ思ひ出で給ふ。この女君の何心もなきさし對ひをあはれと思すにつけても、御息所のあまりに心深く重々しく、見る人も心苦しき御有樣を、少し取り棄てばやとぞ思し比べ給ひける。

宵過ぐる程、少し寢入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、「おのれがいとめでたしと見奉るに、尋ねも思さで、かく異なる事なき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いと目覺しくつらけれ。」とて、御傍の女君を搔き起さむとすと見給ふ。物に魘はるゝ心地して目覺め給へれば、火も消えにけり。心憂く思さるれば、太刀を拔きてうち置き給ひて、右近が近う臥したるを起し給ふ。これも恐ろしと思ひたる樣にて參り寄れり。「渡殿なる宿直人起して、『紙燭さして參れ。』といへ。」と宣へば、

○渡殿　殿と殿とを連ねたる廊にある部屋。

○紙燭　松の細き木又は紙撚りに脂を塗りてともす燈火。

「いかでかまからむ、暗うて。」と申せば、「あな若々し。」とうち笑ひ給ひて、手をたゝき給へば、山

彦の答ふる聲いと疎まし。人は聞きつけで參らぬに、女君、いみじくわなゝき惑ひて、いか樣にせむと思へり。汗もしとゞになりて、我かの氣色なり。右近も、「物怖をなむいみじくせさせ給ふ御本性にて、いかに思さるゝにか。」と申す。君も、この人のいとかよわくて、晝も空をのみ見つるものをといとほしく思して、「我、人を起さむ。手たゝけば山彦の答ふるいとうるさし。こゝに暫し近く。」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でゝ、戸を少し押し明け給へれば、渡殿の火も消えにけり。風少しうち吹きたるに、人は少なくて、さぶらふ限り皆寢たり。この院の預の子にて睦じく使ひ給ふ若き男、また童男一人、例の隨身ばかりぞありける。召せばこの若き男御答して起きたれば、「紙燭さして參れ、『隨身も弦打ちて絶えず聲づくれ。』といへ。

○弦打ちて絶えず聲づくれ　魔を拂ふ爲に弓の弦を鳴らして絶えず呼ばはるなり。

人離れたる處に心解けて寢ぬるものか。惟光の朝臣の來たりつらむは。」と問はせ給へば、「參りつれど仰言もなし。曉に御迎に參るべき由申してなむまかンで侍りぬる。」と申す。かう申す若き男は○瀧口なりければ、

○瀧口　御所を守護する六位の侍。

弓弦いとつき〴〵しうち鳴らして、「火危し」といふ〳〵預が曹司の方へ去ぬるなり。君は內裏を思しやりて、○名對面は過ぎぬらむ。○瀧口の宿直奏今こそと推し量り給ふは、まだ更けぬにこそは。

○名對面　女の刺（今の夜の十時頃）に宿直人が名を名乘り合ふ儀式なり。

○瀧口の宿直奏　瀧口の侍が名を名乘り合ふ儀式なり。

歸り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近は傍にうつぶし臥したり。「こはなぞ。あな物狂ほしの物怖や。荒れたる處は狐などやうの物の人おびやかさむとて、氣恐ろしう思はするならむ。まろあればさやうのものにはよも威されじ。」とて引き起し給ふ。右近、「いと心憂く、亂り心地の惡しう侍ればう、つぶし臥して侍るなり。御前にこそわりなく思さるらめ。」といへば、「そよ、などかうは。」とて搔い探り給ふに、息もせず。引き動かし給へど、なよ〳〵として、我にもあらぬ樣なれば、「いといたく若びたる人にて、妖怪に氣取られぬるなンめり。」と、せむ方なき心地し給ふ。からうじて紙燭持て參れり。右近も動くべき樣にもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほこゝに持て參れ。」と宣ふ。かかることは例ならぬことなれば、愼ましくて長押にも上らず。

○長押　廂の間（次の間）より母屋（奧）に上る所に、木を渡しありて、一段高くす。この木を長押といふ。

君は、「なほたゞ持て來や。所に從ひてこそ。」とて、紙燭召し寄せて見給へば、たゞこの枕上に、夢に見えつる形したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかゝる事は聞けど、いと珍らかにむくつけゝれど、まづこの女君いかになりぬるぞと思す心騷ぎに御身の上も思し給はず、添ひ臥して、

「やゝ」と驚かし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息はた疾く絶え果てにけり。いはむ方なし。いかにすべきといひ合はせ給ふべき人もなし。法師などをこそは、かゝる折の頼もしきものには思すべけれど、さこそ心強がり給へど、まだいと若き御心にて、女君のかくいふ甲斐なくなりぬるを見給ふに、せむ方なくて、つと抱き給ひて、「我が君、生き出で給へ。いみじき目な見せ給ひそ。」と宣へど、冷え入りにたれば、氣配脈はしくなり行く。右近は、あな煩はしと思ひける心地皆醒めて、泣き惑ふ樣いといみじ。

南殿の鬼の某の大臣をおびやかしけむ例を思し出でゝ心強く、

○南殿の鬼　南殿は紫宸殿。昔藤原忠平勅命を承りて紫宸殿の奥を通りし時、鬼現れ出でて太刀の鐔を捉へしかば、忠平、「鬼なりとも王土に住むもの、勅使を妨ぐることやある。」と呼ばはりしに、鬼は忽ち退きたりといふ。

「さりとも徒になり果て給はじ。夜の聲はおどろ〳〵し。あなかま。」と、右近を諫め給ひて、いとあわたゞしきに呆れたる心地し給ふ。この男を召して、「こゝにいと怪しう物に魘はれたる人の惱ましげなれば、『只今、惟光の朝臣の宿れる所にまかりて、急ぎ參るべき由いへ。』と人にいへ。某の阿闍梨、そこにおはするならば、こゝに來べき由忍びていへ。かの尼君などの聞かむに、おどろ〳〵しくいふな。かゝる歩き、許さぬ人なり。」など、物宣ふやうなれど、胸はつと塞りて、この人を空しくなしてむことのいみじく悲しく思さるゝに添へて、大方のむくつけさ譬へむ方なし。

夜中も過ぎにけむかし、風やゝ荒々しう吹きたるは。まして松の響、木深く聞えて、怪しげなる鳥の枯聲に鳴きたるも、梟はこれにやと覺ゆ。うち思ひ廻らし給ふに、こなたかなた人氣遠く脈はしきに人聲せず。などてかくはかなき宿は取りつるぞと、悔しさも遣らむ方なし。右近は物も覺えず、君につと添ひ奉りてわなゝき死ぬべし。またこれもいかならむと心も空に捉へ給へり。我一人賢しき人にて思し遣る方ぞなきや。火はほのかにまたゝきて、母屋の際に立てたる屏風の上、暗がりて、こゝかしこの隈隈しく見ゆるに、物の足音ひし〳〵と踏み鳴らしつゝ、後より寄り來る心地す。惟光疾く參れかしと思す。彼も在所定めぬものにて、こゝかしこ尋ねける程に、夜の明くる程の久しさ、千代を過さむ心地し給ふ。辛うじて鷄の聲遥に聞ゆるに、命を掛けて何の契にかゝる目を見るらむ。我が心ながらあるまじき心の報に、かく來し方行く先の例となりぬべきことはあるなンめり。忍ぶとすとも世にある事は隱れなくて、上の聞し召されむことを始めて、人の思ひいはむことよ。よからぬ童の口すさびになりぬべき身なンめり。あり〳〵て嗚呼がましき名を取るべきかなと思し廻らす。

辛うじて惟光の朝臣參れり。夜中曉といはず從へる者の、今宵しもさぶらはで、召にさへ怠りつるを憎しと思せど、召し入れて、宣ひ出でむ事のあへなきに、ふと物もいはれ給はず。右近この人の氣配聞くに、始よりの事うち思ひ出でられて泣けば、君も堪へ難う、我一人賢しがりて抱き持ち給へりけるに、惟光の參れるに息を延べ給ひてぞ悲しき事も思されける。とばかりいといたく泣き給ふ。やゝた

めらひ給ひて、「こゝにいと怪しき事のあるを、あさましといふにも餘りてなむある。かゝるとみの事には誦經などをこそはすれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむと、『阿闍梨參れよ。』といひ遣りつるは。」と宣ふに、「昨日山へまかり上りにけり。まづいと珍らかなる事にも侍るかな。豫てより例ならぬ御心地や侍りつらむ。」「さる事もなかりつ。」とて泣き給ふに、見奉る人もいと悲しくて、おのれもよゝと泣きぬ。年老い、世の中の、とある事かゝる事に馴らひぬる人こそかゝる折節は頼もしかりけれ。いづれも〳〵若き同士にて、いはむ方もなけれど、惟光「この院の預などに聞かせむことはいと便なかるべし。この人一人こそ睦じうもあらめ、おのづから物いひ漏らしつべき眷族も立ち混りたらむ。まづこの院を出でおはしましね。」と申す。「さてこれより人少なゝる所はいかであらむ。」と宣ふ。「げにさぞ侍らむ。かの故郷は女房などの悲しびに堪へず泣き惑ひ侍らむに、隣繁く見咎むる里人多く侍らむに、おのづから物の聞え侍らむ。山寺こそなほかやうの事おのづから行き混り、物紛るゝことも侍らめ。」と思ひ廻して、「昔見侍りし女房の尼にて侍るが、東山のわたりに住み侍れば、そこに移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、年老いて住み侍るなり。あたりは人繁きやうに侍れど、いと物靜かに侍り。」と申して、明け離るゝ程の紛れに御車寄す。君はこの人を抱き給ふまじければ、上席に押し包みて惟光乘せ奉る。いとさゝやかにて厭はしげもなくらうたげなり。したゝかにしも包まねば、髪はこぼれ出でたるに、君は目暮れ惑ひて、あさましう悲しと思せば、なり果てむ樣を見むと思せど、「はや御馬にて二條の院へおはしまし給へ。人騒がしくなり侍らぬ程に。」とて、右近を御車に乘せて、馬は君に奉りて、我は徒歩より、括り引き上げなどして出で立つ。

○括り　指貫といふ袴の裾にある括り紐なり。それを引上げて甲要々々しく出で立ちしなり。

いと怪しく、思ひ掛けぬ樣の御送なれど、君の御氣色のいみじきを見奉れば、身を棄てゝ行くに、君は物も覺え給はず、我かの樣にて院におはし着きたり。

人々、「いづこよりおはしますにか。惱ましげに見えさせ給ふ。」などいへど、御帳の内に入り給ひて、胸を押へて思ふに、いとゝいみじく悲しければ、などて車に乘り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、いかに思はむ。見棄てゝ行き別れにけりと、つらくや思はむと、御心惑の中にも思すに、御胸せき上ぐる心地し給ふ。御頭も痛く身も熱き心地して、いと苦しく惑はれ給へば、かくはかなくて我も徒になりぬべきなンめりと思す。日高くなれど起き上り給はねば、人々怪しがりて、御粥などそゝのかしまゐらすれど、苦しくて、いと心細く思さるゝに、内裏より御使あり。昨日も尋ね出で奉らざりしより、心許ながらせ給ひて、左の大臣の君達參り給へり。頭中將ばかりを、「立ちながらこなたに入り給へ。」と宣ひて、御簾の内ながら宣ふ。「乳母にて侍る者の、この五月の頃ほひより重く煩ひ侍りしが、頭剃り、忌む事受けなどして、その驗にやよみがへりたりしを、この頃また起りて弱くなむなりにた

○御帳　四方に帷を垂れし寢所なり。（「當時の世相」第一三圖）

る。『今一度訪ひ見よ。』と申したりしかば、幼きより馴れにし者の、今はの刻につらしとや思はむと思ひ侍りてまかれりしに、その家なりける下人の病しけるが、俄に亡くなりにけるを、我に憚りて日を暮してなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、神事など多かる頃にて、いと不便なることゝ思ひ侍り、畏りて參り侍らぬなり。この曉より咳病にや侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無禮なること。」と宣ふ。中將、「さらばさる由をこそ奏し侍らめ。夜前も御遊に、畏く求めさせ給ひて、御氣色惡しく侍りき。」と宣ひて、立返り、「いかなる行觸に掛らせ給ふぞや。述べやらせ給ふことこそ誠とも思はれ侍らね。」といふに、まづ御胸うち潰れ給ひて、「かく細かにはあらで、たゞ思はぬ穢に觸れたる由を奏し給へ。いとこそ怠々しく侍れ。」とさりげなく宣へど、御心の中にはいふ甲斐なく悲しき事を思すに御心地も惱ましければ、人に目を見合はせ給はず、藏人の辨を召し寄せて、まめやかにかゝる由を奏せさせ給ふ。

○藏人の辨　太政官に左右の辨官あり。これより藏人に任ぜられたる人を藏人の辨といふ。こゝにては頭中將の弟なり。頭中將は源氏の君のいふことを疑ふ故、その弟を召したるなり。

左の大臣の大殿などにも、かゝることありて參らぬ御消息など申し給ふ。

日暮れて惟光參れり。かゝる穢ありと宣はすれば、參る人々も皆立ちながらまかンでゝ人繁からず。召し寄せて、「いかにぞ。今はと見果てつや。」と宣ふまゝに、袖を御顏に押し當てゝ泣き給ふ。惟光も泣く〳〵、「今は限りにこそはおはすめれ。長々と籠り侍らむも便なければ、明日なむ日よろしく侍れば、とかくの事、いと尊き老僧の相知りて侍るに、いひ語らひつけ侍りぬる。」と申す。「添ひたりつる女はいかに。」と宣へば、「それなむまた生くまじう侍るめる。我も後れじと惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくなむ見侍りつる。『かの故郷人に告げ遣らむ。』と申すを、『暫し思ひ鎭めよ。事の樣思ひ廻らして。』となむこしらへ置き侍りつる。」と申すまゝに、君はいといみじく心憂しと思して、「我もいと心地惱ましく、いかなるべきにかとなむ覺ゆる。」と宣ふ。「何か更に思し給ふべき。よろづの事さるべき契にこそ侍らめ。人にも漏らさじと思ひ侍れば、惟光下り立ちてよろづは物し侍りなむ。」と申す。「さかし。さ皆思ひなせど、浮びたる心のすさびに、人を徒になしつる咎負ひぬべきがいと辛きなり。少將の命婦などにも聞かすな。尼君、ましてかやうの事など諫めらるゝに、耻かしくなむ覺ゆべき。」と口堅め給ふ。惟光、「法師ばらなどにも、皆いひなす樣異に侍り。」と申すにぞかゝり給へる。ほの聞く女房など、「怪しく何事ならむ。穢の由宣ひて內裏にも參り給はず、またかくさゝめき歎き給ふ。」とほのぼの怪しがる。君、「更に事なくしなせ。」と、その程の作法など宣へど、「何か事々しくすべきにも侍らず。」とて、惟光の立つがいと悲しく思さるれば、「便なしと思ふべけれど、今一度かの亡骸を見ざらむが、いと心憂かるべければ、馬にて物せむ。」と宣ふを、惟光、いと輕々しき事とは思へど、「さ思されむにいかゞせむ。早うおはしまして、夜更けぬ先に歸らせおはしませ。」と申せば、この頃の御やつしに設

け給へる狩の御衣に着換へなどして出で給ふ。御心地搔き暮しいみじく堪へ難ければ、かゝる怪しき路に出で立ち給はむも、危かりし物懲に、いかゞせむと思し煩へど、なほ悲しさの遣る方なく、只今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見むと思し念じて、例の大夫、隨身を具して出で給ふ。路遠く覺ゆ。

十七日の月さし出でゝ、河原の程御前驅の火もほのかなるに、鳥部野の方など見遣りたる折など、物むづかしきも何とも覺え給はず、掻き亂る心地し給ひておはしまし着きぬ。あたりさへ凄きに、板屋の傍に堂建てゝ行へる尼の住居いと哀れなり。御燈明の影ほのかに透きて見ゆ。その屋には女一人泣く聲のみして、外の方に法師ばらの二人三人物語しつゝ、わざと聲立てぬ念佛ぞする。寺々の初夜も皆行ひ果てゝいとしめやかなり。

○初夜　亥の刻（十時）より子の刻（十二時）までをいふ。

清水の方ぞ光多く見えて、人の氣配も繁かりける。この尼君の子なる大德の、聲尊くて經うち讀みたるに、涙殘りなく思さる。入り給へれば、火取り背けて、右近は屏風隔てゝ臥したり。いかにわびしからむと見給ふ。亡骸は恐ろしき氣も覺えず、いとらうたげなる樣して、まだいさゝか變りたる所なし。手を捉へて、「我に今一度聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契にかありけむ、暫しの程に心を盡してあはれに覺えしを、うち捨てゝかく惑はし給ふがいみじく悲しきこと。」と、聲も惜しまず泣き給ふこと限りなし。大德達も、誰とは知らねば怪しと思ひつゝ、皆涙落しけり。右近を、「いざ二條の院へ。」と宣へど、「幼く侍りしより片時立ち離れ奉らず、馴れまゐらせつる人に、俄に別れ奉りて、いづこにか歸り侍らむ。いかになり給ひにきとか人にもいひ侍らむ。悲しき事をばさるものにて、人に言ひ騷がれ侍らむがいみじく心苦しきこと。」といひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて慕ひ參りなむ。」といふ。君、「道理なれどさなむ世の中はある。別れといふものゝ悲しからぬはなし。とあるもかゝるも同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて我を賴め。」と宣ひこしらへても、「かくいふ我が身こそ生き止るまじき心地すれ。」と宣ふも賴もしげなしや。惟光、「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ。」と申せば、顧みのみせられて、胸もつと塞がりて出で給ふ。路いと露けきに、いとゞしき朝霧に、いづこともなく惑ふ心地し給ふ。女君のありしながらうち臥したりつる樣、うち交し給へりし我が紅の御衣の着せられたりつるなど、いかなりけむ契にかと途すがら思さる。

○うち交し給へりし　寢る時には男女の衣を取り換へて着するものにて、源氏の君の紅の下着を夕顔の君に着せたりしを、そのまゝこゝに持ち來りしなり。

御馬にもはかゞしく乘り給ふまじき御樣なれば、また惟光添ひ助けておはしまさするに、堤の程にて馬よりすべり落ちて、いみじく御心地惑ひければ、「かゝる路の空にて空しくなりぬべきにやあらむ。更に行き着くまじき心地なむする。」と宣ふに、惟光も心地惑ひて、「我がはかゞしくば、いかに宣ふと

もかゝる道に率て出で奉るべきかは。」と思ふに、いと心あわたゞしければ、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じ奉りても、術なく思ひ惑ふ。君も強ひて御心を起して、心の中に佛を念じ給ひて、またとかく助けられ給ひてなむ二條の院へ歸り給ひける。

怪しう夜深き御歩きを、人々、「見苦しきことかな。この頃例よりも静心なき御忍歩きのうち頻る中にも、昨日今日御氣色のいと惱ましうおはしますに、いかでかくたどり歩き給ふらむ。」と歎き合へり。誠に臥し給ひぬるまゝに、いといたう苦しがり給ひて、二三日になりぬれば、無下に弱るやうに見え給ふ。内にも聞し召して、思し歎くこと限りなし。御祈、方々に隙なくのゝしる。祭、秘、修法などいひ盡すべくもあらず。君は世に類なくゆゝしき御有様なれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒なり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近く賜ひてさぶらはせ給ふ。惟光、君の御惱に心地も騒ぎ惑へど、思ひのどめて、この女の便りなしと思ひたるをもて助けつゝさぶらはす。君はいさゝか隙ありて思さるゝ時は、召し出でゝ使ひなどし給へば、程なく交らひつきたり。○服いと黒うして、

○服いと黒うして　服は喪服をいふ。薄墨色を用ふ。死者との縁の親疎によりて薄き濃き差あり。

容貌などよからねど、見苦しからぬ若人なり。君「怪しう短かゝりける人の御契に引かされて、我も世にあるまじきなンめり。其許も年頃の頼失せて、心細く思ふらむ慰めに、我もし長らへば、よろづにはぐゝまむとこそ思ひしか、程もなくまた空しき煙に立ち添ひぬべきが口惜しくもあるべきかな。」と忍びやかに宣ひて、弱氣に泣き給へば、右近は、いふ甲斐なき事は措きて、いみじう惜しと思ひまどらす。殿の内の人、足を空に思ひ惑ふ。内裏より御使、雨の脚よりも異に繁し。君も、上の思し召し歎きおはしますを聞き給ふに、いと忝くて、強ひて強く思しなる。左の大臣もいみじく經營し給ひて、日々に渡り給ひつゝ、様々の事をせさせ給ふ験にや、二十餘日いと重く煩ひ給へれど、異なる餘波も残らず、怠り様に見え給ふ。穢の御忌も同じく満ちぬる夜なれば、上の覺束ながらせ給ふ御心のいみじく畏くて、その夜内裏の御宿直所に參り給ひなどす。大臣、我が御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌何やかやと慎ませ奉り給ふ。君は我にもあらず、あらぬ世によみがへりたらむやうに覺え給ふ。九月二十日の程にぞ怠り果て給ひて、いといたう面痩せ給へれど、なか〳〵いみじうなまめかしく、ながめがちに音をのみ泣き給ふ。見咎め奉る人もありて、「御物怪なンめり。」などいふもあり。

右近を召し出でゝ、のどやかなる夕暮に物語などし給ひて、「なほいとなむ怪しき。などていかならむ人とも知られじと隠し給へりしぞ。誠に海士の子なりとも、かばかり思ふを知らで、隠し給ひしかばなむつらかりし。」と宣へば、

○海士の子なりとも　古今集、「白浪の寄する渚に世を盡す海士の子なれば宿も定めず。」夕顔の君、源氏の君に名を問はれし時、「海士の子なれば」とて、名乗らざりしを恨みしなり。

右近、「などてか深く隠し給ふことは侍らむ。たゞ何ならぬ御名乗なればこそ。始より怪しう心許なき御事なりしかば、

○怪しう心許なき　源氏の君、名も顔も隠して通ひしをいふ。

『現とも覺えずなむ。御名隠もさばかりにこそ。

○さばかりにこそ　御名を隠し給ふも、源氏の君なるべし。

なほざりに思し給へばこそ、かう紛らはし給ふらめ。』となむ、憂きことに思したりし。」と申せば、「あいなかりける心競べなりしかな。我はしか隔つる心もなかりき。たゞかやうに人に許されぬ振舞は、まだ馴らはぬことなれば、上の諫め宣はするを始め、慎むこと多かる身にて、はかなく人に戯言をいふも事事しく取りなされ、うるさき身の有様になむあれど、はかなかりし夕べより怪しう心に掛りて、強ひて見奉りしも、かゝるべき契にこそはありけめと思へど、またうち返しつらうなむ覺ゆる。かう長かるまじきならむには、などさしも心に染みてあはれと覺えけむ。なほ委しう語れ。今は何事を隠すべきぞ。七日々々の佛書かせても、誰が爲にとか思はむ。」と宣へば、

○誰が爲にとか　名を知らでは誰の供養とも思はれぬなり。

右近、「何かは隠しまゐらせ侍らむ。たゞ御自ら隠し過し給ひしことを、亡き御後に口さがなくやと思ひ侍るばかりになむ。親達は早う失せ給ひき。三位中將となむ聞えし。この姫君をいとらうたきものに思ひ給へりしかど、我が身の際の心許なく思すめりしに、命さへ堪へ給はずなりにし後、はかなき便にて、頭中將、まだ少將におはせし時、見初め給ひて、三年ばかりは志ある樣に通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右の大臣よりいと恐ろしき事の聞え來しに、

○いと恐ろしき事　頭中將の妻は、右の大臣の四の君なりしかば、威し來たりしなり。帚木の卷「雨夜の品定」にあり。

物怖をいみじくし給ひし御心に、せむ方なう思し怖ぢて、西の京に御乳母の住み侍る所になむ這ひ隠れ給へりし。それもいと見苦しきに住みわび給ひて、山里に移ろひなむと思したりしが、今年よりは塞りたる方に侍りければ、方違にとて、

○方違　塞りの方角を避くる爲、一時他の所に宿るをいふ。

あやしき所におはし給ひしを、見あらはされぬると思し歎くめりし。世の人に似ず物慎みをし給ひて、物を思ふ氣色を人に見せむを恥かしきことにし給ひて、さりげなくのみもてなし給ふめりし。」と語り出づるに、君はさればよと思し合はせて、いよ〳〵哀れもまさりぬ。「幼きものを惑はしたりと中將の憂へしは、さる人や。」と問ひ給ふ。「然。一昨年の春ぞ生み給へりし。女にていとらうたげになむ。」と申す。「さて、いづこにぞ。人には知らせで我に得させよ。はかなしと思ふ御形見に、いと嬉しかるべくなむ。」と宣ふ。「かの中將にも傳ふべけれど、いふ甲斐なき咎負ひなむ。とざまかうざまにつけて、はぐ

くまむに咎あるまじければ、その乳母などにも我と知らせで得させよかし。」など語らひ給ふ。右近、「さらばいと嬉しうなむ侍るべき。かの西の京にて生ひ出で給はむは心苦しう思し給へど、はか〳〵しく扱ふ人なしとて、かしこになむ。」と申す。夕暮の静かなるに、空の氣色いとあはれに、御前の前栽枯れ枯れに、虫の音も鳴き枯れて、紅葉やう〳〵色づく程、繪に書きたるやうに面白きを見渡して、右近は思の外にをかしき交ひかなと、かの夕顔の宿を思ひ出づるも耻かし。君は竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴くを聞き給ひて、かのありし院にてもこの鳥の鳴きしを、女君のいと恐ろしと思ひたりし樣の、面影にらうたく思し出でらるれば、「年は幾つにか物し給ひし。怪しう世の人に似ずかよわくはかなげに見え給ひしも、かう長かるまじきなりけり。」と宣ふ。「十九にやなり給ひけむ。右近は、亡くなり侍りける御乳母の殘し置きし子に侍りければ、三位中將の君のらうたがり給ひて、かの御あたり去らず生ふし立て給ひしを思ひ出で侍れば、今よりはいかゞ世にあらむとすらむ。○いとしも人にと悔しうなむ。

○いとしも人に、　拾遺集、「思ふとていとしも人に馴れざらむ、しか馴らひてぞ見ねば戀しき。」「いとしも人に馴れざらむ」は、人によく馴るまじ。「しか馴らひて」は、そのやうに馴れぬれば。「人に馴るれば、それに馴れて、相見ぬ時戀しき故、思ふとても、始より馴れぬに如かず。」

物はかなげにおはし給ひし御一所を頼もしき人にして、年頃馴れ侍りけること。」と申す。「はかなげなるこそ女はらうたけれ。あまり心賢く人に靡かぬはいと心づきなきことなり。我が心のはか〳〵しからぬに馴らひて、女は心柔かにて、取り外しては人に欺かれぬべきが、さすがに物慎みし、男の心に從はむなむあはれにて、我が心のまゝに取り直して見むに、懐かしく覺ゆべき。」など宣へば、「その方の御好にはもて離れ給はざりけりと思ひ侍るにつけても口惜しく侍りける事かな。」とて泣く。空のうち曇りて風冷やかなるに、君、いといたくうちながめ給ひて、

見し人のけぶりを雲とながむれば
ゆふべの空もむつましきかな

○「今見る雲を夕顔の君の火葬の煙と思ひて眺むれば、この夕べの空も懐かし。」

と獨ごち給へど、右近は御答も聞えず、女君のかやうにておはせましかばと思ふにも、胸のみ塞りて覺ゆ。君は耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ戀しくて、「○いいいいいまさに長き夜」とうち誦じて臥し給へり。

○まさに長き夜　白氏文集、「八月九月正長夜、千聲萬聲無止時。」「八月九月正ニ長キ夜、千聲萬聲止ム時ナシ。」「千聲萬聲」は、砧の音なり。

伊豫の守の小君、來る折あれど、ありしやうなる言傳もし給はねば、かの空蟬の君、

○空蟬の君、　伊豫の守の妻。源氏の君より度々消息などありしこと、帚木、空蟬の卷に出づ。

君も憂しと思し果てにけりといとほしく思ふに、かく煩ひ給ふと聞きて、さすがにうち歎きけり。遠く

伊豫に下りなむとするを思ふにも、さすがに心細ければ、君、思し忘れ給ひぬるかと試に、(御病風ヲ)「承りて思ひ惱み侍れど、言に出でゝはえこそ

問はぬをもなどかと問はで程經るに
いかばかりかは思ひ亂るゝ

○本文「言に出でゝはえこそ」を、歌の「問はぬ」につゞけて見る。「言に出でゝはえこそ問はぬ」は、言葉に出して呼ばぬ。この「問はぬ」は、空蟬の君より源氏の君を問はぬなり。次の「問はで」は、源氏の君より空蟬の君に、「何故問はぬか」と問はぬなり。

○「御病を問ひ奉らぬ怠りを、何故とも咎め給はずして程經る故、いかばかり我が心の亂るゝならむ。」

○益田はまことになむ。」と申したり。

○益田はまことになむ　拾遺集、「ねぬなはのくるしかるらむ君よりも我ぞ益田のいけるかひなき。」「ねぬなは」は、蓴菜。「なは」より「くるし(苦し)」の「くる」につゞく。「くる」は、繰る。「益田」は、大和にある池の名。「いける」の「いけ」につゞく。「いける」は、生ける。また「我は君の苦みにます」の「ます」を「益田」に掛く。「君も物思に苦しかるべけれど、我は君にもまして苦しく、生ける甲斐なし。」

珍しきにこれもあはれ忘れ給はず、御返、(詠カシサ)「生ける甲斐なきや。

○生ける甲斐なきや　前記「ねぬなはの」の歌による。「生ける甲斐なしといふにや。」

誰がいはましごとか、(誰ノイフベキコトカ)

空蟬の世はうきものと知りにしを
また言の葉にかゝる命よ

○「藻脱の衣のみを止めて遁れたりし一夜より、世を憂きものと思ひ知りたりしに、またなまじひなる御消息に、命を掛けて物思せらる。」

はかなしや。」と、(病後)御手もうちわなゝかるゝに、亂れ書き給へる、いと美しげなり。女は、なほかの藻脱の小袿を忘れ給はぬを、いとほしうもをかしう思ひけり。かやうに憎からずいひ交せど、うち解けて見え奉らむとは思ひも寄らず。いふ甲斐なからぬ樣に見え奉りて止みなむと思ふなりけり。かの西の對の女君は藏人の少將をなむ通はすと聞き給ふ。氣色もゆかしければ、小君して、「死に返り思ふ心は知り給へりや。」といひ遣はす。

ほのかにも軒端の荻を結ばずば
露のかごとを何にかけまし

○「一夜にても逢ひしことなかりしならむには、何によりてか少しの恨もいふべき。」

○この歌よりこの女君を軒端の荻の君といふ。

御文は高やかなる荻につけ給へり。女は心憂しと思へど、かく思し出でたるもさすがにて、御返、口疾きばかりをかごとにて取らす。

ほのめかす風につけても下荻の
なかばは霜に結ぼゝれつゝ

○「それとなく宣ふ御消息につけても、おのれは思ひ惱む。」手は惡しげなるを、紛らはし戯ればみて書きたる樣、品なし。○火影に見し顔、思ひ出でらる。

○火影に見し顔　この女君と空蟬の君と碁を打ちしを、源氏の君、覗き見たりしなり。空蟬の卷に出づ。

對ひ居たりし人は、疎み果つまじき樣したりしかな。この人の何の心ばへありげもなく、さうどきたりしよと思し出づれど、憎からず思す。なほ懲りずまに、またもあだ名の立ちぬべき御心のすさびなンめり。

○懲りずまに　古今集、「懲りずまにまたも浮名は立ちぬべし、人憎からぬ世にし住へば。」

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、裝束より始めてよろづの物、事そがず細やかに、誦經などせさせ給ふ。經佛の飾まで疎ならず、惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて似なうしけり。君の御文の師にて睦じく思す文章博士召して願文作らせ給ふ。誰ともなくて、あはれと思ひし人のはかなき樣になりにしを、阿彌陀佛に讓りまゐらす由、哀れげに書き出で給へれば、博士、「たゞかくながら。筆加ふべきこと侍らざンめり。」と申す。忍び給へれど、御涙もこぼれていみじく悲しと思したれば、博士、「何人ならむ。誰ともなくてかう思し歎かすばかりなりけむ宿世の高さよ。」といひけり。忍びて調ぜさせ給へりける袴を取り寄せ給ひて、

泣く〳〵も今日は我が結ふ下紐を
いづれの世にかとけて見るべき

○「今日は我が結ふ」は、當時の男女、再會まで他の人に逢はぬしるしに、互に紐を結び交す風あり し故にいふ。

○「泣く〳〵も今日は我自ら袴の紐を結ふ。いつの世に袴の紐を解きて逢ふことのあるべき。」

亡き魂もこの程では漂ふなるを、今はいづれの道に定まりて赴くらむと思しやりつゝ、念誦をいと哀れにし給ふ。頭中將を見給ふにつけても、かの撫子の生ひ立つ有樣聞かせまほしけれど、咎に怖ぢていひ出で給はず。

かの夕顔の宿の人々は、いづ方にかと思ひ惑へど、いづことも尋ねあへず。右近だに音づれねば、怪しと思ひ歎きあへり。確かならねど思ひ寄るまゝに、惟光に恨みけれど、惟光もかけ離れ氣色なげにいひなせば、いとゞ夢の心地して、もし受領の子どもの好き〳〵しきが、頭中將に怖ぢて、やがて國に

率て下りにけるにやとぞ思ひ寄りける。この家主ぞ西の京の乳母の女なりければ、右近は我に心隔てて、女君の御有様を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。

○我に心隔てゝ　右近は前の乳母の子、この家主は西の京の乳母の子なれば、我に隠したるなりと恨むなり。

右近もまたかしがましく言ひ騒がれむを心憂く思ふに、君も今更に漏らさじと忍び給へば、若君の上をだに尋ねず、あさましく行方も知らず過ぎ行く。君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひてのまたの夜、ほのかに添ひたりし女も、様も同じやうに見えければ、荒れたる所に住みけむ妖怪の、我に見入れけむ便りに、かくなりにける事と思し出づるにも忌々しくなむ。

伊豫の守、神無月の朔頃に下る。女房の下らむにとて、そのたむけ心殊にせさせ給ふ。また内々にもわざとし給ひて、細やかにをかしき様なる櫛、扇、多くして、○幣などいとわざとがましくて、

○幣　途中、道の神に捧げて旅行の安全を祈る布帛の類。

○かの小袿も遣はす。

逢ふまでの形見ばかりと見し程に
ひたすら袖の朽ちにけるかな

○かの小袿　空蟬の君の脱ぎ置きしを源氏の君持ち歸りし小袿なり。小袿は女の上着。空蟬の巻にあり。（「當時の世相」第一二圖）

○「逢ふまでの形見ぞと思ひて見し衣も、その後逢はぬに涙の催されて一途に袖も朽ちたり。」

細やかなることゞもあれど、うるさければ書かず。御使歸りにけれど、小君して御返聞えさせたり。

蟬の羽も裁ちかへてける旅衣
かへすを見ても音は泣かれけり

○「夏衣を冬衣に裁ちかへて旅衣とする今、小袿を返し給ふは、御志もこれを限りかと聲を立てゝ泣かる。」

君は、「怪しう人に似ぬ心強さにて、ふり離れぬるかな。」と思ひつゞけ給ふ。今日ぞ冬立つ日なりけるも著く、うち時雨れて、空の氣色いとあはれなり。ながめ暮らし給ひて、

過ぎにしも今日別るゝも二道に
行く方知らぬ秋の暮かな

○「夕顔の君とも、空蟬の君とも別れて、秋の暮に行方も知らぬ思するかな。」

なほかく人知れぬ事は苦しかりけりと思し知りぬらむかし。かやうのくだ〳〵しき事は、強ひて隠し給ひしもいとはしくて、皆書き漏らしけるを、「帝の御子なればとて、など物褒めがちなる。」と、この物語も作り事めきて取りなす人おはしければなむ。されど、あまり物言さがなき罪、避りどころなく。

若紫　わかむらさき

瘧病を煩ひ給ひて、よろづに禁厭、加持など參らせ給へど、驗なくて、數多度起り給ひければ、或人、「北山の某寺になむ賢き聖侍る。去年の夏もこの病世に起りて、人々禁厭ふに驗なかりしを、この聖、やがて止むる類數多侍りき。しゝこらかしなば心憂く侍るべければ、疾くこそ試みさせ給へ。」など申せば、召しに遣したるに、「老い屈まりて室の外にもまかンです。」と申したれば、「いかゞはせむ。忍びて參らむ。」と宣ひて、御供に睦じき四五人ばかりして、まだ曉におはす。やゝ深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花盛は皆過ぎにけれど、山の櫻はまだ盛にて、入りもておはするまゝに霞のたすまひもをかしう見ゆれば、かゝる御歩きにも馴らひ給はず、所狹き御身なれば珍しう思されたり。寺の樣もいとあはれなり。峯高く木深き巖の中にぞ聖は入り居たりける。君は誰とも知らせ給はず、いたうやつし給へれど、著き御有樣なれば、聖、「あな畏や、一日召し給ひたりしにやおはしますらむ。今はこの世の事を思ひ侍らねば、驗方の行も忘れて侍るを、いかでかうおはしましつらむ。」と驚きて、うち笑みつゝ見奉る。いと尊き大德なりけり。さるべき物作りて透かせ奉る。加持など參る程、日高くさし上りぬ。君、少し立ち出でゝ見渡し給へば、高き處にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見下さる。ただこのつゝら折の下に、同じ小柴垣なれどうるはしう渡して、清げなる屋、廊などつゝけて、木立いと由ある樣の著き住居を、「何人の住むにか。」と問ひ給へば、御供なる人、「これなむ某僧都の、この二年籠り侍る坊に侍るなる。」と申す。君、「耻かしき人の住むなる所にこそあンなれ。怪しうもやつしけるかな。僧都の聞きつけもこそすれ。」など宣ふ。かの屋には清げなる童女など數多出で來て、閼伽奉り花折りなどするもあらはに見ゆ。御供の人々、「かしこに女こそありけれ。僧都はよもさやうの人を置き給はじを、いかなる人ならむ。」と口々にいふ。下りて覗くもあり。「をかしげなる若人、童女なむ見ゆる。」といふ。君は行し給ひつゝ日闌くるまゝに御病いかならむと思したるに、人々、「とかう紛らはさせ給ひて、御病の事思し入れぬなむよく侍る。」と申せば、後の山に立ち出でゝ京の方を見遣り給ふ。遙に霞み渡りて、四方の梢そこはかとなう煙り渡れる程、君、「繪にいとよくも似たるかな。かゝる所に住む人、心に思ひ殘す事はあらじかし。」と宣へば、「これは山もいと淺く侍り。他の國などに侍る海山の有樣などを御覽ぜさせ給はゞ、いかに御繪いみじう優らせ給はむ。富士の山、某の嶽。」など、語り申すもあり。また西の國の面白き浦々、磯の樣をいひつゞくるもありて、樣々に御心を紛らはしまるらす。良清、

○良清、　源良清といひ、惟光と共に源氏の君に誠實に仕へたる人なり。

「近き所には播磨の明石の浦こそなほ異に侍れ。何の至り深き事はなけれど、たゞ海の面を見渡したる

程なむ、怪しく異所に似ず、廣らかなる所に侍る。この國の前の守新發意の女かしづきたる家、いとめでたしかし。この入道は大臣の後にて、世に出で立ちもすべかりけれど、世の僻者にて人と交らひもせず、近衛の中將を捨てゝ申し賜はりける播磨の守なれど、かの國の人にも少し侮られて、『何の面目にてかまた都に歸らむ。』といひて、頭下し侍りにけるが、奥まりたる山住をもせで、さる海面に出で居たるは、僻々しきやうなれど、山深き里は人離れ心凄くて、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは入道の心を遣れる住居になむ侍る。先つ頃罷り下りて侍りし序に、寄りて有樣見侍りしに、京にてこそ所得ぬやうなりけれ、嚴しう占め造れる住居の樣、さすがに國の司にて仕置きけることなれば、殘の齡を豐かに過すべき心構も、似なくしたりけり。後の世の勤もいとよくして、なか〳〵法師優りしたる人になむ侍りける。」と申せば、君、「さてその女は。」と問ひ給ふ。「容貌、心ばへなど怪しうはあらず侍るめり。代々の國の司など、用意殊にしてさる心ばへ見すれど、入道更に承け引かず。『我が身のかく徒に沈めるだに心憂きに、この人一人にこそあれ。我が思ふ樣は異なり。もし我に後れて、この志遂げずば海に入りぬ。』となむ、常に遺言し置きて侍る。」など申せば、君も可笑しと聞き給ふ。人々、「海龍王の后になるべき齋女なンなり。心高さ苦しや。」とて笑ふ。かくいふは今の播磨の守の子にて、藏人より今年爵得たる人なりけり。いと好きたる者なれば、人々、「かの入道の遺言破りつべき心あらむかし。さて佇み寄るならむ。」といひあへり。「いでや、さいふとも、幼くよりさる所に生ひ出でゝ、古めいたる親どもを賢き者と思ひて從ひたらむには、いかに田舍びたらむ。」「母こそ由ある人なるべけれ。よき若人、童女などを、都のやむごとなき所々より類にふれて尋ね取りて、まばゆくこそもてなすなれ。」「情なき人になり行かば、心安くさてしも置き難かンめり。」などいふもあり。

○情なき人になり行かば　女が親の志に背きて、さしもあらぬ男などに靡きなばの意なり。

君は、「いかで海の底まで深う思ひ入るらむ。○底のみるめも煩はしきに。」など宣ひて、たゞならず思したり。

○底のみるめ　「みるめ」は、海草の海松布。「見る目」に掛く。人の見るも煩はしかるべきに。

かやうになみ〳〵ならず僻めたる事を好み給ふ御心なれば、御耳止まりつらむと見奉る。かゝる程に暮れかゝりぬ。人々、「御病も起らせ給はずなりぬるにこそは侍れ。はや歸らせ給ひなむ。」と申せど、聖、「御物怪など加はれる樣におはしませば、今宵はなほ靜かに加持など參りて、出でさせ給へ。」と申せば、「さもあること。」と皆人申す。君もかゝる旅寢も馴らひ給はねば、さすがにをかしくて、「さらば曉に。」と宣ふ。

日もいと長きにつれ〴〵なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣の下に立ち出で給ふ。人々は返し給ひて、惟光ばかり御供にて覗き給へば、たゞこの西面にしも持佛据ゑ奉りて行ふ尼なりけり。簾少し捲き上げて花奉るめり。中の柱に寄り居て、○脇息の上に經うち置きて、

○脇息　座の傍に置き、肱を寄せて體を休むる具。

いと惱ましげに讀み居たる樣、只人とは見えず、四十餘りばかりにて、いと白く貴く、痩せたれど面つきふくらかに、まみの程、髪の美しげに削がれたる末も、なか〳〵長きよりは樣變りて、こよなう今めかしきかなと、あはれに見給ふ。清げなる女房二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣の上に山吹色のなれたる着て、走り來る女子、今まで見つる兒どもに似るべくもあらず、生ひ先いみじう見えて、美しげなる容貌なり。髪は扇を廣げたるやうにゆら〳〵として、顏をいと赤く摩りなして立てり。尼君、「何事ぞや。童女と腹立ち給へるか。」とて、うち見上げたるに、少し似たる所あれば、子なンめりと見給ふ。女子、「雀の子を犬君が逃しつる。○薫籠の中に籠めたりつるものを。」とて、いと口惜しと思へり。

○薫籠　衣を被らせ、中に香を焚きて薫らす具。

この居たる女房、「例の心なしの、かゝる業をしてさいなまるゝこそいと心憂けれ。いづ方へか罷りぬる。いとをかしうやう〳〵馴れつるものを、鳥などもこそ見つくれ。」とて、立ちて行く後手、髪綏やかにいと長く、見苦しからぬ人なンめり。この人を、少納言の乳母とぞ人々のいふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いで、あな幼や。いふ甲斐なう物し給ふかな。おのれがかく今日明日になりぬる命をば何とも思さで、雀慕ひ給ふよ。罪得ることぞと常にいふを、心憂く。」とて、「こちや」といへば、女子はつい居たり。面つきいとらうたげにて、眉のわたりうち煙り、掻いやりたる額つき、髪ざし、いみじう美し。生ひ先のゆかしき人かなと、君は目止まり給ふ。尼君、髪を掻き撫でつゝ、「梳ることをもうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかなうおはしますこそ心許なけれ。かばかりの御齢になりぬれば、かゝらぬ人もあるものを、故姫君は十二にて殿に後れ給ひしが、物を思ひ知り給へりしぞかし。只今おのれ見捨て奉らば、いかにしてか世におはせむとすらむ。」とて、いみじう泣くを見給ふも、すゞろに悲し。幼心地にもさすがに見まもりて、伏目になりてうつ伏したるに、こぼれかゝりたる髪、つや〳〵とめでたう見ゆ。尼君、

生ひ立たむありかも知らぬ若草を
後らす露ぞ消えむ空なき

○「幼き女子の生ひ先心許なきに、我は女子を後に殘し、死して行くべき方もなし。」

今一人の女房、げにとうち泣きて、

初草の生ひ行く末も知らぬ間に
いかでか露の消えむとすらむ

○「若君の生ひ先も知り難きに、いかで尼君のこの世を去らむとし給ふならむ。」

と申す程に、僧都、あなたよりおはして、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも端におはしましつるか

な。この上の聖の方に源氏の中將の瘧病禁厭におはし給ひけるを、只今なむ聞きつけ侍りつ。いみじう忍び給ひければ、知り侍らで、こゝに侍りながら御訪にも參うでざりける。」と宣へば、尼君、「あないみじや。いと怪しき樣を、人や見つらむ。」とて簾下しつ。僧都、「この世にのゝしり聞え給ふ光源氏、か、る序に見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂忘れ齡延ぶる御有樣なり。いで、君に御消息申さむ。」とて立つ音すれば、歸り給ひぬ。

あはれなる人を見つるかな。かゝればこそ好き者どもは、かゝる歩きをのみして、さるまじき人をも見つくるなりけれ。たまさかに立ち出づるだに、かく思の外なる事を見るよと、をかしう思す。さてもいと美しかりつる兒かな。何人ならむ。彼を得て、旦暮の慰めにも見ばやと思ふ心深うつき給ひぬ。うち臥し給ひつる程に、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさせて、御消息聞ゆるに、近き所なれば君も聞き給ふ。「近き所に過りおはしましける由、只今なむ人の申すに、驚きながら參るべけれど、某この寺に籠り侍ること知し召しながら、忍びさせ給へるを心憂く思ひ侍りてなむ。草の御蓆もこの坊にこそ設け侍るべきに、いと本意なきこと。」と申し給へり。君、「去ぬる十餘日の程より瘧病に煩ひ侍るに、度重りて堪へ難う侍れば、人の敎のまゝに俄にこゝに尋ね入り侍りつれど、かやうなる聖の、もし驗あらはさぬ時は、たゞなる人よりはしたなかるべく、いとほしと思ひ侍りてなむいたう忍び侍りつる。今そなたに。」と宣へり。即ち僧都參り給へり。法師なれど人柄もやむごとなく世に思はれ給へる人なれば、君はかく輕々しき御歩きをはしたなく思す。僧都はこの山に籠れる程の御物語など申し給ひて、「同じ柴の庵なれど、少し涼しき水の流れも御覽ぜさせむ。」と切に申し給へば、かの尼君などに事々しういひ聞かせつるを、愼ましう思せど、あはれなりつる女子の有樣もゆかしくておはしぬ。げにいと由ある所にて、同じ木草もをかしく植ゑなし給へり。月もなき頃なれば、遣水に篝火ともし、燈籠などにも火參りたり。南面いと清げにしつらひ給へり。空薰物心にくゝ薰り出で、名香の香など滿ちたれど、君の御追風いと異なれば、坊の人々も心遣ひすべかゝめり。僧都、世の常なき御物語、後の世の事など聞え知らせ給ふ。君はかやうなる住居もせまほしう覺え給へど、晝の女子の面影心に掛りて戀しければ、「こゝにおはしますは誰にか。尋ねまゐらせまほしき夢を見侍りしかな。今日なむ思ひ合はせつる。」と宣へば、僧都うち笑ひて、「うちつけなる御夢語にぞ侍るなる。尋ねさせ給ひても、御見劣せさせ給ひぬべし。○故按察の大納言は、世を去りて久しくなり侍りぬれば、知し召さじかし。

○按察の大納言、　按察は按察使の略。按察使は主に陸奥出羽に遣して國司の政治を觀察せしめたる官なり。

その北の方なむ某が妹に侍る。かの按察かくれて後、世を背きて侍るが、この頃ふと煩ふこと侍るにより、某かく京にもまかゝで侍らぬ頃なれば、こゝを賴もし所にして籠り侍るなり。」と申し給ふ。「かの大納言の御女おはしますと聞き侍りぬ。」と、押し當てに宣へば、「女たゞ一人侍りし。それも失

せてより十餘年にやなり侍りぬらむ。故大納言は内裏に奉らむなど、かしづき侍りしが、その本意の如くもし侍らで失せ侍りにしかば、たゞこの尼君一人にて扱ひ侍りし程に、いかなる人の仕業にか、兵部卿の宮なむ忍びて通ひ給ひけれど、宮の北の方なむやむごとなくおはせば、女も安からぬ事多くて、且暮物を思ひてなむ亡くなり侍りにし。物思に病づくものと、某も目に近く見侍りし。」など申し給ふ。君は、さらばその子なりけりと思し合はせ給ひつ。いとゞあはれに、人柄も氣高うをかしきに、心のまゝに教へ生ふし立てゝ見ばやと思す。「いと哀れに物し給ふことかな。その御女は止め給ひし形見もなきか。」と、幼かりつる女子の上のなほ確かに知らまほしくて問ひ給へば、「亡くなり侍りし頃にこそ生れ侍りしか。それも女にてぞ。それにつけても尼君の物思の催しになむ、齢の末に思ひ歎き侍るめる。」と申し給ふ。さればよと思さる。「怪しき事なれど、おのれをかの幼き御後見に思すべく、尼君に聞え給ひてむや。通ひかゝはりつる人も侍れど、心の染まぬにやあらむ、今も獨住にてのみなむ侍る。まだ似氣なき齢の程と、はしたなく思さむや。」など宣へば、「いと嬉しかるべき仰言なれど、まだむげに幼き程に侍るめれば、戯にても御覧じ難くや。そも〳〵女は人にとりなされて大人にもなり給ふものなれど、法師などはとりなし申さず。かの祖母北の方に語らひ侍りて御返事聞えさせむ。」とすくよかにいひて、物剛き樣し給へば、君は若き御心に耻かしくて、よくも宣はず。僧都、「阿彌陀佛おはする堂に、する事侍る頃になむ。」初夜未だ勤め侍らず。それ過してさぶらはむ。」とて登り給ひぬ。

○初夜　夕より夜半までの勤行。佛の前にて讀經するなり。

君は心地もいと惱ましきに、雨少しうちそゝぎ、山風冷やかに吹きたるに、瀧の響もまさりて音高く聞ゆ。少しねぶたげなる讀經の聲、絶え〳〵凄く聞ゆるなど、心なき人も、所柄物あはれなり。君はまして思ひめぐらすこと多くて、まどろまれ給はず。初夜といひしかど、夜もいたう更けにけり。内にも人のまだ寢ぬ氣配著くて、いと忍びたれど、數珠の脇息に引き鳴らさるゝ音ほの聞え、うちそよめく音なひ懷かしうあてはかなりと聞き給ひて、いと近ければ、外に立て渡したる屏風を少し引き明けて、扇を鳴らし給へば、内にては、心許なき心地すれど、知らぬやうにやはあるべきとて、ゐざり出づる人あンなり。少し退きて、「怪し。僻耳にや。」と怪むを聞き給ひて、君、「佛の御しるべは暗きに入りても更に違ふまじきものを。」と宣ふ御聲のいと若うあてなるに、

○佛の御しるべ　佛は冥土の人も確かに導き給ふに、我は佛の御導きにて（宿緣ありて）こゝに來りたるものなれば、怪しみ給ふなの意なり。

御答うち出でむも耻かしく、「いかなる方の御しるべにか。心許なく。」と申す。「げにうちつけなりと怪み給はむも道理なれど、

初草の若葉の上を見つるより
旅寢の袖も露ぞかはかぬ

と聞え給ひてむや。」と宣ふ。「かやうの御消息承りぬべき人もおはしまさぬを知し召したりげなるに、誰にかは聞えむ。」と申す。君、「おのづからさるやうありて聞ゆるものと思ひなし給へかし。」と宣へば、女房入りて申す。尼君、「あな今めかし。この女君をさるべき御程におはするとぞ思すらむ。さるにても かの若草をいかで聞き出で給へることぞ。」と、様々怪しきに心も亂るれど、久しうなれば情なしとて、

枕結ふ今宵ばかりの露けさを
深山の苔にくらべざらなむ

○「今宵一夜ばかり草枕結ふ旅寢のわびしさを、山籠りしてゐる我がわびしさに比べ給ふな。」

乾難う侍るものを。」と申し給ふ。君、「かやうの人傳なる御消息は、まだ更に聞き馴らはぬことになむ。畏けれども、かゝる序にまめやかに申すべきことなむある。」と宣へば、尼君、いかで聞し召し違へたるならむと怪しく、「いと耻かしき御氣配に、何事をかは答へまゐらせむ。」と宣へば、人々「はしたなうもこそ思さめ。」と申す。尼君、「げに若やかなる人ならばこそ心憂くもあらめ。かくまめやかに宣ふも畏し。」とて、ゐざり寄り給へり。君は、「うちつけなれば淺はかなりと御覽ぜらるべけれど、我が心にはさしも覺え侍らず。佛はおのづから知り給はむ。」と宣へど、尼君の大人々々しきに耻かしく慎まれて、とみにもいひ出で給はず。尼君、「げに思の外の序に、かくまで宣はするを、いかで淺くは思ひまゐらせむ。」と宣ふ。君、「哀れと承る御有様なるに、かの亡くなり給ひにけむ母君の御代に思し給ひてむや。幼き程にて睦じかるべき人にも後れ侍りにければ、怪しう浮きたるやうにて年月をこそ重ね侍れ。同じ様におはすなれば、類に思し給へと聞えまほしく、かゝる折もあり難きに、思されむ所をも憚らずいひ出で侍りぬる。」と宣へば、「いと嬉しう思ひ侍るべき御事なれども、聞し召し違へたることなどや侍らむと慎ましうなむ。賤しき我が身一人を頼もし人にする人なむ侍れど、まだいふ甲斐なき齡の程にて、御覽じ免さるゝ所も侍り難ければ、承り止め難くなむ。」と宣ふ。「皆委しく承り侍れば、所狹く思し給はで、様異なる我が心の程を御覽ぜよ。」と宣へど、尼君はいと似氣なき程なるを、君は知らで宣ふとのみ思して、心解けたる御答もなし。僧都おはしぬれば、「よし、かう聞え初め侍りぬれば、いと頼もしうなむ。」とて、屏風押し立て給ひつ。曉方になりにければ、○法華三昧行ふ堂の懺法の聲、

○法華三昧　法華經を讀誦して心を澄ます行をいふ。
○懺法　罪業を懺悔する行をいふ。

僧都、

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて
涙もよほす瀧の音かな

さしぐみに袖ぬらしける山水に
澄めるこゝろは騒ぎやはする

瀧の音も耳馴れ侍りにけり。」と聞え給ふ。

明け行く空はいといたう霞みて、山の鳥どもゝそこはかとなく囀りあひたり。名も知らぬ木草の花どもいろ〳〵に散り混り、錦を敷けりと見ゆるに、鹿の佇み歩くも珍しく見給ふに、御心地の惱ましさも紛れ果てぬ。聖、動きもえせねど、とかくして護身の御符參らせ給ふ。嗄れたる聲の、いといたう透きひがめるも、あはれに功づきて、陀羅尼經讀みたり。御迎の人々參りて、怠り給へる悦び申し、内裏よりも御使あり。僧都、世に見えぬ樣なる御菓物、何くれと谷の底まで掘り出でゝ營み仕うまつり給ふ。「今年ばかりの誓深う侍りて、御送にも參り侍らぬこと、なか〳〵口惜しう思ひ侍らるべきかな。」など申して、大御酒參り給ふ。君、「山水に心止り侍りぬれど、上の心許なく思し給へるも長しければなむ。今この花の折過さず參り來む。

宮人に行きて語らむ山櫻
風より先に來ても見るべく

と宣ふ御もてなし聲遣さへ目もあやなるに、僧都、

優曇華の花待ち得たる心地して
深山櫻に目こそうつらね

○「優曇華」は、三千年に一度花咲くといふ花、極めて稀なるに譬ふ。

と申し給へば、君、ほゝ笑みて、「その、時ありて一度開く花は難かゝなるものを。」と宣ふ。聖、御土盃賜はりて、

奥山の松のとぼそを稀にあけて
まだ見ぬ花の顔を見るかな

○「奥山の僧庵を稀に出でて、今までに見しことなき、花の如き源氏の君の御顔を見まゐらす。」

とうち泣きて見奉る。聖、御守にとて獨鈷奉る。僧都、聖徳太子の百濟より得給へりける金剛子の數珠の、玉の裝束したるを、

○金剛子　印度などに產する黑く堅き木の實。

その國より入れたりける唐めいたる箱に入れ、なほ透きたる袋に入れて、五葉の松の枝につけ、紺瑠璃の壺どもに御藥入れたるを藤櫻などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げ奉り給ふ。君は聖より始め、讀經しつる法師の布施の物ども、樣々取りに遣はしたりければ、そのわたりの山賤までさるべき物ども賜ひ、御誦經などして出で給ふ中に、僧都入り給ひて、かの事尼君に申し給へど、「ともかうも只

今は聞えむ方なし。誠に御志あらば、今四五年を過してこそは。」と宣へば、僧都も、「さなむ。」と、同じ様にのみいふを、君は本意なしと思す。御消息を僧都の許なる小さき童して、

夕まぐれほのかに花の色を見て
今朝は霞の立ちぞわづらふ

御返、

誠にや花のあたりは立ち憂きと
かすむる空のけしきをも見む

と、由ある手のいと氣高きを、繕はず書き給へり。

御車に乗り給ふ程、左の大臣より、いづちとも知らせ給はでおはしけることゝて、御迎の人々、君達など數多參り給へり。○頭中將、左中辨、

○頭中將、左中辨　頭中將は近衛中將より藏人頭に任ぜられし人、こゝにては左大臣の嫡子。左中辨は太政官の左辨局の官、左大辨に次ぐ。こゝにては左大臣の次子。

さらぬ君達も慕ひ來て、「かやうの御供には仕うまつり侍らむと思ひ侍るを、あさましう後らせ給へること。」と恨みまゐらせて、「いといみじき花の蔭なるに、暫しも休らはず立ち歸り侍らむは、飽かぬわざかな。」と宣ふ。岩隱れの苔の上に並み居て土盃參る。落ち來る水の様など由ある瀧の下なり。頭中將、懐なりける笛取り出でゝ吹きすましたり。辨の君、扇はかなうちうち鳴らして、○「豐浦の寺の西なるや」と謠ふ。

○豐浦の寺の西なるや　催馬樂、葛城。「葛城の寺の前なるや、豐浦の寺の西なるや、榎の葉井に、白玉しづくや、貫白玉しづくや、をしとんど〳〵、しかしては國ぞ榮えむや、我家らぞ富みせむや、をしとんど〳〵、としとんど。」これは光孝天皇の御即位を謠ひし民謠にて、「榎の葉井」は泉の名、「しづく」は、水に沈む。「白玉しづく」は、白玉水に沈む。天皇まだ親王にて世を避け給ひしをいふ。「しかしては」は、御即位にならば。「をしとんど」「としとんど」は、囃子なり。

人よりは異なる君達なれど、源氏の君のいといたううち惱みて、岩に寄り居給へる、類なくいみじきまで見え給ふ御有様を見るにぞ、何事にも目移るまじかりける。例の篳篥吹く隨身、笙の笛持たせたる好きものなどあり。僧都、琴を自らも弾いて參りて、「これたゞ御手一つ遊ばして、同じくは山の鳥も驚かし侍らむ。」と、切に申し給へば、「亂り心地いと堪へ難きものを。」と宣へど、憎からぬ程にたゞ少し搔き鳴らして、皆立ち給ひぬ。飽かず口惜しと、數ならぬ法師、童も涙を落しあへり。まして坊の内にては、年老いたる尼君達など、更にかゝる御有様を見ざりつれば、「この世のものとも覺えず。」と申しあへり。僧都も、「あはれ、何の契にて、かゝる御有様におはしながら、いと煩はしき日の本の末の世に生れ給ひつらむと見るに、いとなむ悲しき。」とて、目押し拭ひ給ふ。この若君も幼な心地に、君をめでたし

と見給ひて、「父宮の御有様よりも優り給へるかな。」など宣ふに、人々、「さらばかの君の御子になりておはしませよ。」と申せば、若君もうちうなづきて、さらばいとよかりなむと思したり。雛遊にも繪書き給ふにも、源氏の君を作り出でゝ、清らなる衣着せ、めでたき物にかしづき給ふ。

君はまづ内裏に參り給ひて、日頃の御物語など奏し給ふ。帝は、「いといたう衰へにけり。」とて、忌々しと思し召したり。聖の尊かりける事など問はせ給ふ。委しく奏し給へば、「阿闍梨などにもなるべき者にこそあンめれ。行の勞は積れど、朝廷には知し召されざりけること。」と尊がり宣はせけり。左の大臣參りあひ給ひて、「御迎にもと思ひ侍りつれど、忍びたる御歩きにはいかゞと思ひ憚りてなむ。のどやかに一二日うち休ませ給へ。」とて、「やがて御送り仕うまつらむ。」と申し給へば、君は、さは思さねど、引かれてまかンで給ふ。大臣は我が御車に乘せ奉り給ひて、自らは車の奥に引き入りたり。かくかしづきまゐらせ給へる大臣の御心ばへの哀れなるをぞ、君はさすがに心苦しく思しける。大殿にも君のおはしますらむと心遣して、久しく見給はぬ中に、いとゞ玉の臺に磨きしつらひ、よろづを整へ給へり。女君、例の這ひ隱れてとみにも出で給はぬを、大臣、切に申し給ひて、辛うじて渡り給へり。たゞ繪に書きたる姫君のやうにし据ゑられて、うち身じろぎ給ふことも難く、うるはしくおはすれば、君は、思ふこともほのめかし、山路の物語をも申さむに、をかしうもうち答へ給はゞこそあはれならめ。世にうち解けず恥かしきものに思して、年月の重なるにつけて御心の隔もまさるを、いと苦しく思の外なりと覺え給ふ。「時々は世の常なる御氣色を見ばや。堪へ難う煩ひ侍りしをも、いかゞとだに訪はせ給はぬこそ、珍しからぬことなれど、なほ恨めしう。」と宣へば、辛うじて、「訪はぬはつらきものにやあらむ。」と、

○訪はぬはつらき　後撰集、「忘れねといひしにかなふ君なれど、訪はぬはつらきものにぞありける。」この歌は、「我を忘れ給へ」といひしにかなひて君は訪ひ給はぬなれど、訪はれぬはつらきものなり。」の意。こゝにては、「我を思ひ給はぬ君なれど、我が訪はぬは、つらきものにや。」の意なり。

後目に見おこせ給へるまみ、いと恥かしげに、氣高う美しげなる御容貌なり。君、「稀々に宣ふに、あさましの御言や。『訪はぬは』などいふ際は異にこそ侍るなれ。

○異にこそ　訪はぬはなどと恨むは、恶びたる中などのことにて、我等の間のことにあらず。

心憂くも　ふかな　年と共につれなき御もてなしなれど、もし思し直る折もやと、とざまかうざまに試みまゐらするに　いとゞ思し疎むなンめりかし。よしや命だに。」とて夜の御座に入り給ひぬ。

○命だに　古歌、「命だに心にかなふものならば、何かは人を恨みしもせむ。」「命さへ我が思ふまゝになるならば、人を恨みずして、心長く待つべけれど、命のはかなきにつけて、思はぬ人を恨む。」

女君、ふとも入り給はず。君はいかに宣はむとうち歎きて臥し給ひ、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し亂るゝこと多かり。かの若草の生ひ先ゆかしけれど、尼君の似氣なし

と思へりしも道理ぞかし。いひ寄り難きことにもあるかな。いかに構へてか心安く迎へ取りて、旦暮の慰めにも見むと思す。

（文ノ日）またの日御文奉り給へり。僧都にもほのめかし給ふなるべし。尼上には、「うち解け給はぬ御氣色に慎ましく、思ひ侍ることをあらはし果てずなりにしをなむ、口惜しと思ひ侍る。かく聞ゆるにて、なみなみならぬ志の程を御覽じ知らば、いかに嬉しう。」などあり。中に小さく紙を引き結びて、

面影は身をも離れず山櫻
心の限り止めて來しかど

○「我が心は悉く若君に止め置きて來りしなれど、御面影のみは身より離れねば、なほ見ゆるなり。」

○夜の間の風も心許なくなむ。」とあり。

○夜の間の風　夜の間の風の櫻を散らさむかと心許なし。また、夜の間も心許なく若君を思ひ遣らる。

御手などはもとより、たゞはかなう押し包み給へる御文の樣も、古めかしき尼君どもには、目もあやに好ましう見ゆ。尼君、「あな心苦しや。いかゞ申さむ。」と思し煩ふ。「ゆくての御事はなほざりにも思ひなされ侍りしが、かくわざとせさせ給へるには、聞えさせむ方なくなむ。これはまだ難波津をだにはかばかしう書きつゞけ侍らざンめれば、いふ甲斐なくなむ。

○難波津　古今集序、「難波津に咲くやこの花冬籠り、今を春べと咲くやこの花。」博士王仁が仁德天皇御即位の時の歌なり。昔はこの歌と、萬葉集、「安積山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を我が思はなくに。」の歌とを、手習の始に習はせたり。こゝにては手習もまだ初々しきをいふ。

さても、

あらし吹く尾の上の櫻散らぬまを
心とめける程のはかなさ

○「風に散らぬ間の花に御心を止められし程のはかなき御心なるべし。」

いとゞ心許なう。」とあり。僧都の御返も同じ樣なれば、口惜しく思して、二三日ありて惟光をぞ奉り給ふ。「少納言といふ乳母あンべし。尋ね會ひて委しく語らへ。」と宣ふ。惟光、「げに隈なき御心かな。さばかり幼なかりし氣配なりしを。」と、ほのかに見し程を思ひ遣るも可笑し。わざとかう御文あるを、僧都も忝しと思ひ給ふ。惟光は少納言に消息して會ひたり。君の思し宣ふ樣など委しう語る。詞多かる人にてつきづきしういひつゞくれど、いと幼き御齡の程なるに、いかに思すにかと、心得ず誰も〳〵思ひける。君の御文にもいと懇に書き給ひて、「若君の御放ち書なむなほ見侍らまほしき。」とて、例の中なる紙には、

安積山淺くは人を思はぬに
など山の井のかけはなるらむ

○前の歌、「安積山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を我が思はなくに。」による。「安積山」は、陸奥にあり。「思はなくに」は、思はぬに。「影の映りて見ゆる程、山の井の淺きが如く、人を淺くは思ひ奉らず。」

○源氏の歌は、「淺くは思ひまゐらせぬに、何故懸け離れて、うち解け給はぬにやあらむ。」

御返、尼君、

汲み初めてくやしと聞きし山の井の
淺きながらや影を見すべき

○「影を見すべき」は、山の井の人の影を映すをいふ。こゝにては、君にうち解くるをいふ。

○「山の井は汲み初むれば、その淺きに悔しと思ふと聞く。君の御志もまだ明かならねば、却りて淺き心のまゝに、うち解けず見え奉らむ。」

惟光も同じ事を申す。少納言よりも、「この煩ひ給ふことよろしくば、京の殿に渡り給ひてなむ、有樣も聞えまゐらすべき。」とのみあるに心許なう思す。

藤壺の宮惱み給ふことありて内裏よりまかンで給へり。上より疾く參り給ふべき御使頻れど、思しも立たず。誠に御心地例のやうにもおはしまさず、三月になり給へば、いと著き程にて、人々見奉り咎む。七月になりてぞ内裏に參り給ひける。上は珍しうあはれにて、いとゞしき御思の程限りなし。宮は少しふくらかになり給ひて、うち惱み面痩せ給へるは、げに似るものなくめでたし。上は例の旦暮こなたにのみおはしまして、御遊もやう〳〵をかしき頃なれば、源氏の君も暇なく召し纏させ給ひて、御琴、笛など樣々に仕うまつらせ給ふ。

かの山寺の尼君はよろしうなりて出で給ひにけり。君は京の御住所尋ねさせて、時々の御消息などあり。御返、同じ樣にのみあるも道理なる中に、異事なくて過ぎ行く。秋の末つ方はいと物心細くて、月のをかしき夜、辛うじて忍びたる所に思ひ立ち給へるが、時雨めきてうちそゝぐ。おはする所は六條京極わたりにて、内裏よりなれば、少し程遠き心地するに、荒れたる家の木立いと物古りて、木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光、「故按察の大納言の家に侍り。一日物の便に少納言訪ひて侍りしに、『かの尼上いたう弱り給ひにたれば、何事も覺えず。』となむ申して侍りし。」と申せば、「哀れの事や。訪ふべかりけるを、などかさなむともいはざりし。入りて消息せよ。」と宣へば、人入れて案内せさす。「わざとかく立ち寄り給へること。」といはせたれば、入りて、「かく御訪になむおはしましたる。」といふに、人々驚きて、「いとほしき事かな。この日頃むげにいと頼もしげなくならせ給ひにたれば、御對面などもあるまじ。」といへども、このまゝに返し奉らむは畏しとて、南の廂引き繕ひて入れ奉る。

女房、「いと煩はしげなる所に侍れど、畏りをだにになむ。」と申す。げにかゝる御座は例に違ひて思さる。君、「常に思ひ立ち侍りながら、いふ甲斐なき様にのみもてなさせ給ふに慎まれ侍りてなむ。悩ませ給ふことをも、かくとも承らざりける心許なさ。」など宣ふ。尼君、「亂り心地はいつともなくのみ侍り。かく限りの様になり侍りて、いと畏く立ち寄らせ給へるに、自ら御答聞えさせぬこと。宣はすること、たまさかにも思し召し變らせ給はずば、かく幼き齢過ぎ侍りし後、必ず數まへさせ給へ。いみじく心細げに見侍るなむ、願ひ侍る佛の道の絆に思はれ侍り。」など申し給へり。いと近ければ、心細げなる御聲、絶え〳〵聞えて、「いと畏きことにも侍るかな。この若君だに畏りも聞えつべき程ならましかば。」と宣ふ。哀れに聞き給ひて、「何か、淺う思ひ侍らば、いかでかう好き〳〵しき様を見せ奉らむ。いかなる契にか、見初め奉りしよりあはれに思ひまゐらするも、この世のみのことには覺え侍らぬ。」など宣ひて、「いふ甲斐なき心地のみし侍れば、かの幼うおはします御一聲、いかでか。」と宣へば、人々、「いでや、よろづ思し知らぬ様に大殿籠り入りて。」など申す折しも、彼方より來る音して、「上こそ、この寺におはせし源氏の君こそおはしたンなれ。など見給はぬ。」と宣ふを、人々いと心苦しと思ひて、「あなかま」と申すなるべし。若君、「いさ、『見しかば心地の惡しさも慰みき。』と宣ひしかばぞかし。」と、賢き事聞き得たりと思して宣ふ。君はいと可笑しと聞き給へど、人々心苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御訪を宣ひ置き給ひて歸り給ひぬ。「げに幼なの氣配や。さりともいとよう教へてむ。」と思す。またの日いとまめやかに御消息遣し給ふ。例の小さき紙に、

いはけなき田鶴の一聲聞きしより
あし間になづむ船ぞえならぬ

○「あし間」は、葦の生ひたる間。「なづむ」は、葦にかゝはりて進み得ぬ。「えならぬ」は、いはむ方なきなり。

○「幼き若君の一聲を聞きしより我が心に掛りていはむ方なし。」

○同じ人にや、古今集、「堀江こぐ棚無し小舟漕ぎ返り、同じ人にや戀ひ渡りなむ。」「棚無し小舟」は、棚板のなき小舟。「同じ人にや」は、その人のみに。「戀ひ渡りなむ」は、戀ひつゞくる。上の句は譬喩、繰り返す意。「繰り返し〳〵同じ人をのみ戀ひつゞくるなり。」

○消えむ空なき　山寺にて尼君の歌、「生ひ立たむありかも知らぬ若草を、後らす露ぞ消えむ空なき。」

○同じ人にや。」と、殊更幼く書きなし給へるも、いみじうをかしげなれば、

「やがて御手本に。」と人々申す。少納言ぞ御返申したる。「問はせ給へる尼君は、今日をも過し難げなる御様にて、今より山寺に罷り渡る程になむ。かう訪はせ給へる畏りは、この世ならでも聞えさせむ。」とあり。いと哀れと思す。「消えむ空なき」とありし夕べ思し出でられて、

戀しけれども、また見劣やせむと、さすがに危く思す。

手に摘みていつしかも見む紫の
根にかよひける野邊の若草

○「手につみて」は、我がものとして。「紫の根に通ひける」は、藤壺の宮の御縁ある。「若草」は、若君。

○「藤壺の宮の御縁ある若君をいつ我がものとなし得む。」

○本篇の題はこの歌による。

十月に院に行幸あるべし。舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部、殿上人どもゝ、その方にすらむと、故御息所に後れ奉りし折など、確かならねど思ひ出でゝ、淺からず訪ひ給ふ。少納言故なからず御返など申したり。忌など過ぎて京の殿になむ歸り給ふと聞き給へば、程經て自らのどかなる夜おはしたり。いと凄げに荒れたる處の人少なゝるに、いかに幼き人の物恐ろしからむと見えたり。例の所

に入れ奉りて、少納言、尼君の御有樣などうち泣きつゝ申しつゞくるに、御袖もたゞならず。「宮に渡し奉らむと侍れど、宮の北の方を故姫君のいと情なく憂きものに思ひ給ひしに、若君は、むげに兒ならぬ御齡なれど、まだはかゞしくは人のおもむけをも見知り給はず、中空なる御程なれば、數多くおはします北の方の御子達の中に、侮らはしき人にてや交り給はむなど、尼君も命の限り思し歎き給ひつ。かく辱き御言の葉は、後の御心はたどり知り奉らねど、いと嬉しうこそ思ひ侍らるれ。御齡よりも怪しく若び給へれば、いと心許なく侍り。」と申す。君、「何かかう繰り返し聞え知らする我が心を思し疑ひ給ふらむ。そのいふ甲斐なき御有樣を、あはれにゆかしう覺ゆるも、前の世の契、異にこそとなむ、我が心ながら思ひ知られける。なほ人傳ならで聞えばや。」

あしわかの浦にみるめは難くとも
こは立ちながらかへる波かは

○「あしわかの」は、若き蘆。「和歌の浦」に掛く。「みるめ」は、海草、海松布のこと、「見る目」に掛く。「立ちながら」は、立ちたるまゝ、即ちこのまゝに。

○「若君を見ることは難くとも、このまゝ歸るまじ。」

目覺しくつらからむ。」と宣へば、少納言、「げにいと畏けれ。」とて、

寄る波の心も知らでわかの浦に
玉藻なびかむ程ぞうきたる

○「寄る波の」は、いひ寄り給ふ君の。「なびかむ」は、從はむ。「うきたる」は、輕々し。
○「いひ寄り給ふ君の心もよく知らで、從ふは輕々しかるべし。」

せむかたなきこと。」と申す樣の馴れたるに、少し罪免され給ふ。君は、「○など越えざらむ。」とうち誦し給へるを、若き人々は身に染みてめでたしと思ひまゐらせたり。

○など越えざらむ　後撰集、「人知れぬ身は急げども年を經て、など越え難き逢坂の關。」「人知れず急げども、年を經ても逢ひ難し。」

姫君は尼上を戀ひ給ひて泣き臥し給へるに、御遊がたきども、「直衣着たる人のおはする、宮のおはしますなンめり。」と申せば、起き出で給ひて、「少納言よ、直衣着たりつらむはいづら。宮のおはするか。」とて、寄りおはしたる御聲、いとらうたし。「宮にはあらねど、また思し捨て給ふべうもあらず。此方へ。」と宣ふを、耻かしかりし人とさすがに聞き知りて、惡しういひてけりと思して、乳母にさし寄りて、いと密に、「いざかし、ねぶたきに。」と宣へば、君、「今更など忍び給ふらむ。この膝の上に御殿籠れよ。今少し寄り給へ。」と宣へば、乳母、「さればこそ、かう世づかぬ御程にてなむ。」とて、近く押し寄せ奉りたれば、何心もなくて居給へるに、君は御衣の中に手をさし入れて探り給へれば、なよやかなる御衣に、髪はつや〳〵とかゝりて、末のふさやかなるを探りつけ給へる程、いと美しう思ひ遣らる。御手を捉へ給へれば、例ならぬ人のかく近づき給へるが恐ろしくて、「寢なむといふものを。」とて、強ひて引入り給ふにつきて君もすべり入り給ひて、「今はまろぞ君の思ふべき人。な疎み給ひそ。」と宣ふ。少納言、「いで、あなうたてや。忌々しうも侍るかな。宣ひ知らせ給ふとも、更に何の驗も侍らじものを。」とて、心苦しげに思ひたれば、君、「かゝる御齡の程をいかゞはすべき。たゞ世に知らぬ我が志の程を見果て給へ。」と宣ふ。霰降り荒れていみじう凄き夜の樣なり。「いかでかう人少なに心細うて過し給はむ。」とうち泣き給ひて、いと見捨て難き樣なれば、「御格子參りね。物恐ろしき夜の樣なンめれば、宿直人にて侍らむ。人々も近うさぶらはれよかし。」とて、いと馴れ顏に御帳の内に搔き抱きて入り給へば、怪しう思の外の事に呆れて、誰も〳〵居たり。少納言は心許なくいみじく憂しと思へど、荒荒しういひ騷ぐべきならねば、うち歎きつゝ居たり。若君はいと恐ろしう、いかならむとわなゝかれて、いと美しき御肌もそゞろ寒げに思したるを、君はいとらうたく思して、單衣ばかりに押し包みて、我が御心地も心苦しく覺え給へど、あはれにうち語らひ給ひて、「いざ給へよ。をかしき給など多く、雛遊などする所に。」と、若君の御心につくべきことを宣ふ氣配のいと懷かしければ、幼心地にもいたうも怖ぢず、さすがにむつかしう覺えて、寢も入らず身じろぎ臥し給へり。夜一夜風吹き荒るゝに、人々、「げに君のかうおはさざらましかば、いかに心細からまし。同じくはよろしき御年の程におはしまさましか

ば。」とさゝめきあへり。乳母は心許なさにいと近くさぶらふ。風少し吹き止みたれば、夜深う出で給ふも事あり顔なりや。「御有様をいと哀れに見奉るに、今はまして片時の間も心許なかるべし。旦暮ながめ侍る所に渡し奉らむ。かくのみにてはいかゞ物怖ぢし給はざらむ。」と宣へば、人々、「宮も御迎になど宣ふめれど、この御四十九日過してやなど思ひ侍り。」と申せば、「宮は頼もしき御筋なれども、これまで餘所々々にて馴らひ給へれば、我と同じうこそ疎う覺え給はめ。今より見奉るなれど、淺からぬ志は宮にも優りぬべくなむ。」とて、若君を掻い撫でつゝ願みがちに出で給ひぬ。

いみじう霧り渡れる空もたゞならぬに、霜はいと白う置きて、誠の御忍び通ひもいとをかしかりぬべきに、さうく〳〵しう思ひおはす。いと忍びて通ひ給ふ所の、道なりけるを思し出でゝ、門うち敲かせ給へど、聞きつくる人もなし。甲斐なくて、御供の聲よき人して歌はせ給ふ。

一　朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも
　　行き過ぎ難き妹が門かな

と二返ばかり歌ひたるに、内より由ありげなる下仕を出して、

　立ち止り霧の籬の過ぎうくば
　　草のとざしに障りしもせじ

○「霧のかゝりし籬を過ぎ難く立ち止り給ふならば、立ち寄り給はむに、草にとざされし門も妨げとはなるまじ。」

といひかけて入りぬ。また人も出で來ねば、歸るも情なけれど、明け行く空も便なくて殿へおはしぬ。をかしかりつる若君の戀しく、獨笑みしつゝ臥し給へり。日高う大殿籠り起きて文遣り給ふに、例ならねば書くべき言の葉もなく、筆うき置きつゝすさび居給へり。をかしき繪などを遣り給ふ。

かしこには今日しも兵部卿の宮渡り給へり。年頃よりもこよなう荒れまさり、廣う物古りたる所の、いとゞ人少なに寂しければ、見渡し給ひて、「かゝる所には、いかでか暫しも幼き人の過し給はむ。かしこに渡し奉りてむ。何の所狹く思す所にもあらず。乳母は曹司などしてさぶらひなむ。若君は、若き御子達などあれば、諸共に遊びて、いとようおはしなむ。」など宣ふ。若君を近う呼び寄せ給へるに、かの君の御移香いみじう艶に染みかへれば、「をかしの御匂や。されど御衣はいと萎えて。」といと心苦しげに思したり。「年頃あつしく年老い給へる尼君に添ひ給へるにより、『時々かしこに渡りて見馴らし給へ。』などいひしを、怪しう疎み給ひしかば、かしこにても心置くめりしに、かくて今渡し給はむは心苦しう。」など宣へば、少納言、「何かは。心細くとも暫しはかくておはしましなむ。少し物の心思し知り給ひなむ程に渡らせ給はむこそよくは侍るべけれ。」と申す。夜晝尼君を戀ひ給ふに、はかなき物も聞し召さずとて、げにいといたう面痩せ給へれど、なか〳〵いと氣高く美しく見え給ふ。宮、「何かさしも思す。今は世に亡き人の御事は甲斐なし。おのれあれば。」など語らひて、暮るれば歸らせ給ふを、

いと心細しと思ひて泣き給へば、宮もうち泣き給ひて、「かう思ひな入り給ひそ。今日明日渡し奉らむ。」など、返す〳〵慰め置きて出で給ひぬ。若君は宮の餘波も慰め難う泣き居給へり。行く末までは思し知らず、たゞ年頃立ち離るゝ折なく纏し馴らひし尼君の、今は亡き人となり給ひにけると思すが、いみじく悲しきに、幼き御心地なれど、胸つと塞がりて、例のやうにも遊び給はず。晝はさても紛らはし給へど、夕暮ともなれば、いみじう屈し給へば、かくてはいかでか過し給はむと慰めかねて、乳母も泣きあへり。

君の御許よりは惟光を奉り給へり。「參り來べきを、内裏より召あればなむ。心苦しき御有樣見奉りしに靜心なく。」とて、宿直人奉り給へり。人々、「あぢきなうもあるかな。○戯にも物の始　當時は婚姻當初三日はつゞきて通ふ例なれば、昨夜の事は戯なれど、源氏の君の今夜來給はぬを不滿足に思ふなり。

宮聞し召しつけば、さぶらふ人々の疎なるとぞさいなまれむ。あなかしこ。物の序などに幼くいひ出でさせ給ふな。」などいへど、若君は、それを何とも思し知り給はぬぞあさましきや。少納言は惟光に、哀れなる物語どもして、「生ひ立ち給ひて後、遁れ給はぬ御宿世もやあらむ。只今はいと似氣なき御事と見奉るに、かう思し宣はするも怪しう、いかなる御心にかと、思ひ寄る方なう思ひ亂れ侍る。今日も宮渡らせ給ひて、『後安く仕うまつれ。心幼くもてなしまゐらするな。』など宣はせつるにつけても、いと煩はしう思ひ侍りつる。」などいへど、この人の事ありけにや思はむもあいなければ、いたう歎かしげにもいひなさず。惟光もいかなる事にかありけむと心得難く思ふ。歸り參りて有樣など申せば、哀れに思し遣らるれど、さて通ひ給はむもさすがにすゞろなる心地して、人もや漏り聞かむなど愼ましければ、たゞこなたに迎へてむと思す。御文は度々奉り給ふ。暮るれば例の大夫をぞ奉り給ふ。「障る事どものありて參り難きを、疎にや思ひ給ふ。」などあり。少納言、「宮より『明日俄に御迎に。』と宣はせたりつれば、心あわたゞしくてなむ。年頃の蓬生の宿を離れなむもさすがに心細う。さぶらふ人々も思ひ亂れて。」と、言少なにいひて、をさ〳〵あへしらはず、物縫ひ營む氣配など著ければ、惟光歸り參りぬ。君は左の大臣の大殿におはしけるに、例の女君、とみにも對面し給はず。君は煩はしう覺え給ひて、南面に東琴を清掻きて、

○東琴を清掻きて　和琴ともいふ。六絃なり。清掻きは彈き方の一種。

「○常陸には田をこそ作れ。」といふ歌を、聲はいとなまめきて謠ひすさび居給へり。

○常陸には田をこそ作れ　風俗歌なり。風俗歌は當時の里謠。

惟光參りたれば、召し寄せて有樣問ひ給ふ。しか〳〵なむと申せば、口惜しう思して、「かの宮に渡りなば、わざと迎へむも人目好き〳〵しかるべし。幼き人を盗み出でたりと咎負ひなむ。宮の御迎の先に、人々にも口堅めてこなたに渡してむ。」と思して、「曉にかしこに參らむ。車の裝束さながらにし

て、隨身一人二人仰せ置きたれ。」と宣ふ。惟光承りて立ちぬ。君は、「いかにせまし。女も物を思ひ知りぬべき年の程にて、心交しけることゝ推し量りなむは、世の常なり。されど、これは父宮の尋ね出で給はむには、便なかるべし。」と思し亂るれど、さてこの折を外してむは、いと口惜しかりぬべければ、まだ夜深う出で給ふ。女君は例のしぶ〳〵に心も解けずおはす。君、「二條の院にいと切に見るべき事の侍りしを思ひ出で侍りてなむ。立ち返り參り來なむ。」とて出で給へば、さぶらふ人々も知らざりけり。我が御方にて御直衣など着給ふ。惟光ばかりを馬に乘せておはしぬ。

門うち敲かせ給へば、心も知らぬ者の明けたるに、御車をやをら引き入れさせて、惟光、妻戸を鳴らして咳けば、少納言聞き知りて出で來たり。「君、こゝにおはします。」といへば、「若君は大殿籠りてなむ。などかいと夜深う立ち出でさせ給へる。」と、物の序にこそと思ひていふ。君、「宮へ渡らせ給ふべかンなるを、その先に物一言聞えさせ置かむとてなむ。」と宣へば、「何事にかは侍らむ。○いかにはかばかしき御答聞えさせ給はむ。」とて、うち笑ひ居たり。

○いかにはかばかしき御答　若君幼ければ、確かなる御答申し上げ難かるべきに、何事を仰せらるゝにかと怪むなり。

君、入り給へば、いと心苦しく、「怪しき古人どものうち解けて寢侍るに。」と申す。君は、「まだ目覺め給はじな。いで御目覺しまゐらせむ。かゝる朝霧をば知らで寢ぬるものか。」とて入り給へば、少納言、

「や」とも申しあへず。君は何心もなく寢給へる若君を抱き起し給ふに、驚きて、宮の御迎におはしたると、寢おびれて思したり。君、御髮搔き繕ひなどし給ひて、「いざ給へ。宮の御使にて參り來つるぞ。」と宣ふに、宮にはあらざりけりと呆れて、いと恐ろしと思ひ給へば、「あな心憂、まろも同じ人ぞ。」とて、搔き抱きて出で給へば、少納言など、「こはいかに。」と申す。「こゝには常にも參らぬが心許なければ、心安き所にと申しゝを、心憂く宮へ渡り給ふべかンなれば、この後はまして參り難かるべければなむ。人一人參られよかし。」と宣へば、あわたゞしくて、少納言、「今日はいと便なくなむ侍るべき。宮の渡らせ給はむには、いか樣にか申さむ。おのづから年經て後、さるべき御宿世におはしまさば、ともかうもなり侍りぬべけれど、まだいと幼き御齡の程に侍れば、さぶらふ人々もいと心苦しう侍るべし。」と切に申せば、「よし、人は後より參りなむかし。」とて、御車寄せさせ給へば、人々もあさましう、いか樣にかと思ひあへり。ふと乘せ奉らせ給ふに、若君も怪しと思して泣き給ふ。少納言、止めまゐらせむ方なければ、昨夜縫ひし御衣ども引きさげて、自らもよろしき衣着換へて乘りぬ。二條の院は近ければ、まだ明うならぬ程におはして、西の對に御車寄せて下り給ふ。若君をばいと輕らかに搔き抱きて下し給ふ。少納言、「なほいと夢の心地し侍るに、いかにし侍るべきことにか。」とてためらへば、「そは心なンなり。若君は渡し奉りつれば、歸りなむとあらば、送せむかし。」と宣ふに、せむ方なくて下りぬ。俄かにあさましう、胸も靜かならず、宮の思し宣はむこと、また若君のいかになり果て給ふべきにか。

とてもかくても頼もしき人々に後れ給へるが、いみじく心憂きことゝ思ふに、涙の止まらぬを、さすがに忌々しければ念じ居たり。

こなたはこれまで住み給はぬ對なれば、御帳など（御殿所）もなかりけり。惟光召して御帳、御屏風などあたり〳〵立てさせ給ふ。御几帳の帷子引き下し、御座などよそはへば、東の對に御宿直物召し（後ノ物）に遣して大殿籠りぬ。若君はいとむくつけく（気味悪シ）、いかにすることならむと懍はれ給へど、さすがに聲立てゝも泣き給はず、「少納言がもとに寢む。」と宣ふ聲いと若し。君、「今はさは大殿籠るまじきぞよ。」と教へ給へば、いとわびしくて泣き臥し給へり。少納言はうちも臥されず、物も覺えず泣き居たり。明け行くまゝに見渡せば、大殿の造り樣、しつらひ樣、更にもいはず、庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、輝く心地するに、はしたなく（キマリ悪シ）思ひ居たれど、こなたには女房などもさぶらはざりけり。疎き客人などの參る折の用なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。かく人迎へ給へりとほの聞く人は、「誰ならむ。なみ〳〵なるにはあらじ。」ときゝめく。御手水御粥など（朝食）こなたに參る。日高う起き給ひて、君、「人なくて惡しかゝめれば、さるべき人々、夕づけてこそは迎へさせ給はめ。」と宣ひて、東の對に童女召しに遣はす。「小さきもの皆殊更に參れ。」とありければ、いとをかしげなる四人參りたり。若君は御衣に纏はれて臥し給へりけるを强ひて起して、「かう心憂くな思しそ。すゞろ（心淺キ）なる人ならむには、かうはありなむや。女は心柔かなるなむよき。」など、今より教へまゐらせ給ふ。若君の御容貌はさし離れて見しより

もいみじう清らにてうつくし（愛ラシ）ければ、懷かしう語らひつゝ、面白き繪、遊物ども取りに遣して見せ奉り、御心につくべきことをし給ふ。若君もやう〳〵起き出でゝ見給ふ。濃き鈍色（ニビイロ）の萎えたるを着給ひて、

○鈍色　薄黑き色、喪服なり。死者との血緣の親疎により濃き薄き差あり。こゝは尼君の喪中なり。

何心なくうち笑みなどして居給へるがいとうつくし（愛ラシキ）きに、君もうち笑まれて見給ふ。君、東の對に渡りて、見も知らぬ四位五位の人々、隙なう出で入りつゝ、げにをかしき所かなと思す。御屏風どもなどの繪白キ）いとをかしき繪を見つゝ、慰みておはするもはかなしや。君は二三日内裏へも參り給はで、この人を懷け語らひ給ふ。やかで手本にもと思すにや、手習、繪など樣々に書きつゝ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげ（美シ）に書き集め給へり。「武藏野といへばかこたれぬ。」と、紫の紙に書き給へる墨つきのいと異なるを、若君取りて見居給へり。

○武藏野といへば　古今六帖、「知らねども武藏野といへばかこたれぬ、よしやさこそは紫のゆゑ。」「武藏野」は紫草の名所。「かこたれぬ」は、緣あるより懷かしく思ふをいふ。「武藏野といへば紫の緣に懷かしき如く、知らぬ人なれど、緣ある人は懷かしく思ふ」

少し小さくて、

ねは見（根、寢）ねどあはれ（愛ラシ）とぞ思ふ武藏野の

露分けわぶる草のゆかりを

○「ね」見ねど」は、添寝はせねど。「露分けわぶる草」は、露を分けて尋ぬる草にて、武蔵野に名高き紫草をいふ。紫草のゆかりといふは、藤壺の宮の縁をいふ。

○「まだ夫妻といふにはあらねど、藤壺の宮の縁と思ふに、姫君を愛らしと思ふ。」

○これらの歌より、この姫君を「紫の上」といふ。

とあり。「いで君も書き給へ。」と宣へば、「まだえようは書かず。」とて、見上げ給へるが、何心もなくうつくしげなれば、うちほゝ笑み給ひて、「よからずとも、むげに書かぬこそ悪けれ。教へまゐらむかし。」と宣へば、うち側みて書き給ふ手つき、筆執り給へる様の幼げなるもらうたくのみ覚ゆれば、我が心ながら怪しと思す。「書きそこないつ。」と、耻ぢて隠し給ふを強ひて見給へば、

かこつべき故を知らねばおぼつかな
いかなる草のゆかりなるらむ

○「いかなる縁にて懐かしと思ひ給ふにや、その故を知らねば心許なく思ふ。」

と、いと若けれど、生ひ先見えてふくよかに書き給へり。御手は故尼君にぞ似たりける。今めかしき手本習はゞいとよう書き給ひてむと見給ふ。雛などわざと屋ども作りつゞけて、諸共に遊び給ふ。

かの残りし人々は、宮渡り給ひて尋ねさせ給ひけるに、聞えむ方なくてわびあへりける。「暫し人に知らせじ。」と君も宣ひ、少納言もしか思ふことなれば、切に口堅めやりけり。たゞ、「行方も知らず少納言が率て隠し奉りたる。」とのみ申すに、宮もいふ甲斐なう思して、「故尼君もかしこに渡り給はむことを、いと物しと思したりしことなれば、少納言のさし過したる心のあまり、『便なし。』などおいらかにいはで、心に任せて率てはふらかしつるなンめり。」と、泣く〳〵歸り給ひぬ。「もし聞き出でなば告げよ。」と宣ふにも、人々は煩はしと思ふ。僧都の御許にも尋ね給へど、あとはかなく、若君の可惜しかりし御容貌など戀しく悲しと思す。宮の北の方も、今は母君を憎しと思ひ給ひける心も失せて、若君を我が心のまゝに生ふし立てむと思しけるに違ひぬるを、口惜しう思しけり。西の對にはやう〳〵人々参り集りぬ。御遊がたきの童女、兒ども思ふこともなくて遊びあへり。若君は、君のおはせずなどして寂しき夕暮などばかりぞ、尼君を戀ひ給ひて、うち泣きなどし給へど、父宮をば殊に思ひ出で給はず。もとより見馴らひ給はねば、今はたゞこの後の親をいみじう睦び纏し給ふ。君、外よりおはすれば、まづ出で向ひてあはれにうち語らひ、御懐に入り居て、いさゝか疎く耻かしとも思ひ給はず。いみじうらうたきことなりけり。賢しら心あり何くれと煩はしきことになりぬれば、男も心置かれ、女も恨みがちに、おのづから思の外のことも出で來れど、今はたゞいとをかしき弄なり。女などにてもかばかりの齢になりぬれば、心安くうちふるまひ、隔なき様に起き臥しなどはすまじけれど、これはいと様變りつるかしづき種なりと思したゝンなり。

末摘花　すゑつむはな

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月經れど思し忘れず。こゝもかしこもうち解けず、心深き氣配なれば、かの氣近く懷かしかりしあはれに似るものなう戀しく覺え給ふ。いかで事々しき覺なく、いとらうたげならむ人を見つけてしがなと、懲りずまに思しつゞけ給へば、少しゆかしげに聞ゆるわたりは御耳止り給へど、さてもやと思し寄る人も、一行をほのめかし給ふに、靡きまつらぬはをさ〳〵あるまじきに、いと珍しからず思し給ふ。またつれなく心強き人は、あまり身の程知らぬやうなれど、さても過し果てず、やがて餘波なく崩れて、なほ〳〵しき方に定まりなどすれば、君は宣ひさして止み給ひぬるも多かりけり。

かの空蟬の君を、物の折々には口惜しう思し出づ。今一人荻の葉の君も、さるべき便ある時は驚かし給ふ折もあるなるべし。火影の亂れたりし樣、思し出づるも、またさやうにて見まほしく思す。

○火影の亂れたりし樣　碁打ちながらしどけなかりし樣を火影に見しなり。空蟬の巻に出づ。

大方餘波なき物忘れをぞし給はざりける。

左衞門の乳母とて、大貳の尼君のさし次に睦じく思したるが女、

○大貳の尼君　源氏の君の乳母、惟光の母なり。尼になりしこと、夕顔の巻にあり。

大輔の命婦とて内裏にさぶらふは、○わかむどほりの兵部大輔なるが女なりけり。

○わかむどほり　「王家裔」と書く。皇子の御子孫の位も低くなりたるなりといふ。

いといたう色めかしき若人にてありけるを、君も召し使ひなどし給ふ。母は筑前の守の妻になりて、かの國に下りければ、父君の許を里にて行き通ふ。故常陸の親王の御齢の末にまうけていみじうかしづき給ひし御女、心細げに殘り居給へるを、命婦、事の序に語りまゐらせければ、君、哀れのことやとて問ひ聞き給ふ。命婦、「心ばへ容貌など深き事は知り侍らず。いみじう引き入りて人疎うもてなし給へど、さるべき折など、物越しにてぞ語らひ侍る。琴をぞ懷かしき語らひ人と思ひ給へる。」と申せば、君、「○三つの友にて今一種は心憂くやあらむ。

○三つの友　琴、詩、酒をいふ。「今一種」は、酒をいふ。

我に聞かせよ。父親王のさやうの方にいと由づきておはしければ、なみ〳〵の手使にはあらじと思ふ。」と語らひ給ふ。命婦、「さやうに聞し召す程には侍らずやあらむ。」といへば、「いたう氣色ばましや。この頃の朧月夜に忍びて物せむ。内裏よりまかンでよ。」と宣へば、煩はしと思へど、内裏わたりものどかなる春のつれ〳〵にまかンでぬ。父の大輔もこゝには時々ぞ通ひける。命婦は繼母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりを睦びて、こゝには來るなりけり。君は、宣ひしもしるく、十六夜の月をかし

き程におはしたり。命婦、「いとかたはらいたきことかな。物の音澄むべき夜の様にも侍らざンめるに。」と申せど、「なほあなたに渡りて、たゞ一聲催しまゐらせよ。空しく歸らむが口惜しかるべきを。」と宣へば、かく亂がはしき所に置きまゐらせて畏しと思へど、○寢殿に參りたるに、

○寢殿　貴族の邸宅の本殿、主人の居る殿なり。（「當時の世相」第四圖）

まだ格子もさながら、姫君は梅の香をかしきを見給ひておはす。よき折かなと思ひて、「御琴の音いかに優り侍らむと思はれ侍る夜の氣配に誘はれ侍りてなむ。常は心あわたゞしき出入に、承らぬこそ口惜しけれ。」といへば、姫君、「物のあはれ知る人にこそはあンなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりにやは。」と宣へど、琴召し寄するも心許なう、君のいかゞ聞き給はむと胸潰る。ほのかに掻き鳴らし給ふ。いたう荒れ渡りて寂しき所に、さばかりやむごとなき人の事々しくかしづきたりけむ餘波もなくて、いかに思し殘すことなからむ。かやうの所にこそは、昔物語にも、をかしうも哀れにも、樣々なることどもありけれなど思ひつゞけ給ひて、物やいひ寄らましと思せど、うちつけなりとや思さむと、心耻かしくてためらひ給ふ。命婦才あるものにて、いたう聞き馴らさせ奉らじと思ひければ、「曇りがちに侍るめり。客人の來むといひ侍りつるに、あらずば厭ひ顏にもこそあらめ。今心のどかに。御格子參りなむ。」とて、いたくもそゝのかしまゐらせず歸りぬれば、君、「なか〳〵なる程にて止みぬるかな。聞き分くべき程にあらで、口惜し。」と宣ふ。姫君の御氣色をかしげなりと思したり。「同じくは氣近き御氣配立ち聞きさせよ。」と宣へど、命婦は、心にくき程にてこそと思へば、「いでや、いとかすかなる御有樣なるに思ひ屈して、心苦しげにおはすれば。」といへば、「げにさもあること。俄に人も我もうち解けて語らふ際は際とこそあれ。

○際は際とこそあれ　今少し低き身分の人のことなりの意。

あはれと思ひまゐらすれば、さやうの氣色をほのめかせ。」と語らひ給ふ。また契り給へる方やありけむ、いと忍びて歸り給ふ。命婦、「あまりまめやかにおはしますと、上のもて惱み給ふこそ可笑しう思ひ侍れ。かやうの御やつれ姿をいかでかは御覽じつけむ。」と申せば、立ち返りうち笑ひ給ひて、「異人のいはむやうに咎な顯はされそ。これをあだ〳〵しき振舞といはゞ、女の有樣いかに心苦しからむ。」と宣へば、我をあまりあだめいたりと思して、折々かう宣ふに、耻かしくて物もいはず。

君は、姫君の氣配聞くやうもやと思して、やをら寢殿の方に立ち出で給ふ。透垣のたゞ少し折れ殘りたる蔭の方に立ち寄り給ふに、もとより立てる男ありけり。誰ならむ、心掛けたる好き者ありけりと思して、蔭につきて立ち隱れ給ふ。頭中將なりけり。この夕つ方、內裏より諸共にまかンで給ひけるに、君はやがて大殿にも寄らず、二條の院にもあらで引き別れ給ひければ、いづちならむと心許なく